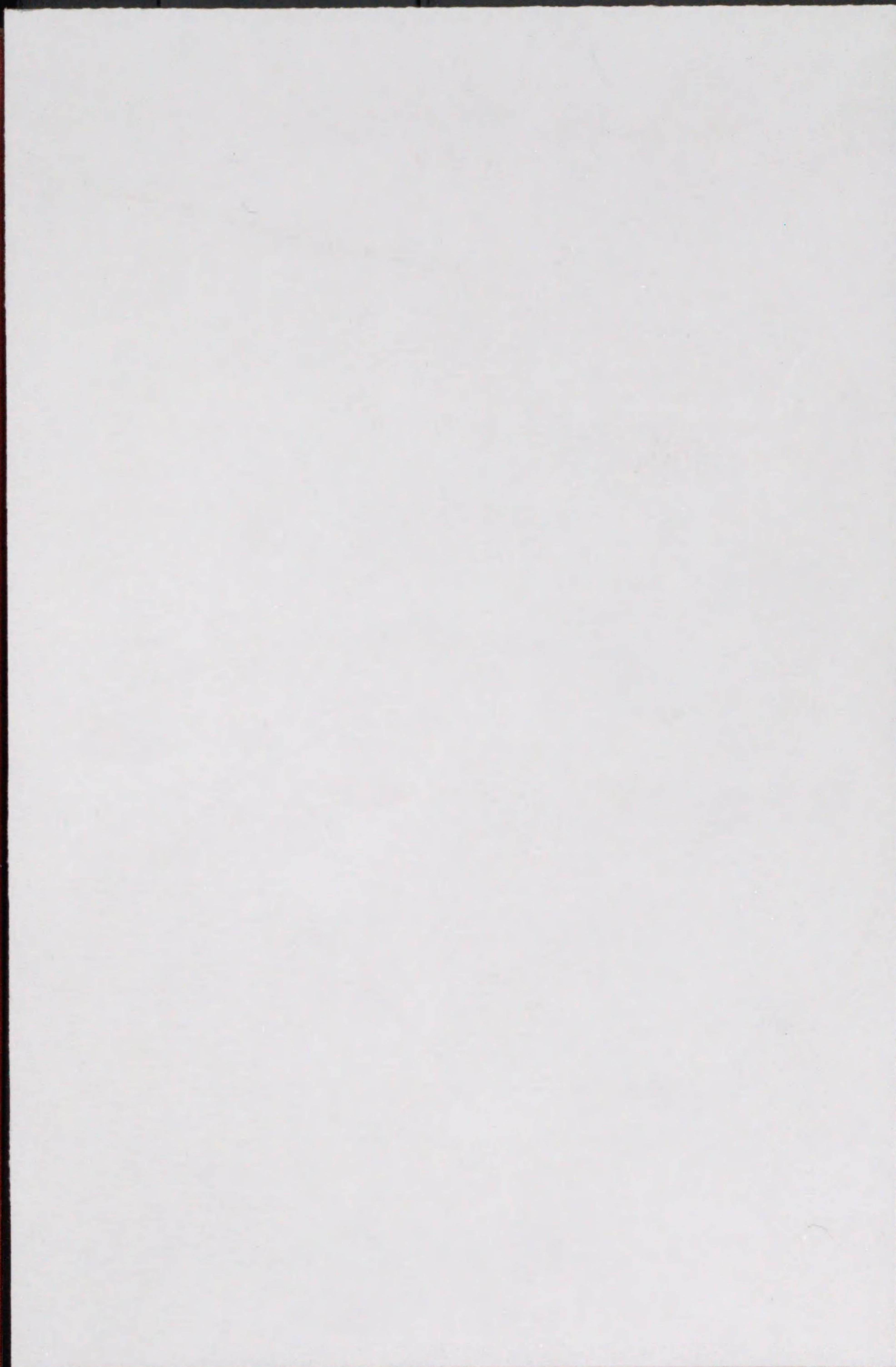


556-484



1200700065211



SANSEIDO
KANDA TOKYO

PRICE ¥ 2.70



Handwritten signature or initials in the bottom left corner, possibly reading 'F/c'.

SEIDO
TOKYO

270



訂增

國民日本歷史

文學博士 三上參夫
文學博士 芳賀矢一
選評

文學博士 幸田成行
文學博士 吉田東伍
選評

文學士

高橋俊乘 著

SEIDO
TOKYO

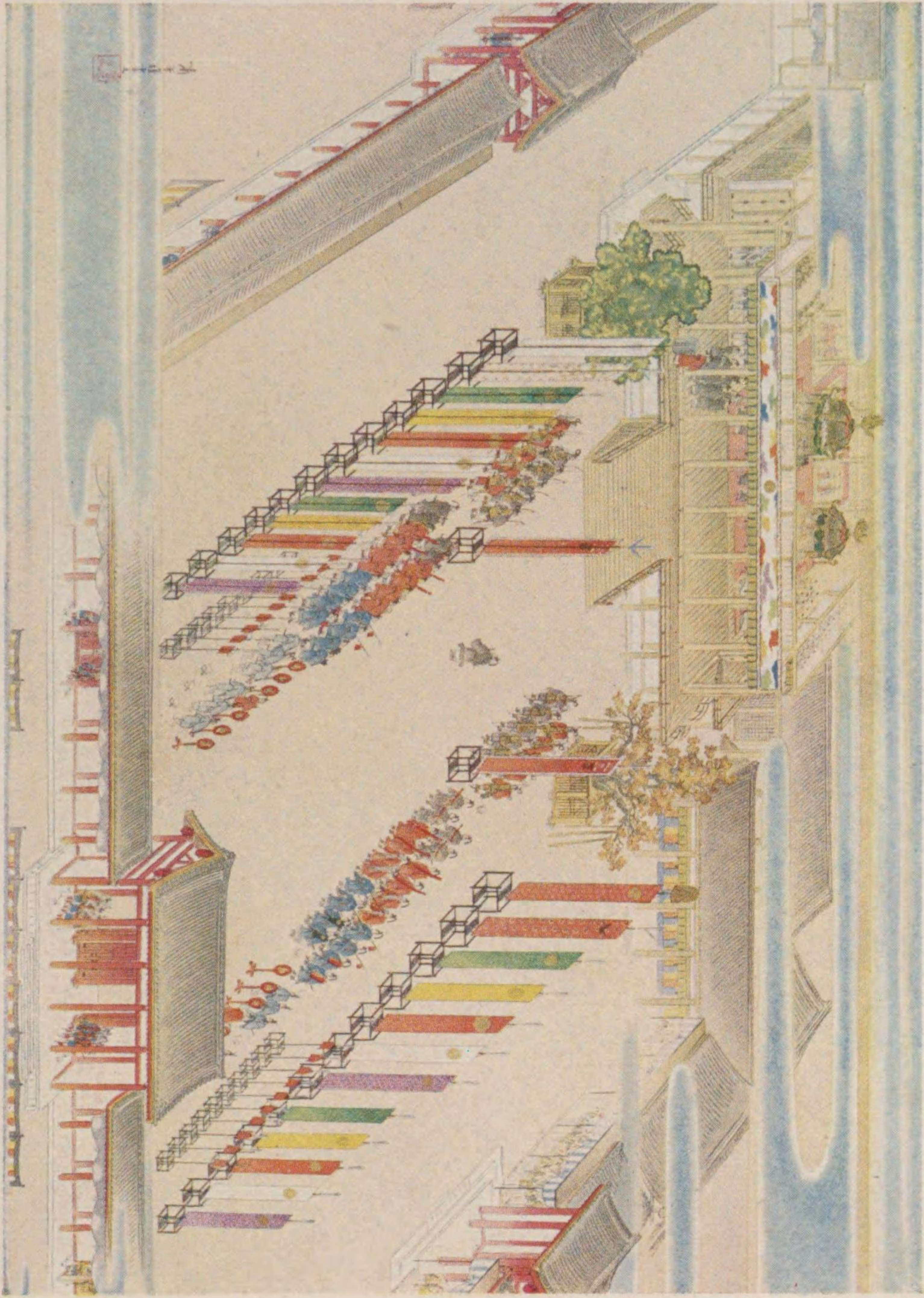
2.70

文學博士 三上參次
文學博士 芳賀矢一
選評

訂增
國民日本歷史

文學博士 幸田成行
文學博士 吉田東伍
選評

文學士 高橋俊乘 著



一 今上天皇御即位式 (猪谷嘯谷氏筆)

556
484



I 種
W

1200700065211

國民日本歴史の序

大正四年今上陛下即位の大禮を擧げさせらるゝに當り、親しく紫宸殿大嘗宮の嚴儀を拜觀せし者は勿論、都鄙内外到る所に奉祝の盛典を觀たる國民は、誰しも義即君臣情親子の國體を慶賀せざるは無く、何人も今更の如く國史の悠久なるを思ひ、之を尊重する念の頓に湧起するを禁じ得ざりしなり。此の時に當り、書肆富山房が新たに簡明にして通俗なる小國史を得て、之を一般家庭の用に供し、以て國史の智識と趣味とを普く國民に及ぼさんとせる計畫は、眞に時機に適したるものといふべし。而して懸賞の方法によりて良書を未だ名を成さざる篤學者の中に求め、以て新進の秀才を世に紹介する

の途を開かんとせしは、是れまた出版界の一美事となすを妨げず。予が公務に忙殺せられ、殆んど他事を顧るの暇無きにかゝはらず、欣んでこれが選評の需に應ぜしも、全く此の擧の國民教育の上に裨補する所多かるべきを信じたればなり。

選評の結果は予輩の期待に適應するに至らず、不幸にして一等の選を闕きたり、小林一氏の著の構案新奇にして行文また趣味多きを始めとし、三四稍佳良なるものありしが、尙各一長一短あるを免れざりき。是を以て衆議の末高橋俊乘氏の著の最も平明穩健にして疵瑕少きを選び、之を當選の首位に推して先づ世に公にすることゝせり。此の擧學界の一刺戟となりて、更に幾多の優良なる此の類の書の世に出づるに至らば幸甚といふべし。高橋氏は尙學窓に在るの人

なり。此の書庶幾くは氏の前途を祝福せんか。

露國先きに崩れ、獨塊また後に潰えて、其の狀史學に見る所の亡國の慘なるよりも慘なるものあり。今や銃砲軍艦の大戦争は將に終熄せんとするも、思想界の混亂は世界に互りて益、劇甚なるものあらんとす。我邦にも既に議論を好める一二小人の正邪曲直を顛倒して憚らざるものありと聞く。此の時に當り、我が國民に讀み物として薦めたきは國史の書より急且つ切なるは無し。是れ予が此の書の印行もまた時機を得たるを喜び、卷首に一言する所以なりとす。

大正七年十一月

文學博士 三 上 參 次 するす

序

國民と國史とは相離るゝことの出来ない關係を有してゐることは言ふまでも無いことである。國史があつて國民が成立ち、國民があつて國史が存續して行く。兩者の間柄は言はゞ親子のやうなものであつて、國民の血の中には國史が流れて居り、國史の文の裏には國民が動いてゐるのである。國民が國民として存在する間は、此の關係は破れないので、若し此の關係が破れたり薄らいだりしたならば其の時は即ち國民が國民として成立たなくなつたり微力になつたりする時である。此の意味からして、國史と國民とは相離るゝことが出来ないのみでは無く、決して相離れてはならないのである。

又上に記した意味からして、國史は國文と相離るゝ事の出来難い關係を有してゐる。國史は國文を以て記されるのを最善とする。撰者の技能が國文に乏少で他の文には優越である場合とか、又は撰者が他國民に示さうとする意圖を有してゐる場合とか、又は撰者が特別なる趣味性の囚ふるところとなつてゐる場合とか、又は時代の一般の状態が國文を力無くしてゐる場合とか、いづれにせよ特別事情の存在せぬ以上は、國史は國文を以て記さるべきである。我邦の史籍は、漢文をもて記されたのが少く無いが、それは種々の事情から餘儀無くされて然様な事實を遺すに至つたのであると云ひたい。國史はどうしても國文をもつて記されるのを最善とする。國文で無ければ國史の事蹟の眞貌眞氣眞情趣を傳へ得ぬのみで無く、國文で無

ければ國民と國史とを親しましむることが難いからである。又此の意味からして、國史は國文の中でも上古的中古的近古的等で無い其の時代の國文を以て綴られるのを善しとする。もつとも此も亦種々の事情から、其の時代に距離のある時代の文をもつて記さるゝ事のあるのと、又其の便利のあるのを全然否む譯にも行かぬが、大體に於ては其の時代の國民に最も親しい文をもつて國史に記さるゝことは、最善であるのみならず最要の事である。國民と國史と國文とは元來親しむべきものであつて、疎かるべきものでは無いからである。

富山房が現代的國文をもつて書かれた國史を國民に提供せんとしたのは、實に適切なことで、夙くから此の如き企圖計畫は幾度と無

く試みられて宜い譯であつた。今其の企圖計畫が具體的にされて、こゝに高橋氏の撰にかゝるところの史が公にさるゝに至つたのは、實に悦ばしいことである。相親しかるべきものは、まさに愈々親しかるべき勢をなしてゐる。若夫れ氏の勞苦と富山房の發意とは、もとより多とすべきである。

大正七年十一月

露伴學人識

序

日本の國體は世界に冠絶してゐる。開闢以來君臣の分が定まつて居つて、未だ曾て皇室と人民との間に争の起つたことが無い。攝關時代、將軍時代、これは朝臣が中間に居て、大權を竊んだ時代であるが、さういふ際でも、一般人民の皇室を尊む心は少しも變らず、皇室に於かせられても、祖宗以來の御仁慈を以て、常に臣民に臨ませられたのである。それであればこそ、萬世一系、世々を経て、國の光を増し來つたのである。外國の歴史が、常に王室對人民争鬪の歴史で、頻りに革命を繰返して居るのは雲泥の相違である。この事を十分に國民に知らせるのが、最も大切であるとの考から、一昨昨

年の夏富山房に勧めて、青年國史讀本の懸賞募集をやらせたのである。無味乾燥な教科書よりも、青年讀本、家庭讀本としての國史が必要と思つたからである。應募の原稿すべて七十五篇、之を審査した結果、本書が其の第一位に推されたのである。富山房が審査を依頼した諸君は三上、吉田、幸田の三博士と余とであつた。昨年夏頃の頃已に審査が終つたのであつたが、色々な事情から出版が今日まで延びたのであつた。今や世界の大勢がいよゝゝ國史讀本の要求を大ならしめたことは、心ある人の感を同じうする所であらう。唯一つ遺憾なのは、審査の任に當られた吉田博士が、今 已に亡き人となられた事である。茲に本書出版の由來を述べて、序文に代へる。

大正七年十一月

芳賀 矢一 しるす

例言

大正四年十一月、書肆富山房が、「大禮記念事業の一端として、廣く家庭に誦讀せらるべき國史」をいふ條件で、三上芳賀幸田吉田四先生鑑選の下に、普く懸賞募集を行つた結果、應募七十五篇の中の首位に左の二氏の著が推された。

京都帝國大學文科大學在學

高橋 俊 乘 氏

埼玉縣粕壁小學校訓導

小 林 一 氏

その後まづ高橋氏の著を出版する事になつて、重ねて著者みづから満足する限りの再訂を経た上、特に東京帝國大學文科大學史料編纂掛文學士龍腦先生に、全篇に互つて史實と文辭にきりきり切切な考査と添削を願つて、萬々手落ちの無いことをつとめた。本書發表の意外に遅れたのもその爲であつて、此の段は殊に他の應募者諸氏に告げて、併せて弊社の微意に賛同せられた御厚志を謝する次第である。

大正七年十二月

増訂版序

大正天皇の即位の御大禮が行はれた大正四年の秋、京都帝國大學文科大學に入學した予は、盛儀の催される京都に始めて住んで、鹵簿を拜觀したり、市街に於ける奉祝の賑ひを見て、非常な感激に打たれたのであつた。翌四年一月、富山房から家庭讀物としての日本歴史を懸賞募集されたのを見て、御大典の盛儀に感佩した精神を本として、今まで殆ど娯樂として讀んで得た國史上の知識をまごめて見たいと思ひ立つて出來たのが本書である。純學問的な國史ではなく、一般家庭向の國史として、即ち教育的として出來るだけ興味の豊かな、文章の平易な物にしたいと考へたのであるけれども、出來上つて見るに、中々豫定のやうに出來ないので、適當の機會に訂正したいと希望してゐた。大正十二年の關東の大震災の際、紙型が焼けた爲、版を組みかへたので、前版以後數

年間の事件を最後に増補したのであるが、その折は震災後、諸事混雑の際にてあまり暇もなかつたので、初版以来の本文に十分の訂正も出来なかつた。その後、昭和三年に今上天皇の御即位式が京都に行はれた。予は京都に住んでゐる爲、光榮にも再度盛儀を拜觀するこゝが出来た。この光榮を記念する爲、時間の許す限り全文の訂正を施し、かつ大正十二年以後の記事を増補したいと思ひつゝいた所が、富山房社長も全く予に同感で、十分の訂正増補を望まれたから、最近事件を増補するに共に、從來の本文を出来るだけ平易にし、かつ史實を詳述し興味ある傳説を附加し、挿圖を全部取換へ地圖を新に加へるこゝをした。豫想だけは立派に立て、着手したけれども、出来上つて見れば、まだ不満足なこゝが多い。事情の許す限り、將來永く増訂して漸を追うて完全に近づきたい事がせめてもの望である。

昭和五年一月
高橋俊乘しるす

増訂 國民日本歴史目次

第一 高天原……………一	吾妻はや…酒折宮…白鳥の三陵…成務天皇
國民と國史…天照大神と素戔嗚尊…天岩戸…八岐の大蛇…大國主命…國引き	第六 神功皇后 文物の輸入……………二六
第二 天孫降臨……………八	神功皇后…朝鮮半島の形勢…新羅征伐…三韓の服屬…文物の輸入…王仁の來朝
御國ゆづり…三種の神器…天孫降臨…海の幸山の幸	第七 仁德天皇と雄略天皇……………三三
第三 神武天皇……………一三	菟道稚郎子…仁德天皇…民の烟…武内宿禰…雄略天皇…内宮と外宮…葛城山の猪
神武天皇…八咫鳥…久米歌…金の鴉…櫛原…紀元節と神武天皇祭	第八 朝鮮の變遷……………三六
第四 崇神天皇と垂仁天皇……………一九	繼體天皇…新羅の侵略…任那の滅亡…調伊企儼
神器の奉遷…四道將軍…調物…任那の保護…皇大神宮…角力の始…殉死の禁	第九 佛教の傳來と蘇我物部兩氏の争……………四二
第五 日本武尊……………二三	佛教の傳來…佛教の主旨…氏と姓…蘇我物部兩氏の争
日本武尊…熊襲征伐…蝦夷征伐…燒津…	

目次

第十 聖德太子……………四
 聖德太子：種々の新政：冠位十二階：十
 七憲法：佛教の興隆：法隆寺：美術工藝
 ……奇蹟

第十一 支那との交通……………五〇
 支那の文化：對等の交通：小野妹子と留
 學生：遣唐使

第十二 大化の改新……………五三
 蘇我氏の無道：中臣鎌足：蘇我氏の誅：大化の改新：新政の精神

第十三 朝鮮と蝦夷 律令の撰定 五
 齊明天皇：蝦夷の鎮定：上毛野形名の妻
 ……阿倍比羅夫：朝鮮半島の變遷：大津の宮：律令の撰定：律令の内容：官職と位階

第十四 奈良奠都……………六六
 和銅改元：奈良奠都：養老の美泉

第十五 聖武天皇 佛教と文化……………六八
 聖武天皇：藤原氏の四氏：吉備眞備と阿部仲麻呂：古事記、風土記、日本書紀：萬葉集：柿本人麻呂：その他の歌人：大佛建立：奈良の七大寺：奈良時代の美術：奈良時代の佛教：行基：光明皇后：奈良時代の風俗

第十六 和氣清麻呂……………八一
 橘氏：藤原廣嗣：藤原仲麻呂：道鏡の非望：和氣清麻呂の忠烈：和氣廣虫：光仁天皇：中將姫

第十七 桓武天皇 佛教と漢文學……………八七
 平安奠都：平安京の規模：平安京の變遷：里内裏：蝦夷の鎮定：坂上田村麻呂：藥子の亂：最澄と空海：本地垂迹説：漢文學：小野篁と都良香：六國史と格式：教育

第十八 藤原氏と攝政關白 菅原……………

目次

道眞……………九七
 藤原氏の繁榮：承和の變：藤原良房：在原業平：藤原基經：菅原道眞：道眞の榮達：道眞の左遷：配所の菅公：北野天神：延喜の治

第十九 地方の情況 承平天慶の亂 朝鮮半島と渤海……………一〇八
 莊園の發達：地方の荒廢：源賴光と四天王：源平の武士：承平天慶の亂：田原藤太：新羅と高麗：渤海の入貢：遣唐使の停止

第二十 朝臣の榮華 藤原氏家門の爭……………一二九
 朝臣の榮華：天曆の治：安和の變：藤原兼通と兼家：藤原氏家門の爭：花山天皇：藤原伊周と道長：一條天皇と三條天皇：御堂關白

第二十一 平安時代盛時の文化……………二九

藤原時代の文化の特色：漢文學と假名の發明：六歌仙：紀貫之：古今和歌集：清少納言と紫式部：才女の輩出：三船の才：三蹟：繪畫：淨土信仰：鳳凰堂：定朝名神大社：服裝と住宅

第二十二 刀伊の入寇 陸奥の亂……………一四五
 刀伊の入寇：藤原隆家の功：平忠常の叛：前九年の役：源義家：後三年の役：足柄山：伏兵發見：金色堂

第二十三 後三條天皇と白河法皇……………一五五
 後三條天皇：藤原氏の衰運：白河法皇：院政：僧兵

第二十四 源平二氏の盛衰……………一六一
 平忠盛：保元の亂：鎮西八郎：白河殿の夜討：骨肉の戰：源平二氏の形勢：平治の亂：待賢門の戰：源氏の敗北：常磐御前

第二十五 平氏の繁榮……………一七六

平相國…禿童…高倉天皇…小督…鹿が谷の會…重盛の諫言…俊寛…有王の島下り…清盛の無道…清盛の事蹟…嚴島神社

第二十六 平氏の滅亡……………一九〇

源三位賴政…鶴退治…福原遷都…源賴朝の舉兵…富士川の戰…牛若丸…東大寺興福寺燒打…木曾義仲…清盛の薨…礪波山の戰…齋藤實盛…平家の都落…薩摩守忠度…義仲の反…池月と磨墨…宇治川の先陣…義仲の最後…一の谷の戰…鴨越…平敦盛と熊谷直實…逆櫓…屋島の戰…佐藤嗣信…扇の的…壇の浦の戰…大原御幸

第二十七 鎌倉幕府の創立……………二二二

鎌倉幕府の創立…賴朝と義經との不和…靜御前…奥州征伐…守護地頭…武家政治の始…仁田四郎忠常…曾我兄弟

第二十八 源氏の滅亡と承久の亂

……………二二九

賴家將軍…實朝將軍…和田合戰…實朝と公曉…源氏の滅亡…尼將軍…後鳥羽上皇…承久の亂…新島守

第二十九 北條氏の治……………二四〇

北條泰時…明惠上人…後嵯峨天皇…北條時賴…諸國行脚…青砥藤綱

第三十 鎌倉時代の文化……………二四七

鎌倉武士…新佛教…和歌…小倉百人一首…新古今集…軍記物…美術工藝

第三十一 元寇……………二五七

北條時宗…宏覺禪師の祈禱…文永の役…防戰の用意…外征の企…弘安の役…元軍覆沒

第三十二 北條氏の滅亡……………二六四

兩皇統の交立…後醍醐天皇…北條高時…正中の變…元弘の亂…阿新丸…笠置行幸…笠置落…楠木正成…赤阪城…兒島高德

次 目

…隱岐遷幸…護良親王…吉野城…村上義光…千早合戰…諸國の官軍…菊池武時…六波羅陷落…北條氏滅亡

第三十三 建武の中興……………二六七

建武の中興…中興の新政…論功行賞…中興の失敗…二條河原の落首…新田氏と足利氏…中先代の亂…護良親王の御最期…足利尊氏の叛

第三十四 吉野の朝廷……………二九五

多々良濱の戰…櫻井の驛…湊川の戰…正成の戰死…尊氏の入京…吉野の朝廷…金が崎の戰…北畠顯家の戰死…新田義貞の戰死…後醍醐天皇崩御…後村上天皇…北畠親房…楠木正行の參内…如意輪堂…四條畷の戰…足利氏の内訌…親房の薨去…懷良親王…菊池武光…筑後川の戰…長慶天皇…宗良親王…熊王丸…後龜山天皇の京都還幸…觀心寺…太平記

第三十五 室町幕府の盛時……………三二二

足利義滿…室町幕府…義滿の驕奢…支那との交通…倭寇…朝鮮の興起

第三十六 永享嘉吉の變 應仁の亂……………三二六

應永の亂…永享の亂…嘉吉の亂…下剋上…足利義政…惡政…相續爭…應仁の亂…京都の荒廢…銀閣

第三十七 室町時代の文化……………三三七

佛教…詩歌…繪畫…建築…謠曲…風俗

第三十八 足利氏の季世……………三四五

幕府の末路…朝廷の式微…諸侯の勤王

第三十九 群雄割據……………三五〇

戰國時代…關東の分裂…江戸城…太田道灌…北條早雲…北條氏綱…氏康…今川氏…桶狭間の戰…武田信玄…川中島の戰…信玄の上洛…上杉謙信…謙信の義心…

次 目

次 目

近畿の形勢：一向一揆：大内氏：毛利元就：中國の形勢：九州の形勢：四國の形勢：奥羽の形勢

第四十 西洋人の渡來……………三七三

シバンガ：西洋人の來航：鐵砲の傳來：切支丹宗：南蠻寺

第四十一 織田信長……………三七六

織田信長の出身：信長の入京：足利氏滅亡：近畿地方の平定：安土城：武田氏滅亡：中國征伐：明智光秀：本能寺の變：森蘭丸：山内一豐の妻

第四十二 豊臣秀吉 朝鮮征伐 三九〇

豊臣秀吉：秀吉の出世：山崎の戰：賤が岳の戰：小牧の戰：四國征伐：九州征伐：小田原征伐：秀吉の孝心：聚樂第行幸：民政：美術工藝：外交：朝鮮征伐：講和：再度の出征：秀吉の人物：曾呂利新左衛門

第四十三 徳川家康……………四二一

家康の少時：江戸城：家康の立身：五大老：石田三成：關が原の戰：西軍大敗：諸將の賞罰：大阪の處分：江戸幕府の創立：鐘銘事件：大阪の役：冬の陣：夏の陣：木村重成：豊臣氏の滅亡：家康の人物

第四十四 江戸幕府の組織とその初政……………四三〇

諸侯に對する政策：諸侯の區別：諸役人：板倉勝重：朝廷に對し奉る政策：明正天皇：徳川家光：春日局：日光廟

第四十五 外國との交通 天主教の禁と鎖國……………四三九

朝鮮との交通：明・琉球との交通：西洋諸國との交通：太平洋横斷：朱印船：山田長政：天主教の禁：島原の亂：鎖國の利害

第四十六 元祿時代……………四五二

第五十 文化文政時代 天保の改革……………四九六

文化文政時代：學問・藝術：教育の普及：心學：繪畫：天保の改革

第五十一 開港の始末……………五〇三

幕府の衰運：洋學者の禍：ペリーの來朝：幕府の周章：ペリーの再來：和親條約：吉田松陰：ハリス：通商條約：井伊直弼：安政の大獄：櫻田門外の變

第五十二 江戸幕府の衰亡と大政奉還……………五一九

和宮東下：公武合體説：幕政の改革：長州の攘夷：大和行幸の議：七卿落：急進派の擧兵：蛤御門の變：長州征伐：第二長州征伐：孝明天皇崩御：明治天皇踐祚：大政奉還

第五十三 明治維新……………五三三

王政復古：新政府組織：鳥羽伏見の戰

目次

第四十七 江戸幕府の中興……………四六九

犬公方：新井白石：白石の改革：白石の苦學：徳川吉宗：吉宗の新政：蘭學の起り：大岡越前守：産業の發達

第四十八 寛政の治 尊王論と國學の勃興……………四七六

田沼父子：松平定信：御所再建：尊王論：竹内式部と山縣大貳：國學の發達：本居宣長：高山彦九郎と蒲生君平：頼山陽

第四十九 海防論と洋學の發達 四八九

歐洲列國の東方經營：蘭學：林子平：口シヤ人の來航：邊海の警備：蝦夷地の經營：イギリス人の暴行：外國船打攘の令

目次

勝安房守：戊辰の役：江戸城明渡し：彰義隊：白虎隊：五箇條の御誓文：即位と遷都：版籍奉還：廢藩置縣：文物の改良：學制頒布：徴兵の制

第五十四 臺灣征伐と西南の役 五八

外交の新方針：使節派遣：征韓論：征韓論の破裂：臺灣征伐：琉球の處分：千島樺太の交換：地方の騒亂：西南の役：熊本籠城：維新の三傑

第五十五 憲法發布 五六一

民選議院設立の建議：政府の漸進策：國會開設の大詔：民間の政治運動：憲法の起草：内閣制度：憲法發布：欽定憲法：皇室典範：教育勅語：第一回帝國議會：三條岩倉二公

第五十六 明治二十七八年戰役 五七五

江華島事件：明治十五年の變：明治十七年の變：天津條約：清國の橫暴：東學黨

の亂：戰爭の初期：宣戰の大詔：平壤の戰：黄海の戰：旅順陥落：威海衛陥落：講和：三國干涉：臥薪嘗膽：臺灣の經營

第五十七 條約改正 明治三十二年 五九四

年清國事變：條約改正：日清戰後の朝鮮：列強と支那義和團匪：北清事變：日英同盟

第五十八 明治三十七八年戰役 六一

ロシアの滿洲經營：我が國の抗議：仁川旅順の海戰：宣戰の大詔：旅順の攻撃と閉塞：廣瀨中佐：金州半島封鎖：滿洲軍の組織：黄海と蔚山沖の海戰：遼陽の戰：明治天皇の御仁愛：沙河の會戰：旅順の攻圍：旅順の開城：奉天の會戰：日本海の海戰：樺太占領：講和條約：國民の後援

第五十九 戰後の經營と韓國の併合 六三三

合

戰後の經營：戊申詔書：諸外國との關係：韓國の保護：伊藤博文：韓國の併合：朝鮮の統治

第六十 明治天皇の崩御と大正天皇の即位 六三一

明治天皇の崩御：天皇の聖德：大正天皇の踐祚：明治天皇の大葬：乃木大將の殉死：昭憲皇太后：大正天皇の即位式

第六十一 世界大戰役と我が國 六三七

世界大戰役：對獨宣戰：膠洲灣攻撃：ドイツ諸島の占領：シベリア出兵：日支交渉：パリ講和會議

第六十二 文化と經濟の發達 六四三

宗教の變遷：教育と學術の進歩：文藝の發達：交通と産業の發達：社會事業の進歩

第六十三 政黨政治の發達 六五一

政黨の變遷

第六十四 最近の内治外交 六五三

ワシントン會議：日露交渉：アメリカへの移民問題：支那との外交關係：關東大震災：精神作興の詔書：金の輸出禁止と解禁

第六十五 大正天皇の崩御と今上天皇の即位 六六一

今上天皇東宮の御時の御外遊：大正天皇の崩御：今上天皇の踐祚：大正天皇の大葬儀：今上天皇の即位式と大嘗祭

附録 一 系譜

二 御歴代表並に年表

増訂 國民日本歴史挿圖目次

一	今上天皇御即位式(三色版)……………	卷頭
二	埴輪製作……………	三—三三
三	夢殿……………	四—四九
四	法隆寺……………	四—四九
五	法隆寺金堂の釋迦三尊と三月堂の月光菩薩……………	四—四九
六	蹴鞠……………	五—五五
七	唐招提寺金堂……………	七—七九
八	日唐海上交通の困難……………	七—七九
九	奈良時代貴婦人の遊戯……………	七—七九
一〇	中將姫……………	八—八七
一一	道眞の左遷……………	一〇—一〇五
一二	平等院鳳凰堂……………	一四—一四三
一三	鳳凰堂の内部と本尊……………	一四—一四三
一四	平安時代貴族の宴遊(三色版)……………	一四—一四三
一五	後三年の役……………	一五—一五三
一六	平治の亂……………	一七—一七三
一七	平重盛の諫言……………	一八—一八五
一八	大原御幸……………	二〇—二二
一九	日蓮上人……………	二四—二四九
二〇	一遍上人繪卷(三色版)……………	二四—二四九
二一	東大寺南大門二王……………	二五—二五五
二二	蒙古襲來……………	二六—二六一
二三	田樂……………	二六—二六七
二四	金關……………	三三—三三五
二五	應仁の亂……………	三三—三三五
二六	雪舟筆夏冬山水……………	三四—三四三
二七	能樂……………	三四—三四三
二八	南蠻寺……………	三七—三七七
二九	聚樂第……………	四〇—四〇三
三〇	柳櫻圖……………	四〇—四〇三
三一	大阪夏の陣……………	四二—四三九
三二	大名道中……………	四三—四三三
三三	朱印船……………	四四—四四五

三四	江戸時代中期の京都……………	四五—四五五
三五	元祿時代の風俗(三色版)……………	四五—四五五
三六	歌舞伎芝居……………	四六—四六七
三七	狩野探幽筆帝鑑の圖……………	四六—四六七
三八	蕪村筆仙山採藥圖と應舉筆松下鯉魚圖……………	五〇—五〇一
三九	ペリー一行下田上陸……………	五一—五一二
四〇	明治天皇野戰病院行幸……………	五六—五六八
四一	憲法發布式……………	五六—五六九
四二	奉天の會戰……………	六六—六六七
四三	明治神宮と多摩御陵……………	六三—六三五
四四	狩野芳崖筆悲母觀音圖……………	六四—六四九

增訂 國民日本歴史挿地圖目次

目次

第一圖 上古時代要地圖…………… 一四—一五

第二圖 奈良時代、平安時代前期要地圖…………… 六—六七

第三圖 平安時代後期、鎌倉時代要地圖…………… 一四八—一四九

第四圖 吉野時代要地圖…………… 二六六—二六七

第五圖 室町時代、安土時代要地圖…………… 三〇—三一

第六圖 桃山時代要地圖…………… 三九二—三九三

第七圖 江戸時代要地圖…………… 四一四—四二五

第八圖 明治大正時代要地圖…………… 五七八—五七九

增訂 國民日本歴史

第一 高天原

一 高天原

美しい青山が重なつてゐる大和の國を旅行したり、清らかな濱邊つゞきの山陽路を下つたりして、山水の美を賞し人情の厚いのを喜ぶ時に、我々は路の左右にある多くの史蹟を見ては色々昔をなつかしむ氣分に打たれる。名社大寺は言ふまでもなく、古人と關係のあるものは詰らない木や石までも、一々過去を想ひ起させぬものはない。奈良に行けば聖武天皇が佛法を深く御信仰になつた昔を想ひ、京都に行けば桓武天皇の御大業をはじめこして種々の感想がわいてくる。遠く他郷に旅をしないでも、我が故郷だけでも昔から言傳へられた物語

ごか、言傳へがあり、またいろ／＼の史蹟や、それに伴なつた史談もある。我等はその傳説口碑を聞いては胸を踊らして感激した事が幾度あつたかしのれない。その上、此等の史談は少からず我等の人格を向上させたものである。

三千年の歴史を有して、今や國運が益々榮え、國威が世界に普く輝いてゐる我が大日本帝國の過去には、我等の知らねばならぬ事がすこぶる多い。人格修養のためにも、國民としてなくてはならぬ教養として、大日本帝國臣民たる者は必ず我が國の歴史を精しく知つて居らねばならぬ。尊い教も數々あるし、國運發展の由來もさこそ悟るこゝが出来るのである。申すも畏い事ではあるが、御代々の天皇は諸々の政に御心を注いで、臣民を子のやうに思し召し、臣民は皇室を中心として天皇を御親の如くにお慕ひ申し、忠君の誠をつくしたのである。殊に上に萬世一系の皇室を戴き、君臣の分が極めて正しく、上下貴賤の別が極めて明かな事は、我が國體の精華として、我等日本人が世界の國々に誇る所である。

神代の昔、伊弉諾尊、伊弉册尊といふ二柱の神様があつて、天祖、國常立尊の勅をう

けて、此の國に天降らせ給ひ、大八洲を鎮め、山河をお定めになつたので、人民も暮しよくなり、衣食が足るやうになつた。大勢の神様がお生れになつたが、中にも大日靈貴尊は御徳が極めて高く、女神であらせられたが、太陽が天上に輝いて世界を照し萬物を育てるやうであつたので、天照大神も申し上げた。その御弟を月讀尊と申し上げる。天照大神に次いで御徳の高いお方であつた。次の御弟を素戔嗚尊と申し上げる。中々猛しい勇ましい御方であつた。御父母の神様の御相談で天照大神は高天原を、月讀尊は夜國を、素戔嗚尊は海原をお治め遊ばす事になつた。

その中に御母伊弉册尊がお崩れになつた。それを泣き悲しまれて、素戔嗚尊は御自分の國をお治めにならない。それで御父伊弉諾尊は御立腹になつて根國(死の)へ逐ひ出してしまはれた。素戔嗚尊は一度御姉尊にお目にかゝり、お別れを申してから下らうと思し召して天上にお昇りなされるこゝ、それは／＼大變な御勢で、大海が轟き山嶽が鳴り動いた。天照大神はお驚き遊ばして「此れは一體何事であらう。三仰せられ、勇ましくも男子の装

ひを遊ばした。御髪をあけて美豆良みづらといふ男の髪にゆひ、御美豆良にも御鬘にも御腕にも多くの玉を附けられ、御背には多くの矢を負ひ、弓をかたく握り、劍の柄をかたく執り、堅い庭をまるで雪のやうに踏み蹴散らし、御聲も勇ましく「何故にお出になりましたか。」とお問ひ遊ばした。弟の尊は少しも姉の尊にお手向ひなさる御心はなかつたので、姉尊の御心が静まるやうに色々にお誓をなされ、清き御心をお表しになつた。

それで姉の尊の御心もお直りになつたので、素戔嗚尊はお喜びのあまり、色々戯れをなされ、だん／＼御徒戯が甚だしくなつて、果は大神が神様にお供へなさる御衣を織つていらつしやる所へ行つて、馬を生きながら皮をはいでお投げ入れになつた。大神は餘りの事にお歎き遊ばして天岩戸の中にお隠れなされた。日輪は落ちて急きふに世の中は闇暗になり、悪い神々は群がり騒ぎ、ありさあらゆる禍事がしきりに起つた。そこで諸々の神様は大層御心配なされ、高皇産靈尊を上首に仰いで、天安河の邊にお集りになつて御相談をなされた。それで尊の御子思兼命の御考へによつて、石凝姥命に天香山の銅を取つて八咫鏡を鑄

させ、玉祖命に八坂瓊勾玉を作らせ、その上に青白の御幣もこりそろへてから、天香山の神を根びきにし、その上枝に勾玉を、中枝に御鏡を、下枝に青白の御幣を取りつけて天岩戸の前にお集りになつた。天太玉命はその神を捧げ持ち、天兒屋根命は祝詞を申してお祈りになるこ、天鈿女命はまさきのかづらを鬘にし、ひかけのかづらを纏にし、笹の葉を持ち、桶を伏せて、その上で舞はれ、諸神はこれにはやして歌を歌ひ、また庭火を焚き、多くの鶏を集めて長鳴きさせられた。これが神樂の起りである。天照大神は聞き召して「何事であらう。」と戸を細目に開けておのぞき遊ばした。この時天手力雄命は岩戸の脇に立つて居られたが、すかさず其の戸を引きあけて大神の御手を引いてお出し申したので、天は始めて晴れ、天の下はもこの如く照り輝いた。人々がお互に顔を見合せる顔面が皆明るく白くなつた。神様達は喜んで「あな面白し、あな樂し。」と歌はれた。面白しといふ語はこれに始まつたといふ。

素戔嗚尊はその罪を責められて高天原を降り、出雲（島根縣）の簸川の邊にお出でなされ

た。川筋をお上り遊ばすに、物陰に老人夫婦が一人の少女を中に据ゑて泣き悲しんでゐる。尊が怪しんでお問ひになるに、「私共は脚摩乳・手摩乳申します。この少女は私共の子でございませう。奇稻田姫申します。もも八人の娘がございませう。毎年八岐大蛇の爲に呑まれました。今また此の子も呑まれる事になりましたので、悲しさにたへず泣いて居ります。」「ご申し上げた。尊は哀に思し召し、夫婦に言ひつけ、八つの酒槽に強い酒を入れさせてお待ちなされた。俄に空がくもり血なまぐさい風が吹きそめるに、早や彼の大蛇は恐ろしい姿を現はし、槽毎に頭を一つ一つさし入れてその酒を飲んだ。酔うて睡つた時、尊はお佩きなされた十握劍を抜いてすた／＼にお切りになるに、尾の方へ行つて劍の刃が少し缺けたので、割いて御覽になるに、一つの劍があつた。その上には常に雲がたゞようてるたから天叢雲劍申すのである。「これは寶劍である。私すべきものではない。」「ごおつしやつて天照大神に献上せられた。尊はその後出雲の國の須賀へお出でになり、宮を造つて稻田姫にお住みなされた。その時澤山の雲が立上つたので、尊は次のやうにお歌ひ遊ばした。

やくも起つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を。

(夫婦が籠り住むために多くの雲が澤山の垣のやうに四方から湧いて来る)

これが我が國の短歌の始である。尊は朝鮮をも御支配なされ、貿易をすゝめ、多くの苗木を取寄せられた。御子大國主命は父尊についてその業を益々擴張し、農業をすゝめ貿易をひらき醫樂の道をもお授けになつたから、出雲を中心として中國地方は早く開化に赴き、尊の威名は四方に輝いた。因幡の白兔をお助けなされたご申す神様も此の命のお話である。御一族に臣津野命ご申すお方があつた。出雲の國が狭いのをお歎きなされ、ごこか餘つた土地はないかご、濱邊から遙かの沖をお見渡しになるに、新羅の三崎に餘つた土地があつたので、大勳で突きくづし、太い綱をかけて「國來よ國來よ。」「ごはやし立て、お引寄せになつて縫合せられたのが今の杵築の地である。また北門の崎の國からお引寄せになつたのが狭田の國、北門の農波の國からお引寄せになつたのが閩見の國で、高志の都々の三崎からお引寄せになつたのが三種崎だご傳へてゐる。我が國民は昔からかく海外發展の大精神をいだいてゐた事

が明かである。

第二 天孫降臨

高天原を治められた天照大神は天下がまだ悉く平和にならないのを御心配遊ばし、御子天忍穗耳尊を豊葦原中國、即ち我が大日本帝國の君としてお降しなさらうごせられたが、尊には此の時御子瓊瓊杵尊がお生れになつたので、自ら御辭退なされたから、瓊瓊杵尊がお降りなさる事に定まつた。しかし中國には悪い神が荒れて、たやすくお降りなさる事がむづかしい故、先づ天穗日命に邪神を平けさせ、また大國主命に國を献上するやうに諭さしめられた。命は大國主命を怖れて歸つて來ない。そこで天稚彦をお遣はしになつたがこれも往つたまゝなので、更に雉を降して様子を見させられるご、不幸にも射殺されてしまつた。最後に經津主命・武甕槌命の二神にお言付になつた。二神は勅をかしこみ出雲の國に行き、伊那佐小濱で大國主命に大神の勅を告げ知らせられた。命は大義をわきま

へ、折から出雲の三種崎で釣をして居られた御長子事代主命を早舟で呼び寄せ、共に謹んで大神の仰せに従はれた。しかし第二子健甕名方命は従はないで手向ひせられたが、終に敗れて逃げられたのを、信濃の諏訪(長野)まで追うて攻められたから、この命もまた従はれた。それから諸くの悪神を征伐し、遠く常陸の邊(茨城)までも平定して、天上に昇つてその有様を申し上げられた。また大國主命は自ら杵築宮を建て、その中に退きなされた。これが今の出雲大社の起りである。

天照大神は高皇產靈尊と御相談になつて、皇孫瓊瓊杵尊を天降し遊ばした。澤山の神様は勅を承けて御供なされた。中にも五伴緒の神は天兒屋根命、天太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉祖命の五方を申すので、皇孫をお守り申された神々を云ふのである。大神は先づ皇孫に勅して、

葦原千五百秋の瑞穂の國は、我が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就いて治めよ。さきくませ。寶祚(天皇の)の隆えまさんご當に天壤ごごもに窮なかるべき者なり。

ご宣はせられた。是れ實に我が建國の大本をお示しになつたもので、天壤無窮の皇運もここに始まり、萬國無比の我が帝國の基礎もここに定まつたのである。歴代天皇は皆此の御神勅を奉じ、その御心によつて帝國を統治し御仁政をお布きなされた。明治天皇のお下しになつた教育に關する勅語に、「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ。」ご宣はせられたのも、此の大神の大御心をお述べなされたものである。

また大神は御手づから八咫鏡を天叢雲劍を八坂瓊勾玉を皇孫にお授けになつた。これを三種の神器ご申し上げる。神鏡をお授けなさる時、

此の寶鏡を視まさんご當に吾れを視るが如くすべし。床を同じくし殿を共にして齋鏡ごなすべし。

ご仰せられた。是より歴代の天皇は神器を相傳へて皇位の御しるしとせられたのである。謹んで按じ申せば、神代の寶はもごより數の多い事である。然るに特に三種の神器を選んで皇孫に授けられ、なほ寶鏡を以て神勅を明かにせられたごは深き御謂はれのある事ご思はれ

る。鏡は明を體にし、是非善惡がその姿に従つて映るのを徳とする。智慧の本である。玉は柔和を徳とする。慈悲の本である。劍は剛強を徳とする。勇氣の本源である。自然に智仁勇の三徳を示されたごは、いごも尊い事ではないか。中にも寶鏡は大神の思し召しによつて伊勢大神宮の御神體ご仰がれ遊ばした。それは鏡はもご明知を本體ごしてゐる。智慧が明かであれば慈悲ご勇氣ごはおのづからその中に起るものである。されば大神も此の道理を以て正しく御神體を御鏡に移し、深き御心を止められたのであらう。代々の天皇が御鏡を祀つてある賢所を朝夕に敬拜遊ばすのも、遠く深い由來のあるごごなのである。

瓊々杵尊は大神の勅を奉じ、此の國をお治め遊ばす爲に、三種神器を捧持して先づ日向の高千穂峰に天降りになつた。これを天孫降臨ご申す。遂に吾田の笠狭崎(鹿兒)に移りなされ、そこにお宮を立て、我が國をお治めなされたのである。

その御子を彦火々出見尊ご申し上げる。御兄火闌降命は海を治められ、尊は山を治められたから、兄の命は鳥獸なごの山の幸をえられ、弟の尊は魚貝なご海の幸をえられた。

或時弟の尊は御自分の道具の弓矢をば兄命の釣鉤ごり換へて、尊は海に釣を垂れ、兄命は山に獵をせられた。尊はその釣鉤を魚に食はれて失はれたので、兄の命は色々お責めなされたから、せん方なく海邊をあてごもなくさまよつてゐられた。その時塩土翁が参りあつてお氣の毒に思ひ、尊を海神綿津見命の許にお送り申し上げた。海神の援によつて、大小の魚類を集めて問はれるご、鯛だけが病氣で出席してゐない。強ひて召出されるご、その口ははれてゐる。これを探らせられるご果して失くなつた釣が出て来た。これから兄命も弟尊の徳に服せられ、天津日嗣は弟の尊に傳へられたのである。その御子を鷓鴣草葺不合尊ご申し上げる。以上御三代の間は日向に居られて靜かに御徳をお養ひになつた。此の御代までを神代ご申し、次の帝神武天皇の御代より皇威も大いに振ひ世の中の状態もすこぶる改まつたから、人皇の代ご申して前代ご區別する。もごより天地は昔に變らず、日月も光を改めず、萬世一系の天皇は三種の神器を奉じて豐葦原中國を知しめし給ふのである。國運が年ご共に榮え行くにつけても、皇祖の神勅のあらたかにして皇位の尊い事がしのび奉られるではないか。

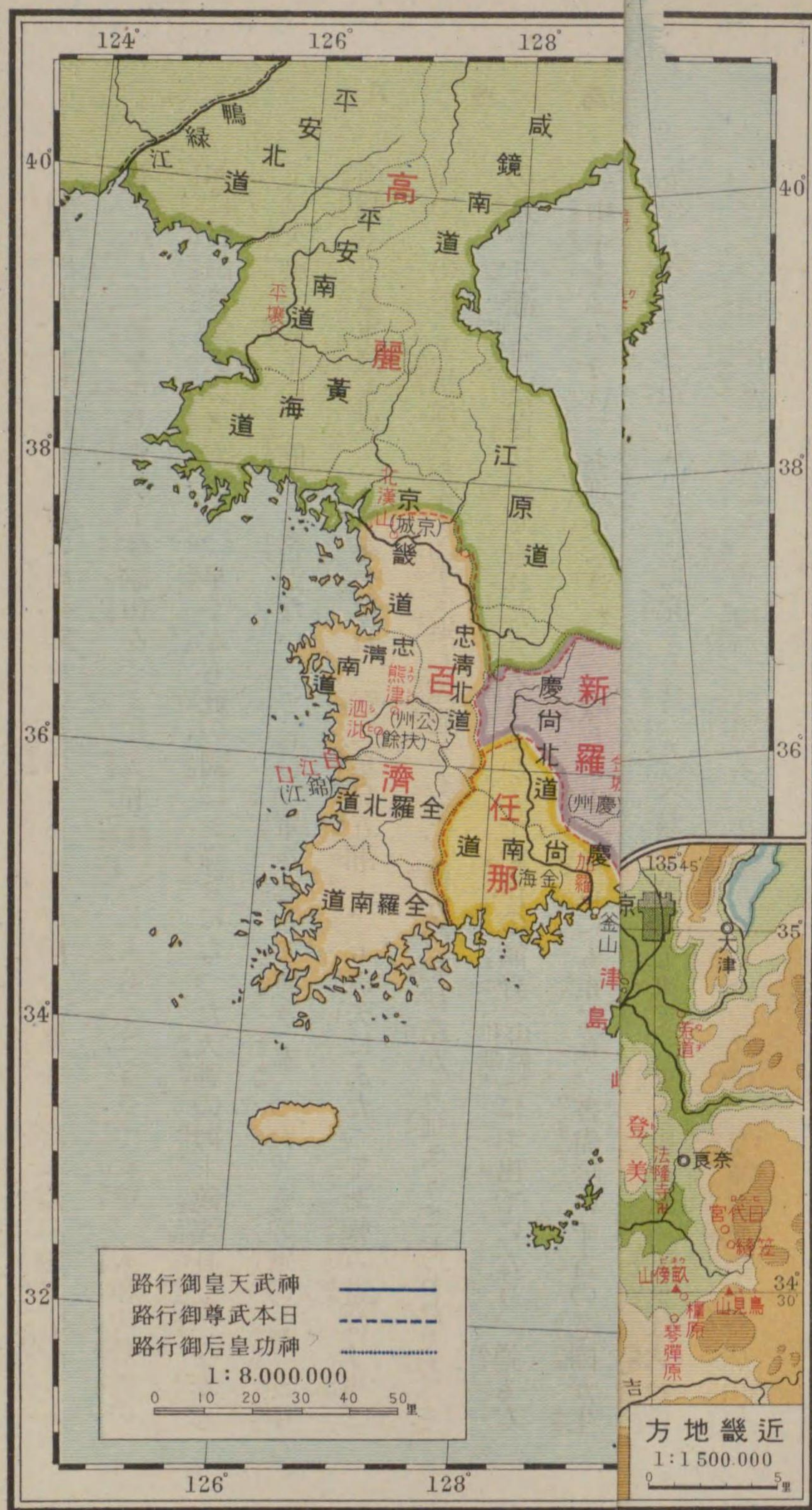
元日や神代の事も思はるゝ。

守武

第三 神武天皇

人皇第一代神武天皇は鷓鴣草葺不合尊の御子にましまし、御名を神日本磐余彦尊ご申し奉る。神武ごは奈良の御代に、唐の制にならつてお定めになつた諡號即ち御おくり名である。御年十五で太子にお立ちなされた。初め日向の高千穂宮(宮崎)にお出でになつた頃、天照大神の神勅に答へ、瓊々杵尊の御事業をつぎ、人民を安心させようこの有難い思し召しで、御身の苦勞をいごはせられず、東征の軍をお起しになつた。その時の御勅には、東に美地あり、青山四方に周れり、その地は必ず以て天業を恢弘べ、天下に光宅るに足るべし。蓋し六合の中心か、何ぞ就いて都せざらんや。このり給ひ、諸皇兄・諸皇子ご共に軍を率ゐて東征の途に就かれたのである。

第一圖 上代要地圖

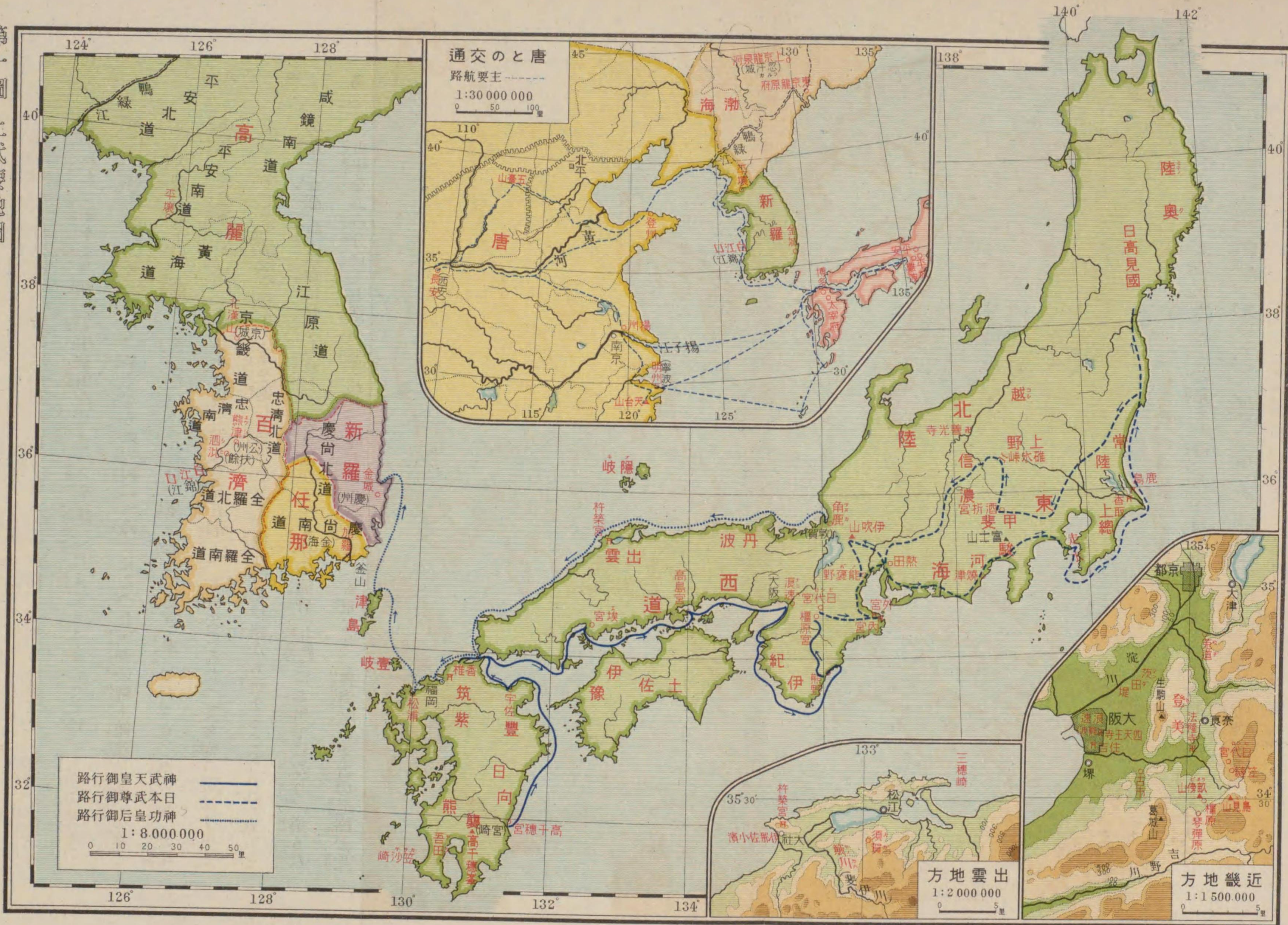


八咫鳥

瀬戸内海に船を進め、道の序の國々の悪者どもを平け給ひ、數年を経て遂に浪速(今の大阪)に着かれた。船を去り進んで生駒山をこえて大和(奈良)に入らうとなさつた時、大和の登美の頭に長髓彦云ふ者があり、早くから此の國にお降りになつた天神の御末饒速日命を奉じて、天神の御子に二筋ある筈がない。と言ひ、軍を起して防ぎ奉つた。その軍の勢が中強くて皇軍はしばし、利を失はれ、遂に皇兄五瀬命も流矢にあたつてお惱み遊ばす事になつたので、天皇はやむなく軍を返し遠廻りして、南方の紀伊路から進まうとせられたが、その途で五瀬命は遂に薨せられた。天皇はかくて紀伊の熊野(和歌山縣)にお出でになり、道もなしい山中をふみ分けてお進みなされた。峻しい山は幾重にも重なり、晝尚暗い千古の老樹が生茂り、行くべき道もないやうに見えた時、八咫鳥が飛んで来てお導き申した。天皇は大いに喜ばれ、道臣命に先導を命じ給ひ、鳥のあみに着させられたので、皇軍は無事吉野の川筋に出て大和の菟田(縣)へ向はれた。

菟田に兄猾・弟猾云ふ兄弟の悪者が居つた。弟は天皇の御召によつてすぐ降つて来た

第一圖 上代要地圖



喜ばれ、道臣命に先導を命じ給ひ、鳥のあみに着かせられたので、皇軍は無事吉野の川筋に出で大和の菟田(奈良縣)へ向はれた。

菟田に兄猾・弟猾云ふ兄弟の悪者が居つた。弟は天皇の御召によつてすぐ降つて来た

が、兄は中々従はない。僞り降つて新しい宮殿を立て、その中に恐ろしい仕掛けをして天皇を御請待申した。しかしその計はすぐ露はれて兄は追ひ込められ、自ら造つたわなに自らか、つて殺された。かくて天皇は諸兵を集め、酒食を賜うて祝宴をお開きになり、来るべき戦勝の前祝を行はせられた。その時歌はれた御歌に、

宇陀の高城に鳴係蹄張る。我が待つや鳴は障らず。勇細し鷹らさやる。前妻が魚乞はさば、立蕃麥の實の長けくを、幾許ひゑね。後妻が魚乞はさば、いちさかき實の大けくを幾許ひゑね。

是は久米歌と言ひ、後世永く傳へて、天皇が新たに即位せられる時の大嘗會に劍を抜いて舞ふ久米舞には此の歌を歌ふのである。此の歌には今日使はない古い語が多いので、意味もむづかしいが、大體をいふと、宇陀の城で鳴こいふ鳥を取らうとして、わなをかけて置いたら、鳴はそれにさはらなかつたが、もつこ大きい鷹がかつた。家にゐる妻が魚を欲しがらなから、この肉の長く大きいのを、欲しいだけ幾らでも、ひゑて（薄くへ）與へようこの意味であ

る。鷹がこれた云ふのは、思つたより早く兎を殺すことが出来たことを申されたので、大變お喜びなされた様子がよく歌に表れてゐる。

それから皇軍は八十梟帥なご多くの悪者を或は降し或は殺して、遂に長嶺彦の征伐に進まれた。その戦はすこぶる烈しかったが、その最中に一天俄にかき曇り、黒雲が四方をござし、風があれ、雹さへ降つて来て、物凄景色になつた。その時何方よりともなく金色の鶏が飛んで来て、天皇の御弓の上の端に止まつたが、その光は電のやうで賊の者共は眼をあけてゐる事ができず、戦ふ方も失せて逃げてしまつた。明治の御代に定められた金鶏勳章は實に此の由來に基づいたものである。饒速日命は長嶺彦が片意地で物の道理にくらく、命が色々ささされても、こても國民の本分をささるることが出来なかつたので、やむを得ずこれを殺して降参せられた。此の外にまだ諸方に皇軍に従はぬ者が居つたけれども、天皇は夫々誅伐せしめられて、大和地方を悉く平定せられた。こゝに於て天皇は畝傍山の東南檜原の地をさだめて、宮殿を經營せしめられた。その時の御勅に、

當に山林を披拂ひ、宮室を經營り、恭んで寶位に臨み、以て元元を鎮むべし。上は則ち天神の國を授け給ひし徳に答へ、下は則ち皇孫の正しき道を養ひ給ふの心を弘めん。然る後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇みせんこゝ亦可からずや。ご仰せられた。何ぞ畏い大御心ではないか。

辛酉の年正月朔日天皇は此の檜原の新宮で天津日嗣の御位にお即き遊ばし、多くの役人は參つて萬歳をお祝ひ申した。これは朝廷の御儀式の始である。また後世代々の天皇の御即位の式は皆これにお倣ひ遊ばしたのである。この時に、また事代主命の御娘五十鈴媛命を皇后に立てられた。此の年は我が國の紀元元年であつて我が國の紀年を數へる始である。また此の御即位日は今日の太陽曆では二月十一日に當る故、此の日を紀元節として皇祖の御祝を記念する事、明治の御代に定められたのである。天照大神より傳へられた三種の神器は大神の御仰せにより大殿に安置し、床を同じくして祀られた。此の頃はかく皇居に神宮は一つで區別がなかつたのである。天兒屋根命の孫天種子命(中臣氏)と天太玉命の孫天富

命みこと（齋部氏いみべの祖）この二人は専ら神様に仕へて民政を行つた。當時は神祭と政治とは同一事で區別がなかつたから、政を「まつりごと」と訓むのも此の謂はれである。道臣命みちのおみのみこと（大伴氏おほとも）饒速日命にぎはひのみことの子可美真手命こみましまの（物部氏ものべの祖）は御殿の門を守る役となつた。また國には國造くにのみやつこ縣には縣主を置いて地方を治めさせられた。縣はおもに皇室の御料地を申すのである。これらの職は子孫が相繼いで職に當るならはしであつた。

即位せられてから四年の春二月天皇は詔せられて「我が皇祖の靈天より降臨りて、朕が躬を光し助け給へり。今諸々の虜ごも已に平ぎ海内無事なり、以て天神を郊祀り、用て大孝を申べ給ふべし。」と仰せられ、祭の場所を鳥見山（奈良縣）の中に建て、皇祖天神をお祀り遊ばした。

天皇は即位の七十六年三月十一日にお崩れになつた。これを太陽曆でかぞへると四月三日に當るので、今日は此の日を以て神武天皇祭と定めてお祭せられるのである。

明治天皇御製

橿原の遠つ御祖の宮柱建てをめしより國は動かす。

次に皇子綏靖天皇が第二代にお立ちになつた。神武天皇の御志を嗣ぎ、同じく大和に居つて政を視られた。その後代々の天皇は、平安（今の京都）に都をさだめられるまでは大抵大和にお在になつて、仁政をおしき下さつたのであつた。

第四 崇神天皇と垂仁天皇

綏靖天皇から八代を経て、第十代崇神天皇が御位にお即き遊ばした。此の時は既に神代を去るこゝ六百餘年になつてゐる。天皇は敬神の御心が篤くましましたので、神器を長く宮中に留め神威を汚してはならぬと思し召し、八咫鏡と天叢雲劍を新たに模造せられ、八坂瓊勾玉と共に宮中にお留めになつた。この後御代々の天皇がお傳へになる神器は、玉は神代からの玉であるが、鏡と劍は此の時に模造された新しい神器である。後世宮中に於て、此の神器を安んじ申してある御殿を賢所と申すのである。さて神代以來の御鏡と御劍とは、皇女

豐鋤入姫命に命じ、これを奉じて大和の笠縫邑に神籬を建て、祭らせられたので、神宮も皇居とは各々別になつた。

當時皇威の及ぶ範圍は尙都近くだけであつて、遠方の國々は皇室の御威光に従はず、互に攻めあつて亂暴を働いてゐた。天皇は特に皇族の御方々を選ばれ、四方の各地に分遣はして人民をささし、朝廷の御命を奉ぜぬものを討たせられた。即ち北陸へは大彦命、東海へは武渟川別命、西道へは吉備津彦命、丹波へは丹波道主命をお遣はしになつたのである。これを四道將軍と云ふ。

かくて皇威は次第に四方に輝き、天下は平和に治まつたので、人民の數を調べて、始めて男子からは獵の獲物を、女子からは手製の織物などを調物としてお徴しになつた。これを弓弭調、手末調と言つた。天皇はまた船を造らせて交通の便をはかられたり、池溝を掘つて農業を御勧めになつたりして、種々臣民の利福をお圖り下さつたので、下々は富み榮えるやうになつた。

當時、朝鮮半島では任那と新羅とが争つてゐた。任那は新羅にかなはないので苦しんでゐたが、日本には聖天子が居られて國內がよく治まり治教が行き渡つてゐるを聞いて、國王は蘇那曷叱智を使ひて來朝させ、我が保護を求めた。そこで天皇は鹽乘津彦を遣はして任那を助けさせられ、その爲に日本の役所を任那に置かせられた。即ちこれが後世の日本府の始である。

第十一代垂仁天皇は崇神天皇の皇子にわたらせられる。此の帝も深く神々を崇め給ひ、皇女倭姫命に仰せて、天照大神をお祀らせになつた。命は勅を奉じ、神教によつて國々を廻られ、遂に伊勢國度會郡五十鈴川の上を宮所と定めて、神靈を鎮め奉られた。是れが即ち皇大神宮である。おごそかな神殿の尊さはとても口に言へないほどである。廣大幽靜な神域には老木が日影を蔽ひ、ほこりをめぐる五十鈴川の流は水が深く清く、今に參拜する人は皆心を清め魂を磨いて大神の御徳をお慕ひ申してゐるのである。昔から二十年毎に新しく宮を建てかへてお遷りになる習はしであるが、最近には昭和四年に御遷宮が行はれた。

に授けて、我が國に歸化して來たのも此の御代であつた。

第五 日本武尊

第十二代景行天皇の御代に九州の熊襲が叛いた。熊襲はその頃九州の南部に住んでゐた未開勇猛な種族である。此の地方は天孫降臨以來御祖宗の居られた土地であつたが、神武天皇が東征せられてから此の方、年と共に皇化に遠ざかり、遂に朝威をも輕んずるやうになつたのである。初め天皇は御みづから幸して征伐せられ、熊襲は一旦悉く平定したのであつたが、暫く立つてまた叛くやうになつた。そこで今度は皇子の小碓尊に命じて征伐せしめられた。尊は時に御年が僅かに十六で、お姿は女の如く柔和におはしたが、力はあくまでも強くましましたのであつた。勅命により兵を率ゐて熊襲の地にお出でになり、詳しくその地方の地形や賊の様子を調べられた。或日酋長(賊の)川上梟帥に祝事があつて一族を集めて酒宴を張つた時、尊は少女の姿に身をやつされ、多くの侍女の中に交つて酒宴の手傳を遊ばした。

だん／＼夜もふけて賊どもは酔がまはつて來た頃、尊は折をねらつて梟帥に近寄り、す早く
ねぢ伏せてお隠しなされた短刀で一太刀深くお刺しになつた。梟帥は驚いたが、また尊の御
武勇に感じて誠に日本一の勇士であらせられると思ひ、苦しい息の中から日本武といふ御名
を奉つて死んだ。こゝに於て西國は忽ちにして静まり、良民が皆安心するやうになつた。

その後間もなく東國の蝦夷が叛いて騒ぎ立てたので、また日本武尊は勅を奉じて征伐に
向はれた。蝦夷は今の北海道のアイヌと同じ種族で、その頃は奥羽から東海の地方にまでも
蔓つてゐて、未だ皇化に従はなかつたのである。尊はまづ伊勢の神宮に參拜せられて勝利を
お祈りになつた。此の時御叔母の倭姫命は天叢雲劍を御囊に授けられて、「慎んで怠り
給ふな。」と教へられた。尊は大いに喜ばれ、軍を進めて駿河(静岡縣)にお出でになつた。する
と此の地方の土賊どもが偽り降つて尊に鹿狩を御勧め申し、その事によせて尊を廣い野原に
お誘ひして、不意に四方から火を放つた。尊は驚かれたが、すぐ御叔母の命から頂いた御囊
から火燧石を出して火を切り向火をつけて、逆に賊をお焼きになつた。此の時神劍がおのづ

から抜けて、傍の草を薙拂つたので、尊は幸ひに御無事で、賊共は却つて敗北した。これに
よつて神劍は名を草薙劍にも申し上げるやうになつた。またその後は此の土地を稱して燒
津と云ふやうになつたのである。

尊は更に進んで相模(神奈川県)にお出でになり、海を越して上總(千葉縣)の方へ渡らうとせられ
て、海峽に御船を進められると、不意に海が荒れ波風が立騒いで、御船も危く見えた。此の時
御妃の弟橘媛は尊の御身代りとして千尋の底にお沈み遊ばしたので、風波もやがて収まつ
て、尊は御無事に上總に御上陸なされた。いよ／＼進んで日高見國の蝦夷をも平けられ、遠
く奥羽地方まで皇威を輝かして軍をお歸しになつた。御歸りの途で上野の碓氷峠(群馬縣)に
お掛りになつて遙かに漫々たる大海原を望まれた時、亡き御妃のこゝろを思ひ召し出でら
れ、御慕はしさのあまりに「吾妻はや。」とお歎き遊ばしたので、お供の者は尊の御心の中を
察し奉り、皆鎧の袖をぬらした。これから關東の地方を吾妻と呼ぶやうになつた云ふこ
とである。尊はやがて天位をも継ぎ給ふべき尊い御身にましましながら、御國の安危を御身

に負ひ給ひ、東征西伐御みづから山に登り河を渡つて、つぶさに辛苦を重ね心身をお痛め遊ばしたのは、實に畏い極み申すべきである。

甲斐(山梨)縣) に出て酒折宮にましました時、

新治筑波をすぎて幾夜か寝つる。

ごお歌ひになるご、御傍に火を焼いてゐた老人が

日々並べて夜には九夜日には十日を。

ごお續け申したので大層お譽めにあづかつた。その意味は、二つの歌を續けて解すべきである。新治や筑波(共)茨城縣)を過ぎてから、幾夜寝たか云ふご、夜は九夜、晝は十日を過ぎたご云ふ意味である。これが連歌の始である。

かくて尊は尾張(愛知)縣)國造尾張氏の所に御滞在中、近江(滋賀)縣)の伊吹山に邪神があるごお聞きになつたので、すぐに征伐に向はれた。此の折神劍は尾張氏の許へ残して置かれた。邪神はすぐ亡んだが、不幸にして此の時尊は御病を得られたので、やむなく引返され、伊勢(三重)縣)

へ路を御取りになつて、都へごお急ぎ遊ばしたけれごも、御病がはけしくて、遂に伊勢の能褒野でお薨れになつた。御齡三十。天皇これを聞き召して悲しみ給ふごごは限がなく、群臣に仰せて能褒野に厚く葬らせられた。此の時御墓の中から白鳥が飛立つて大和を指して飛んで行つたので、妃王子達は尊の御記念に捕へようご、泣く泣く跡に従つてお追ひなされた。白鳥は大和(奈良)縣)の琴弾原に留つたのでその處にも御墓を造られた。また飛んで河内(大阪)府)の古市に止つたから、そこにも御墓を定められたが、白鳥はやがて天に昇つてしまつた。これを白鳥の三陵ご申してゐる。尊の御持ちになつた神劍はそのまゝ尾張に留められたので、ごごに社を建て、お祀りするごごになつた。これが今の熱田神宮の起である。

その後天皇は日本武尊の東征せられた諸國を巡幸して、御手柄のあみを見せなはせられた。やがて御諸別王を上野の國へお遣はしになつて、永く東國を鎮めさせられた。次の帝成務天皇(第十代)は日本武尊の御弟である。此の御代には東國を治めるのに便利なやうに、始めて都を大和より移して近江の志賀(大津市)に宮殿を建てられた。また國縣の分界を定め、

國造・縣主を増し、村には稻置は置かれたので、地方政治も大いに整ふやうになつた。これは偏に日本武尊の大功に基づくものである。

藤原有實

やまこたけ西東の國を討ちて平けまし、皇子にやはあらぬ。

第六 神功皇后 文物の輸入

第十四代仲哀天皇は日本武尊の御子である。此の時熊襲がまた叛いて貢を奉らないので、天皇は皇后と共に親しくこれを征伐せられた。その頃朝鮮半島には北部に高麗、東南部に新羅、西南部に百濟の三國が並んでゐた。これを三韓と呼ぶ。中にも新羅は我が九州に最も近いから、ひそかに熊襲をおだて上げては我が朝廷に叛かせてゐたのであつた。されば皇后は「先づ新羅をお伐ち遊ばせ。」と奏せられたが、天皇はお用ひなく、熊襲を討つて御悼しくもその軍中で崩せられた。こゝに於て皇后は當時御懷妊中であらせられたのにも拘らず、

老臣武内宿禰謀られ、先づ別將に熊襲を討たせ、御自身は新羅征伐の軍を指圖せられた。此の時住吉の大神がお姿を現して軍の道を様々に教へられたと云ふことである。皇后は御髪をあけて男のやうに美豆良に御結び遊ばし、り、しき御扮装で群臣に「軍をおこすのは國の大事である。今此の事を思ひたつた上は偏に汝等に任せよう。吾は女の身であるから、男子の姿をかりて軍をおこさうと思ふのである。ついては上はひさへに神の御恵をかうむり、下はひたすら汝等の助を頼むのであるぞ。事が成功すれば、群臣に皆功があり、成功しなければ、我れひさり罪を引受けよう。」と宣うた。肥前(佐賀)の松浦の河におはして戦勝をお祈り遊ばし「もし新羅の國を得るならば、釣りに魚をえさせ給へ。」と申して、お釣りになるこ、鮎をお釣上げになつた。

その後諸國に令して、船を作らせ兵を集め、威風堂々として新羅にお向ひになつた。風神や海神がその時皇軍をお助け申したので、數百の兵船は帆に順風をはらみ、艫や楫を用ひずして新羅に到着した。御船に随つて大波が立上り新羅の國內に押寄せたので、國王は大いに

恐れ、臣下を集めて、「昔から未だかつてかゝる例がない。もし此の世の限になつて國が海に
なるのであらうか。」と歎き悲しんだ所へ、兵船が海に滿ち太鼓の聲が山を動して來たので、
國王はこれを見て思ふやう、「此れより東に神國があつて、日本こいひ、またその國に聖王が
ましまして、天皇ご申すご聞いてゐる。これはきつご其の國の神兵であらうから、ごても敵
する事はできぬ。」と云つて、皇后の御船の前にまゐり、「今より長く詔に従ひ奉り、年毎
に貢物を奉ります。たごひ日輪が西より上るごことがあらうごも、アリナレ河の水が逆
流れるごことがあらうごも、河の小石が昇つて星ごなるごことがあらうごも、春秋の貢は決して
お關き申しません。」と申し上げて降を請うた。皇后はその願をお許しになり、多くの献上品
を收めて凱旋遊ばした（紀元八六〇年）。

かく新羅が降つたので、九州の熊襲もまた永く叛かぬやうになつた。それでその隣國の百
濟も我が威徳を慕つて屬國となり、やがて高麗もまた貢を奉つたので、三韓は悉く我
に従ふやうになつた。抑も朝鮮は我が國に僅かに一海峡を隔て、相對してゐるから、太古
以來互に交通があつた。神代の昔、素戔鳴尊が出雲から朝鮮に往來せられたご事は前に述
べた通りであるし、神武天皇の皇兄稻氷命が新羅にお渡りになつたごも傳へられてゐる。
崇神天皇の御代には任那がすでに屬國になつてゐる。今や皇后の御威光によつて朝鮮は皆我
が領土になつたのである。

平 惟 範

日月の行星のやごりはかはるごも新羅の國の柁は乾かじ。
皇后は筑紫にお歸りの後、皇子が降誕せられた。即ち第十五代應神天皇である。皇后は永
らく攝政ごして天皇の御政治をお輔けになつた。後世に尊んで神功皇后ご申し上げる。ま
た應神天皇は、後世八幡宮ごしてお祀り申ししてゐる神様である。

朝鮮の國は支那ご陸續であるから、早くよりこれご交通を始め、支那が上古から開化文明
に進んでゐた影響をうけて、學問技藝等はすこぶる進歩してゐた。朝鮮の國が我が屬國ごな
つてからは、絶えずその進歩してゐる工藝品並びに學問・藝術を我が國に傳へて、大いに我

が文物の進歩を助けたのであつた。應神天皇の御代に百濟から阿直岐が来て良馬を献上したところがある。阿直岐は學問に達してゐたから、皇子の菟道稚郎子はこれを師としてお學びになつた。次いで天皇は百濟の王仁を召して稚郎子の師とせられた。此の時王仁は論語三千字文を献上した。これは實に我が國に支那の學問の傳へられた始である(紀元九四五年)。論語は聖人孔子の教を記した本であるから、支那の仁義道德の説も此の時から我が國に入つて來たのである。つゞいて支那の人阿知使主が一族十七縣の民を率ゐて歸化して來た。王仁の子孫は河内に居つて西文氏と言ひ、阿知使主の子孫は大和に於て東文氏と稱し、相共に朝廷に仕へて書記の役を務めてゐた。此の後も朝鮮から多くの學者が渡つて來て、いよいよ我が國の文運の進歩を助けたのである。

その頃また機織裁縫の職人も百濟から來た。支那の秦の始皇帝の末言はれる弓月君は百二十七縣の民をつれて來朝し、養蠶や機織の業をよくしたから波多公の氏を賜つた。その上鍛冶の職工、酒の製造に巧な者なども次々に渡つて來て、我が國の工藝は目ざましく進歩した。これ等は何れも神功皇后の三韓征伐の賜物である。

第七 仁徳天皇と雄略天皇

第十六代仁徳天皇は應神天皇の御子である。始め御弟菟道稚郎子が父の帝の思召によつて東宮に立たれたのであつた。應神天皇がお崩れになつてから、皇太子は弟の身分で兄君を越えて皇位につくのは良くないと思はれ、兄宮に天位をゆづつて三年になるまでも、御位を空しうせられた。それで國々の人民が貢物を何れの宮へ奉つてよいかわからなかつた。或漁人が鮮魚を献らうとしたが、兩宮にも受取つて下さらない。往還りする中に魚を腐らし、臣下の心を盡すことができないのを悲しんで泣いたやうなこともあつた。皇太子は兄宮の御心を動かしかねることを察せられて、遂に自ら御命を縮められた。兄宮は大いに驚き歎き給ひ、御死骸に取附いてお悲しみになつたが、今はせん術もなく、群臣の申し上げる通りに御位にお上りなされた。攝津の難波高津宮(今の大阪)にましました。

前代外征の結果、國威が發展したあきをうけて、天皇は御心を内治に注がれ、大いに民力の休養をお計り下さつた。或年高臺に登つて四方を御覽になるに民の家々から煙が稀にしか立上らず、いさ淋しかつた。天皇は民が貧しいから食物を十分にたくこごが出来ないのであるご思召し、これより三年の間調物を免除せられた。ところが幸に豊年が打續いて人民はやつと暮しよくなつたから、村々から賑はしく炊烟が立上るやうになつた。それを御覽なされて御満足の餘り、「朕は富み榮えた。」と仰せられた。しかし仁慈の御心が深くましました天皇は、尙三年間調をやめられ、びたすらに人民の上に御惠をお分ち下さつたので、宮の中は破れて雨露を防ぐ由もないやうになり、宮人の衣はやつれて、装も整はないやうになつたが、帝は却つてこれを樂しむご思召された。六年を経て始めて調物を納めさせられたので遍き御慈しみに感泣した國々の民は、先を争ひ我れ後れじご皇居の造營につくし、老も幼きもこぞつて業をはけみ、日ならずして大宮を造りあけたまひふこごである。申すも有難い御仁政であつた。仁徳天皇ご諡號せられたのも此の爲であつた。

天皇は更にまた民業の發達に御心を注がれた。難江堀江を開いて河内の諸川の水を海に通じたり、淀川の一部に茨田堤を築いて洪水の害を除いたり、諸所に池を掘り溝を通じて農業の便をはかつたり、また橋をかけ、道を通じたりして、大いに人民の便をお圖り下さつたから、人々は皆天恩の厚きに感じ奉り各々その家業を樂しんで、太平が久しく打續いた。

藤原時平

高きの上りて見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みぬる。

武内宿禰は景行・成務・仲哀・應神・仁徳の五朝に仕へて度々大功をたて、國家の柱石に仰がれたが、此の御代に薨じた。行年二百八十餘歳であつたと言はれてゐる、その子孫は大いに繁榮して、中にも蘇我・平郡・葛城の三氏が最も著れた。宿禰の孫女の葛城磐之媛は仁徳天皇の皇后に立たれ、履中天皇(第七代)・反正天皇(第八代)・允恭天皇(第九代)を生み奉られたのである。第二十一代雄略天皇は允恭天皇の御子である。深く産業獎勵に力をおつくし下さつたが、殊に養蠶機織の業をすゝめられ、親しく皇后幡梭姫に仰せられて宮中に蠶をお飼はせになつ

た。天下の人々に模範をお示し下さつたのである。始め天皇が螺贏すがるといふ人に命じて蠶こを集めさせられると、螺贏は間違へて子供を澤山貫つて来た。天皇はお笑ひになつて、その子供を悉く螺贏に賜はり、小子部の姓を賜つたことがあつた。天皇はまた身狭青を吳の國にお遣はしになつて、機織や裁縫の工女を求めさせられた。吳くれは今の支那揚子江以南の海岸地方である。二年して機織に巧みな漢織・吳織や、裁縫に巧な兄媛・弟媛等を率ゐて歸朝したので、これから織物・裁縫の術は益々進み、だん／＼精巧な品も産出されるやうになつた。されば諸國より献上する絹物の類も追々増加して、御庫に充ちたので、も朝廷に内藏を設けてあつたが、先に履中天皇の御代に更に齋藏を建て、いよく多くなる貢物を納められたけれども、此の御代にはそれでも足りなくなつたので、更に大藏を建てられた。主として神物は齋藏に、宮中の御用品は内藏に、政府の財物は大藏に納められたのである。武内宿禰の孫蘇我滿智は命によつてこの三藏を支配し、王仁・阿知使主がその下にあつて、出納の記録を役目とするやうになつた。

紋がらや或は色鳥あやはこり。

宗因

此の御代に丹波から五穀の神にまします豊受大神を、伊勢國度會郡山田に遷し祀られた。後世皇大神宮を内宮と申し、豊受大神宮を外宮と申した。兩宮共に古來皇室の御尊崇のあつた事は申すもおろかな事で、今に至るまで御神殿は古制に従ひ檜の白木に茅を葺き奉り、屋根の上には千木堅魚木が嚴かに聳えてゐる。兩宮共に二十年毎に新宮に改築して御遷宮ましますのである。

西行法師

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ。

天皇はまた勇武にましました。かつて大和の葛城山に狩をなされた時、何方よりともなく大きな荒猪が駈けて出て、荒れに荒れ狂ひに狂ひ土烟を立て、玉座の方へ突進してきた。お供の者はさうするところできず、唯うろたへる計りである。「あれを射止めよ。」と仰せられたが、敢て手出しするものもない。すでに猪は御座所に迫つたので、勇武な天皇は御みづか

ら御弓を以て突き立て給ひ、ひるむ所を急所めがけて蹴殺された。さて天皇はお側の者の卑怯な振舞を大層お怒りになつて、お手討にしようせられた時、皇后が御言葉を盡してお諫め遊ばしたので、御氣色も和いだ。聰明な天皇は還御の折に皇后と同じ御車に召されて一人は禽獸を得たが朕は善言をえた。」「悦ばせられた云ふことである。

第八 朝鮮の變遷

朝廷におかせられて内治に力をお盡しなされ、産業を奨励し文物を發達せしめられた間に、朝鮮に於ける我が勢力は不幸にして次第に衰へて來た。中にも新羅は厄介な國で度々無禮な事があつた。それで雄略天皇の御代に紀小弓、蘇我韓子、大伴談等に命じて征討せしめられた。我が軍は一旦は勝利を得たけれど、談が戦死し小弓が病死してからは、諸將の仲が悪

くなつてその軍は不成功に終つてしまつた。その上この御代に任那の國司吉備田狹が新羅と結んで叛き、第二十三代顯宗天皇の御代に紀大磐が任那によつて叛いたりしたので、朝鮮は一層治めにくゝなつた。

第二十五代武烈天皇が崩ぜられた時、御子があらせられなかつたので、大連大伴金村は應神天皇第八の皇子稚野毛二派皇子の四世の御孫を迎へ奉つた。第二十六代繼體天皇である。この御代に百濟が使を奉り上表して任那の四縣の地を賜はらん事を願つた。金村は妄にこの願に賛し、遂に百濟の請のまゝにその地を賜はつたので、任那は大いに我を怨み、韓土の事は益々困難になつて來た。此の頃新羅の國勢はいよゝ盛んになつてしばしば任那を攻めたから、朝廷は近江毛野をして兵を率ゐて救はせられた。新羅は中々奪つた土地を返さうこはせず、しかも當時九州に威を振ひ奢侈を盡してゐた筑紫國造磐井が新羅に應じて高麗、百濟、任那からの貢船を留めて貢物を奪ひ、終に朝廷に叛したのであつた。朝廷では大連物部麤鹿火を將としてこれを討たせられた。麤鹿火は大いに磐井を破つてすぐこれを誅

した。ところが毛野は新羅を和睦させようとしたが、成功しなかつたから、半島の事は益々面倒になつてしまつた。その後新羅の勢はいよいよ振ひ、我が國から遣はされる將士は交通が不便な爲に勞苦が多くして功がこれに伴はず。遂に第二十九代欽明天皇の御代に任那は新羅のために亡ぼされ、日本府もまた亡んでしまつた(紀元一二二二年)。天皇は紀男麻呂等を遣はして日本府の回復を計らしめられたが、我が軍に利がなく、折角の御志も叶はせられなかつた。此の時我が軍の一將調伊企儼は不運にも捕へられたが、日本武士の面目を守つて少しも敵に屈せず、最後まで新羅王を罵つて殺された。その妻の大葉子も捕へられたが、

韓國の城の邊に立ちて大葉子は領巾ふらすも日本へ向きて。

ミ歌つて泣いたので、聞く人は皆これを憐れみ、ともに涙の袂をしほつた云ふ。

その後朝鮮半島の我が勢力は漸く衰へ、外交は益々困難となり、朝廷では度々回復を計られたが、遂に任那を再興する事は出来なかつた。

高麗船の寄りすぎ行く霞かな。

蕪村

第九 佛教の傳來と蘇我物部兩氏の争

しかし此の間に、佛教は朝鮮を経て我が國に傳はつて、これより永く我が國民の精神界を支配するところとなり、これに伴つて、アジャ大陸の藝術も輸入せられ、文化の發達を大いに助けたのであつた。抑々佛教は印度に起つた宗教で、今から二千五百年ほど前に大聖釋迦が出て、當時腐敗してゐた社會を救ひ不公平な階級制度を破つたのである。その教の要點を云ふと、人生は苦に満ちてゐる。生きるも老いるも病も死もいづれか苦でないものがあらう。此の苦惱は何によつて起るのであらうか、慾に本づくのである。有ゆる情慾・疑惑・恐怖・煩惱・我がまゝ等は皆慾に本づいてゐる。されば心を靜かに氣を平かにして迷の慾心を滅ぼせば、人は皆精神の平和を得るであらう。釋迦は平和慈悲の權化として此の道を説いたのであつた。此の教は漸次東洋諸國に廣まつたが、遂に欽明天皇の御代に百濟王は使を遣はして佛

像・經文を献上し、佛の功德を稱揚した(紀元二二二年)。天皇はこれを禮すべきか否かを群臣に下問せられた時、大臣蘇我稻目は「我が國も他の國々の如く祭つた方がよろしうござい
ます。」と賛成を申し上げ、大連物部尾輿は「我が國は古來神々を祭つて居りますのに、今外
國の神を拜したら必ず國神の怒りを受けませう。」と反對を申し上げた。そこで天皇はしば
らく佛像を稻目に賜うて試みに禮拜させられた。よつて稻目は自分の家を寺として禮拜した
ところが、間もなく疫病が流行して人が多く死んだので、尾輿は是れは佛を拜したので神が
御怒りになつたのであるとして、天皇に申し上げて寺を焼き佛像を難波の堀江に投じた。後
に本田義光云ふものがこれを拾ひ奉つて、信濃の國に安置したのが、今の善光寺の起
だ云ふ。

春風や牛に曳かれて善光寺。

茶

我が國は建國以來、上は朝廷の大官から下は各種の業務に従ふ者まで、皆その家柄によつ
て職業が一定し、子々孫々相襲いで行く習はしであつた。軍人の子は必ず軍人になり、鏡作

りの子は必ず鏡作りになつたのである。そして一の職業の者は集まつて一の團體を組織して
ゐる。これを氏云ふ。氏を支配するものを氏の上云ふ。氏の上は氏の民を率ゐて朝廷に
仕へる。これらの上には臣・連や首・造なごの別があつた。

此の臣・連・造なごの名稱を姓云ふ。中にも臣・連の姓を有する氏は殊に身分が高く、
朝廷の政治にもあつた。これを大臣・大連と言つた。この制度は一の業に馴れて熟練す
る便利はあるが、その業には競争がないから、その利益や権力を専らにする機會を與へる事が
多かつた。政治上に於ても各々その家の主義を言張つて互に争ふやうになり、漸次にその害
が重なつて來て、はては朝廷では臣・連の二大勢力が互に權を争ふやうになつた。佛敎の傳來
は會々その政争の一材料となつて、こゝに守舊派の代表者物部連家と進歩派の代表者蘇我
臣家が一大争亂を引き起したのである。

稻目の子大臣馬子は父の志を繼いで深く佛を信じ、尾輿の子大連守屋は益々これに反
對した。しかし蘇我氏の勢が盛んになり、十數年の争の後、馬子は遂に守屋を攻めて亡

ほしてしまつた。かくて馬子に反對する者がなくなつたので、だん／＼我がまゝとなり、不忠の振舞が多くなつて來た。

第十 聖德太子

聖德太子は第三十一代用明天皇の皇子であらせられる。御母が宮のうちを散歩せられた時、厩の前で御心にいさゝかも患はせ給ふことがなく御誕生遊ばした。よつて御名を厩戸皇子と申した。幼い時からすこぶる御賢くあらせられ、一を聞いたら、すぐ十を覺られた。成長してから一時に十人の訴を併せ聞かれ、少しも混雜せずにお裁きなされた位であつた。佛教も儒學も深くきはめられ益々御才智を輝かし給うた。第三十三代推古天皇は用明天皇の御妹で我が國最初の女帝であらせられる。即位元年に厩戸皇子をば皇太子に立て、攝政に任せられ、女帝を輔けて萬の政を行はしめられた。

太子は我が國古來の習慣を本とし、その上に文化の先進國たる三韓・支那の長所を加へて種

種の新政を施され、國家の進運をお計りなされた。始めて冠位を定め冠の品によつて、上下の身分を定められた。これはすべて十二階あつた。最も上の位を大德といひ、それから小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智と下り、最も下の位を小智と名づけてあつた。その頃百濟の僧觀勒が來朝して曆を傳へたから、それを本として始めて曆を天下にお頒ちなされた。また官吏の公務上の心得を示し、一般國民の道德上の標準をお訓へ下さつた。世に十七條の憲法を申すものである。今日の憲法は國家統治の大本を定めたものであるから、名は同じであるが、太子の作られた憲法は全く性質を異にしてゐることは言ふまでもない。その大要は、

- 一、和睦を貴び、忤ふこと無きやうにせよ。
- 二、あつく佛法を敬へ。
- 三、詔を受けては必ず謹め。
- 四、群臣百官は禮を以て本とせよ。

- 五、貪慾を棄て、明かに訴訟を戒めよ。
- 六、人の善を匿すことなく悪を見ては必ず匡せ。
- 七、人の爲に官を求めらるな。
- 八、群臣百官は早く参朝し遅く退出せよ。
- 九、信は義の本である。事毎に信を顯せ。
- 十、忿をやめよ。人の考が自分に一致しないのを怒つてはならぬ。
- 十一、功過を明かにし、賞罰を正しくせよ。
- 十二、國司(國々の役人)たるものは私に民の物を奪ふな。國に二君がなく民に兩主がない。國民は皆、君を以て主と仰がなければならぬ。
- 十三、諸官吏は皆責任を重んぜよ。
- 十四、群臣は互に嫉妬するな。
- 十五、私を捨て、公に就くのは臣の道である。

十六、民を使ふには時を以てせよ。

十七、大事は獨りで斷めてはならぬ。必ず衆と共に議つて定めよ。

云ふのである。此の十七條は種々の意味で後世の政教の基本となつたものである。太子はその後蘇我馬子と議つて國史の書を作られた。これが我が國で歴史の書を書いた始である。しかし惜しいかな、此の書は後に蘇我氏が誅せられる時に焼けてしまつた。

太子はまた深く佛法をあげ、蘇我馬子と共にその弘通に専ら力を盡されたので、これより佛教は盛んとなり、多くの寺院が建立せられた。大阪の四天王寺、大和の法隆寺は太子の建立せられた寺の中でも殊に有名なものである。寺院の建立が多くなり佛像もしきりに造られるにつれ、建築・彫刻・繪畫などの藝術が著しく進み、すこぶる精妙の域に達するやうになつた。高麗の僧曇徴が來朝して紙・墨・繪具などの製法を傳へたのも此の御代であつた。法隆寺には我が國現存の最古の建築物を残してゐる。たゞ古いだけでなく、その建築が誠に巧で、人をして感嘆せしめるものがある。その金堂などは千三百年前の古建築であるが、今尚

法 隆 寺

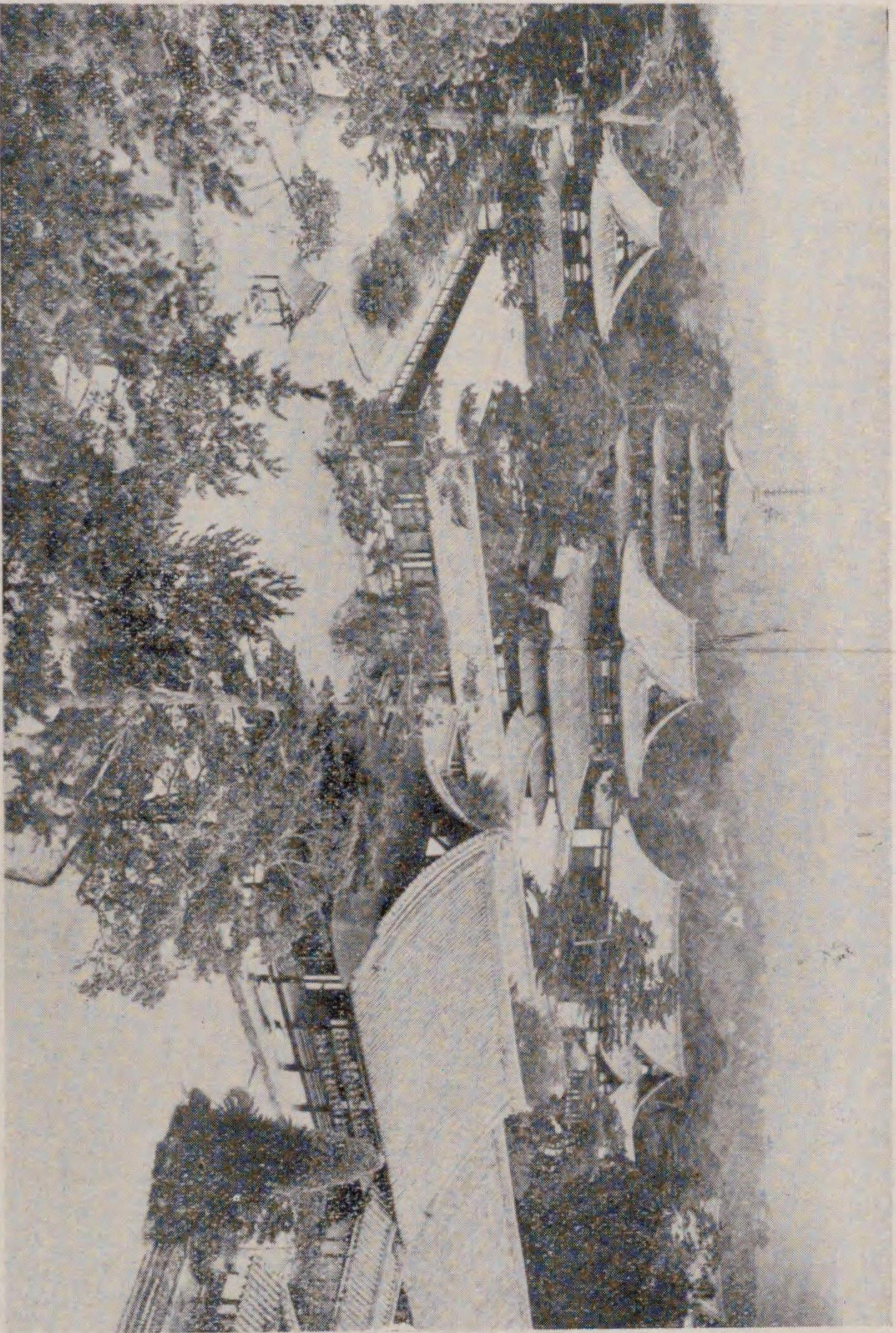
犯すべからざる偉人の如く深き威厳を具へ、永遠の生命を具へてゐる。後世の建築に比して種々の特質を持つてゐる。二重屋根の上層が割合に小さいから落着がよく、軒は深くかつ氣持よく反つてゐる。柱は細長い徳利のやうに中程がふくらんでゐる。下から約三分の一程の所で最も太く、両端へおもむろに細くなつてゐる。これは建築を堅固に見せる爲である。柱の上端の組物(小さい木片を色)には雲形の斗や雲形の肘木を使つてゐる。勾欄は卍字崩しで出てゐて、優美な感を與へる。柱のふくらみは卍字崩しの欄干は後世に全くない特色である。金堂内の壁に有名な畫がかいてある。西洋にも類まれな優れた壁畫だと言はれてゐる。佛壇中央の釋迦三尊、東の藥師三尊は當時の有名な彫刻家鳥佛師の作である。鳥佛師は彫刻家として腕がすぐれてゐるだけでなく、物の工夫が上手であつた。かつて元興寺の金堂の爲に一丈六尺の佛像に造つたが、丈が高いので、堂の中へ入れることが出来ない。多くの職人は堂の入口をこぼつて入れたら良からうと相談したが、鳥はうまく工夫をめぐらし、戸をこぼさないで入れたので、天皇は感心遊ばして大仁の位を授けられた。同じ法隆寺の金堂内の

殿 夢 川



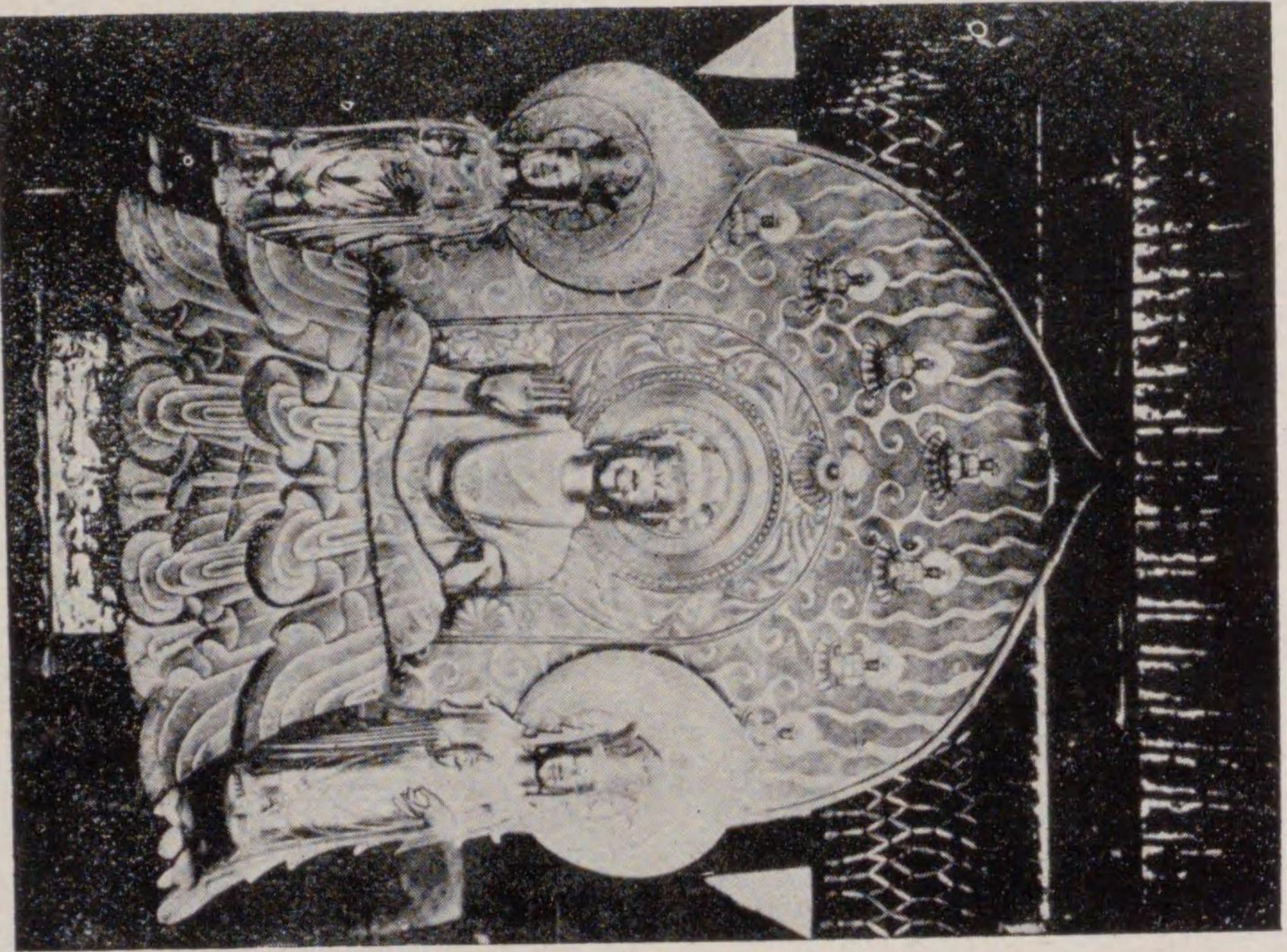
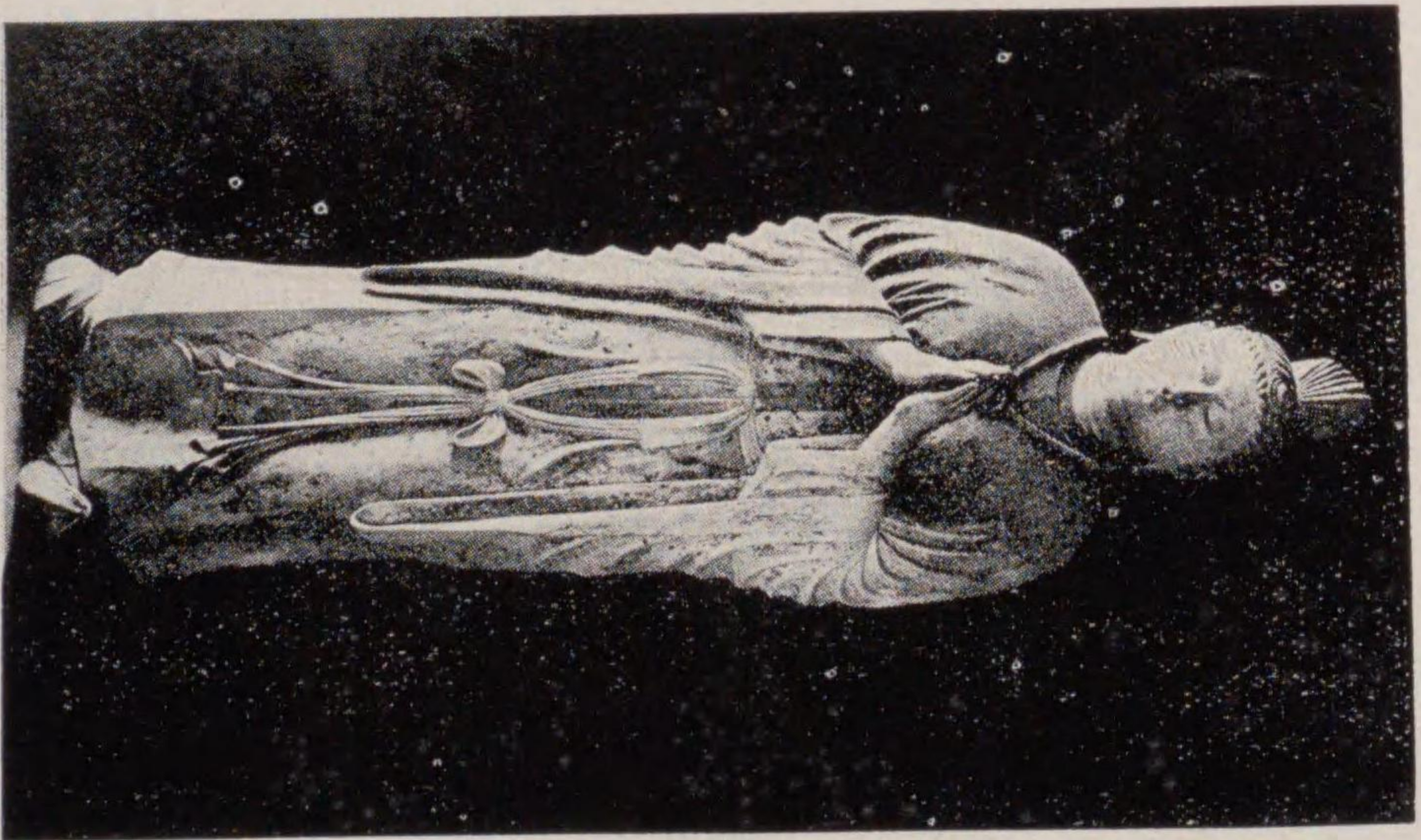
の(存現)氏彦頼田安を説傳たれら入に想冥間の夜七時或て於に殿夢るた部一の宮鳩班の子太徳聖は圖
るおてち満に分氣な祇神でのもたいがふ

四法隆寺



塔の向つて左が中門、右が金堂即ち本堂、右端が講堂である。講堂は藤原時代の建築であるが、他は廻廊の大部と共に推古時代の建築様式を傳へ、我が國最古の建築である。近景は聖德太子をまつる聖靈院である。これは鎌倉時代の建築である。

五 法隆寺金堂の釋迦三尊と三月堂の月光菩薩みづきがはまつ



向つて左は法隆寺金堂の釋迦三尊であつて、聖德太子及び妃が御病氣にかゝられた時、御子山背大兄王が鳥佛師に作らせて御全快を祈られたもので推古時代彫刻中、最もすぐれたものである。右は東大寺三月堂の月光菩薩である。前者の片くるしいのに比べて後者はなんとも言へぬほど崇高尊嚴なもので、この像に向ふと、思はず頭が下がるほどである。

玉蟲厨子は當時の建築の風を寫した工藝品であつて、その裝飾は工藝美術の粹をつくしてゐる。なほ同寺内の五重塔や中門等は何れも同時代の物で、金堂等しく優秀な建築である。

太子はかく佛法に力をお盡しになつたので神の如き崇敬を受けられ、種々の奇蹟さへ傳へられてゐる。或時甲斐の國から黒馬を献上した。太子はそれを召して、空を飛んで東へ旅立たれた。人々が驚いて不思議な事よと噂してゐるが、三日目にお歸りになり、「我れは此の馬に乗つて富士の峰を越え、信濃の國を廻つて來た。」と仰せられた。また或時のこゝ、勝鬘經に「いふ御經を講ぜられたが、終の日に空より三尺計りの蓮華が降つて來た」と云ふ。太子は千古稀なる偉人におはしまし、かく政治・宗教・學問・藝術等あらゆる方面に大なる功績をのこされたが、不幸にも即位せずして薨せられた。御年四十九。天下の人の悲しみ惜み申すこゝは父母を喪ふやうであつた。また聖徳太子が薨せられた後にお妃が悲しさにたへず、太子が死んでからお生れになつたと信ぜられた天壽國の有様を、多くの女官と共に五色の糸で美しい刺繍にこしらへられたこゝがある。此の一部分は今も尙法隆寺の東隣にある中宮寺に残

つてゐる。

第十一 支那との交通

九州地方の中には早くから支那と交通した者もあつて、支那の歴史にそれらの記事が残つてゐる。朝廷でも、應神・仁徳兩帝の頃には、頻りに使者が往來し、雄略の朝には支那へ工女を求められた事もある。太古で交通の不便な時代であつたにも拘らず、彼等の交通は早くから開けてゐたのである。しかしこれらは兩國の政府の間に公然と行はれた交通ではなかつた。聖德太子に至つて、始めて兩國の朝廷間に公然の交通を開かれたのである。つまり我が國はその頃までに三韓から色々の文物を輸入してゐたが、もはや大方輸入しつくして、我が國の文化は三韓と劣らぬほぎに進んだから、三韓の文化の源である支那と直接に交通して、更に多くの文化を傳へようと思はれたのである。

推古天皇の十五年(紀元一二六七年)に、小野妹子を支那に遣はされた。これが國家直接の交

際の始である。その頃支那は隋の世で、久しく分裂した國內が統一され、國勢が大いに振ひ、文物もすこぶる進んでゐた。一體支那人は昔からえらばつてゐて、よその國は皆支那の屬國のやうに思つてゐる。然るに太子は國書に「日出づる處の天子、書を日没する處の天子に致る。」と記されて對等の禮をこられたので、隋の天子はひごく怒つたさうである。しかし翌年妹子が歸朝する時、隋の使者がこれを送つて來た。その使者が歸る時、再び妹子は大使になつて送つて行つた。此の時の國書には「東の天皇敬んで西の皇帝に申す。」と書かれた。太子が少しも國家の體面を傷つけられなかつた御用意の程は深く伺ひ奉るべきである。此の時に高向玄理・南淵請安及び僧旻等八人を従はしめ、支那に留學させられた。これらの人々はその進んだ制度文物を學んで歸り、その新知識を以て種々國家に盡したが、殊にやがて行はれた大化の改新には重要な勳をするやうになつたのである。

間もなく隋は亡んで、唐が新たに起つたので、第三十四代舒明天皇の御代、前例に従つて六上三田稻を唐に遣はされた。これが遣唐使の始である。此の後兩國の交通は次第に繁

なつて、第五十九代宇多天皇の御代に派遣を停められるまで、約三百年間前後十二回も遣唐使をおくられた。されば學生僧侶の留學する者は益々多く、進歩した唐の宗教・學術・技藝を盛んに傳へて我が文物を盛大ならしめた。船は大抵四艘であつて、それに百數十人または數百人の役人や留學生が分乗した。今日は航海術が開けて海上も極めて安全であるが、航海の進歩しない當時は、唐へ渡るのは命がけの仕事であつた。それで朝廷におかせられても遣唐使の爲に、ひたすらに海上の安全を佛神に祈られ、船に位を授けたりせられたのであつた。かつて天平勝寶三年藤原清河が遣唐使になつた時、春日神社で海上の無事を祈られた。御叔母にあたらせられる光明皇太后が次のやうな御歌をお詠みになつた。

大船に眞楫し、貫き此の吾子をから國へやるいはへ神たち。

此の歌は大船に楫を多くつけて我が甥を載せて唐へ遣はすのであるから、神達よ、海上を平安ならしめ給へといふ御歌である。

第十二 大化の改新

蘇我馬子は物部守屋を亡ぼした後は、獨り朝廷で權威を振つてゐたが、その子蝦夷があつてを繼いで大臣になるに及んでは、父にもまさつて我がまゝであつた。曾て自分の墓の子の入鹿の墓に二つの墓を自分が死ぬ前から作つたが、その工事には天下の公民及び諸家の民を勝手に使つて憚らなかつた。聖德太子の御女大娘姫王は、「蝦夷は國政を私して多くの無禮を行つてゐる。天に二日が無いやうに、地にも二王はあらせられないのに、勝手氣まゝに我が家の民を使つて憚らない。」と御憤り遊ばした程であつた。入鹿に至つてはいよいよ、亂暴であつた。大娘姫王の此の御話を聞いて、大いに怒り、かつ前から聖德太子の御子山背大兄王の人望あらせられるのを忌み奉つてゐたから、その後軍を起して王子を攻め奉つた。王子は獸の骨を御寢殿に置いて窺かに遁れて生駒山に入られた後へ、家來が火を放ち宮をお焼き申した。灰の中に骨があるのを見て御死骸と思ひ一旦軍をかへしたが、王子は

こても遁れる道がないのを慥き給ひ、御自害遊ばすに至つたのである。それで世人は皆憤慨し、父の蝦夷さへ、さすがにその無道を吐つて「罪なくして太子の御後を失ひ奉つた。我が一族も久しうはあるまい。」と嘆いた云ふことである。入鹿はこれにもこりず、遂に己が家を宮門と呼び、その子を王子と稱するやうになつた。

かく不忠を極めたが、代々朝廷に仕へて官位も高く、強く深い勢力を作つてゐたから、心にこれを憎む者も、自ら手を下して蘇我氏に敵對するこゝは中々出来なかつた。此の時に當り一身を忘れて、國家の害毒を除かうとする偉人が現はれた。それは中臣鎌足である。中臣氏は天兒屋根命の子孫で代々神々の祭を以て朝廷に仕へてゐたのであるが、鎌足は時勢の良くないのを見て、偽の病氣を構へて朝廷を退き、ひそかに蘇我氏を亡ぼす謀を考へてゐた。それについては當時賢明の聞えが高かつた中大兄皇子を奉じて希望を達しようと思ひ、皇子に我が心中を明し奉る機を待つてゐた。會々或年の春に諸皇子等が大和の法興寺の庭で、鞠の御遊をなされた事があつた。その折にはからずも中大兄皇子の御查が鞠につい

鞠 六



に後、れば行にん盛に間の御公でま世近らか代時安平。ふ言もとクキサツてし讀音は鞠蹴は圖本。るあでのる跡を鞠で中のそてゑうな櫻柳風松に圍周。だん遊なれこも民平士武は。るよに巻繪語物竹興奈の代時倉鎌

て脱けおちた時、鎌足は直ちに拾ひ取つて手にのせて、恭しく御前に跪づいて捧げる。皇子も跪づいてお受けになつた。此のことが機會になつて、皇子は鎌足を隔てなく交り給ひ、御心の中に思はれる事は少しも隠さずにお告げ合はせになつた。遂に鎌足は皇子と蘇我氏を亡ぼす謀を御相談申し上げ、更に佐伯子麻呂・葛城稚犬養網田の二人の同志を語り、また蘇我石川麻呂を引き、皇極天皇(第三十)の四年(紀元一三〇五年)六月、三韓から貢を奉る日を期して事をあけることに定めた。此の日天皇は大極殿に出で給ひ、入鹿は天皇の御側に侍し申した。入鹿は豫てから人々の心を疑つて夜晝太刀を佩いてゐたから、鎌足は俳優に言含め、戯れにまぎらせて刀を解かせる。入鹿は笑つて劍を渡した。そこで皇子は十二の門をさし固めさせ、自ら矛(檜の如)を持つて御殿に隠れ給ひ、鎌足は弓矢を持つて皇子の御後に従つた。豫ての合圖の通りに、石川麻呂は三韓の王から奉つた表文を読み出す。子麻呂も網田もが入鹿を斬るはずであつたが、二人は入鹿の威勢を恐れて、汗を流したまゝ寄りつかない。すでに表文も終になつたが、まだ子麻呂等はぐすくしてゐるので、石川麻呂は恐し

くなり、身ぶるひをして聲が亂れたから、入鹿は怪しんで「何故にかくは恐れてゐるのだ。」と問うた。石川麻呂は「天皇の御座近く侍る故。」と僅かにまぎらした。もうぐづ／＼して居られぬので、皇子は自ら一聲合圖をかけられると、子麻呂等は跳りかゝつて肩を斬り、驚いて起上る所をまた足を斬つた。皇子は御前に平伏して、「入鹿は多くの皇子を失ひ、日嗣の御位を傾け奉らうとして居ります。」と奏せられたので、帝は聞かせ給うて殿中に入御なさつた。終に入鹿を誅し、その死骸を父蝦夷に賜うた。蝦夷は兵を集めて戦の用意をしたが、皇子は人をやつて君臣の義を説かせられたので、兵士は皆蝦夷を捨て、逃げたから、蝦夷は家に火をつけて自殺し、蘇我氏の本家は全く亡んだ。蝦夷は大臣であるため、朝廷から澤山の記録や寶物をお預かりしてゐたが、皆此の兵火に亡くなつてしまつた。

うちをさむ入鹿が首に四海波。

其角

入鹿父子が誅せられた時、皇極天皇は御位を御弟孝徳天皇(第六代)に譲られ、中大兄皇子を皇太子させられた。これまで朝廷の大官や地方の豪族は多くの土地をもち、人民を勝手

に使つて權威を振つてゐたから、その害が段々重なつて、朝廷の御威光もおのづから軽くなるやうな様子であつた。そこで多年驕をきはめた蘇我氏の本家が亡んだから、皇太子は鎌足と圖られ、これを機会として従來有力な諸氏のもつてゐた權勢をすべて朝廷へ收めて、今までの弊を悉く除き、面目を一新しようさせられた。同じ六月に新政の第一として年號を建てて大化と稱せられた。これ實に紀元一三〇五年で、我が國年號の始である。

従來、朝廷の役目は家筋によつて代々相つぐ習はしであつたが、かゝる世襲の制度を捨て、才能ある者は家筋にかゝはらず、官吏に任用することにせられた。これによつて新たに内臣及び左右大臣を置いて、中臣鎌足を内臣に、阿倍倉梯麻呂を左大臣に、蘇我石川麻呂を右大臣に任せられ、かつ多年唐に留學した高向玄理及び僧の旻を博士に任せられ、先進國を模範として種々の制度を定めしめられた。ついで朝廷には八省百官を置き、天下の土地人民を悉く朝廷に收めて公地・公民とし、しかも人口を調べて戸籍を作り、班田收授の法を立て、人毎に一定の土地を口分田として班け與へ、その人が死ぬると朝廷へ取戻す事とせら

れた。また従來の貢物をやめて、租・庸・調の制を立てられた。租は田地の收穫の中から一定の稻を納めしめ、庸は人民を公役に使ふ代りに米布等を納めしめ、調は絹布など土地の産物を納めしめる事を云ふのである。その他帝都の制度を定めたり、昔の國造・縣主を廢して新たに國司・郡司を置いたり、諸街道に驛を置いて交通を便にしたり、要地に關を置いたりして種々の新制度を定められた。此の新政は實に容易ならぬ大改革であつた。さればその實行にあつては、皇太子は先づ進んでその模範を示し、それまで御所有の土地人民を朝廷にお還しなされ、二つの日がなく、國に二人の君はあらせられない。天下を有ち人民を使ふここが出来るのは唯天皇ばかりである。三仰せられた。これより天下は悉く此の新政に服し、世の中の狀態が全くかはるこゝになつた。

第十三 朝鮮と蝦夷 律令の撰定

孝徳天皇が崩御せられ、皇極天皇が再び皇位にお登りになつた。これを齊明天皇(第三十)

と申し上げる。天皇が一日皇位から退いて再び皇位に即させられるこゝを重祚といふ。中大兄皇子はなほ皇太子として政をおたすけになつた。

蝦夷は日本武尊が征伐せられてから漸次に皇化に浴して來たが、なほごく遠方の地方は皇威に服せず、しばしば北邊を騷がした。先に第三十四代舒明天皇の御代に蝦夷がまた叛いて朝貢しなかつた。上毛野形名が將軍に任ぜられて征伐したが、敗れて壘に逃入つた。賊は勢に乗じてこれを圍んだので、手下の兵は皆散々になつてしまつて、防ぐこゝができなくなつたから、形名も堀を越えて遁れようとした。形名の妻は勇氣があり智謀があつて、「あなた御先祖は萬里の波浪をやぶり三韓を平けて、芳名を後の世まで傳へられましたのに、今あなたは遁れて、祖先の名を辱しめなされるのですか。」「三諫めて自ら夫の劍を佩き、侍女數十人に弓の弦を鳴らさせた。蝦夷もは弓の音を聞いて、「なほ殘兵が多いぞ。」「三思ひ誤り、恐れて退いた。その中に部下の兵も皆歸つて來たので、形名はこれを率ゐて、大いに賊を破り悉く虜にした。ついで孝徳天皇の御代に淳足・磐舟(共に新瀉縣)に二つの城を設けて蝦夷に備へ

させられた。齊明天皇の御代になつて越國司阿倍比羅夫が兵船百八十艘を率ゐて北に航し、秋田・淳代（秋田縣）地方の日本海方面の蝦夷を降し、更に進んで北海道まで攻入つた。翌々年比羅夫は再び遠征を催し、北蝦夷を案内し、遠く北方に進んで肅慎を討つた。肅慎は滿洲に住んでゐた種族であるが、北海道に來り、我が北邊を騷がせてゐたものである。比羅夫の功により、日本海方面は此の後は平靜であつた。

東北はかくの如き有様であつたが西方でも此の頃新羅が唐と結んでその兵をかり、隣國の百濟を亡ぼさうと企て、一度その王を降参させた。皇太子は百濟からの願によりこれを救はうとせられ、親しく天皇を奉じて筑紫（福岡縣）にお進みになり、軍を指揮せられたが、戦の最中に御不幸にも天皇は行宮朝倉宮で崩御あらせられた。皇太子はなほ軍を督して百濟を助けられたが、一方に百濟の國內で君臣の間に不和が起り、王はその重臣を殺したりして國內に騷が起つたから、その隙に附込んで新羅は勢鋭く攻立てた。かつ此の時我が海軍は唐の海軍と戦つて白江口に敗れてから、百濟は力がつきて全く亡んでしまつた（紀元一三二三年）。

皇太子は時勢の變化を察せられ、永く外國と兵を構へる事は不利であるから、遂に命じて軍を引上げさせられた。此れが爲にやがて高麗も唐に亡ぼされ、朝鮮半島は我が國の勢力から全く離れてしまつた。かく新羅は我が國から叛いて離れたのであるが、なほ我が國を恐れたので此の後も時々貢を上つて來たけれども、朝廷は常に目下の國として待遇せられた。

中大兄皇子

朝倉や木の丸殿に我れ居れば名乗をしつゝ行くは誰が子ぞ。

（朝倉の宮の丸木で作つた御殿にゐるこ、此の宮へ役人が參つて名を名乗つてゐるが、それは誰れであらうか）

やがて皇太子は筑紫からお歸りになり、近江の志賀（滋賀縣）に大津宮を開いて皇位に登られた。天智天皇（第八代）と申し上げる。蘇我氏を誅し、かつ大化の改新をお輔け申して大功を立てた中臣鎌足を内大臣に任ぜられた。これが内大臣の始である。鎌足が病んで重くなつた時に天皇は親しくその邸に行幸なさつて、種々手厚い仰せを賜うたが、ついで中臣の

ふ氏を改めて藤原に賜ひ、最も高い位である大織冠を授けられた。薨じた後は大和の多武峰に祀られた。今日は別格官幣社談山神社が建てられてある。

大津宮の
さきに唐は三韓の事によつて一旦兵を交へられたが、事が落着いた後は再び親しく交を通じ、大いに彼の國の文物を輸入せられた。天皇はまた内治に大御心をそゝがせられ、戸籍を作り學校をおこし、時の制度を定められた。始めて水時計を作られたのが六月十日であつたから、今日此の日を時の記念日として記念してゐる。また大化の新政に於てすでに大いに唐の制度を用ひられたが、此の頃になつて、鎌足等をして種々の法令を撰ばせて一層新政を完成させられるに至り、唐の制度の模倣は益々多くなつて來た。次に御子弘文天皇(第三十)が立ち給ひ、同じく大津宮に居られたが、その次に天智天皇の御弟天武天皇(第四)が御位に登られ、都を大和の飛鳥に置かれた。志賀の大津宮は間もなく衰へ、永く荒れはてた都として文人に歌はれた。

柿本人麻呂

さゝなみのしがの大和田よむも昔の人にまたも逢はめやも。

(志賀の濱邊の入江は波が静かになつて大宮人の船遊を待つてももう二度昔のやうに大宮人は來ない)

天武天皇は天智天皇の御志をついで、法令の完成に御力を盡されたが、持統天皇(第四十)を経て、天武天皇の御孫文武天皇(第四十)の御代に到り、遂に忍壁親王・藤原不比等等が勅をうけて改修するに及んで、大寶元年(紀元一三六一年)に全く出來上つたので、世に大寶律令と言つてゐる。これより朝廷の諸種の制度は面目を一新して、大いに整ふやうになつた。律は罪を決する標準を示したもので今日の刑法の如きもの、令は行政上必要な種々の規則を定めたものである。

大寶令によるに、中央官廳として京都に二官八省が置かれてあつた。二官とは神祇官と太政官である。殊に神祇官が令の明文で、諸官省の初に置かれて神を祭ることが役目となつてゐるのは、我が國體の特色を現してゐるのである。太政官は政を統べる所で太政大臣・

左右大臣・大納言等の職員がある。その中でも太政大臣は最上の長官で最も徳望のある人を選んで任ぜられる。則闕の官云つて、適當の人がなければ任ぜられない事になつてゐた。八省は太政官に屬して諸政を分擔してゐる。中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮内の各省を言ふのである。中務省は宮内省は今日の宮内省に當り、式部省は今日の文部省に似てゐる。治部省は貴族・僧尼・外國に關する事、民部省は土地・人民・租税の事、兵部省は軍事、刑部省は裁判、大藏省は諸國の調物の出納を掌る。地方には國・郡に國司・郡司を置き、都に左右京職を置いて管内の政治を掌らせる。特に九州は國防・外交上の要地であるから、太宰府を置いて、その地方全部を治めさせてある。また徵兵の法を定めて人民一般から兵士を募り、京都には左右近衛府・左右兵衛府など、諸國には軍團、九州には防人を置いて警備に任じてあつた。

防人の歌

今奉部與會布

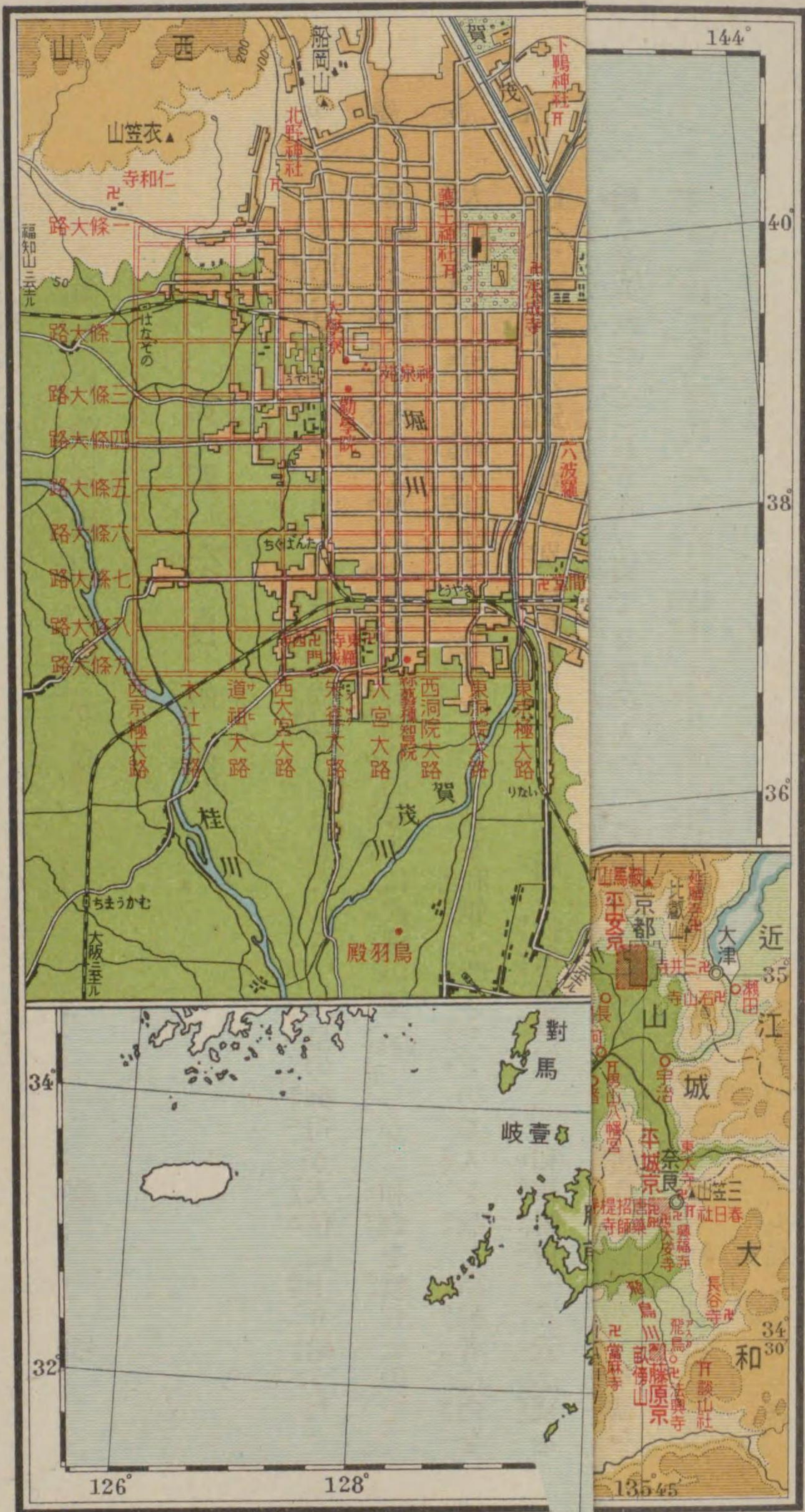
今日よりは顧みなくて大君のしこの御楯も出立つわれは。

(今日からは自分の事や家の事を顧みず、大君の御爲に敵の矢を防ぐ楯ならうとして家を出て行くのである)

教育は京都には大學寮を置き、地方には國學を置いた。しかし今日の如く一般の子弟を教育するのでなく、身分ある者の子弟を教育した。各役所には大體、長官・次官・判官・主典の四等の官吏を置かれた、これを四部官云ふ。長官はその役所の長、次官はそれを助け、判官はその役所を取締り、主典は書記の仕事をしたのである。此の四部官の名を示す文字は役所によつて色々に違つてゐるが、大抵前記のやうに讀んでゐる。例へば省にあつては卿・輔・丞・録・書記、國にあつては守・介・掾・目・書記。また律には答・杖(共に鞭で徒(今日の)・流・死の五刑を定められた。

大寶律令は此の後永く政治組織の根據になつた。勿論その制度には時代と共に多少の變遷があり、武家政治の時代になつてからは多くは名稱だけ残り、大部分は實際に行はれなかつたけれども、大體明治十八年まで保存せられたのである。しかし位階勳等の制度などは今

第二圖 奈良時代初期要地圖



和銅改元

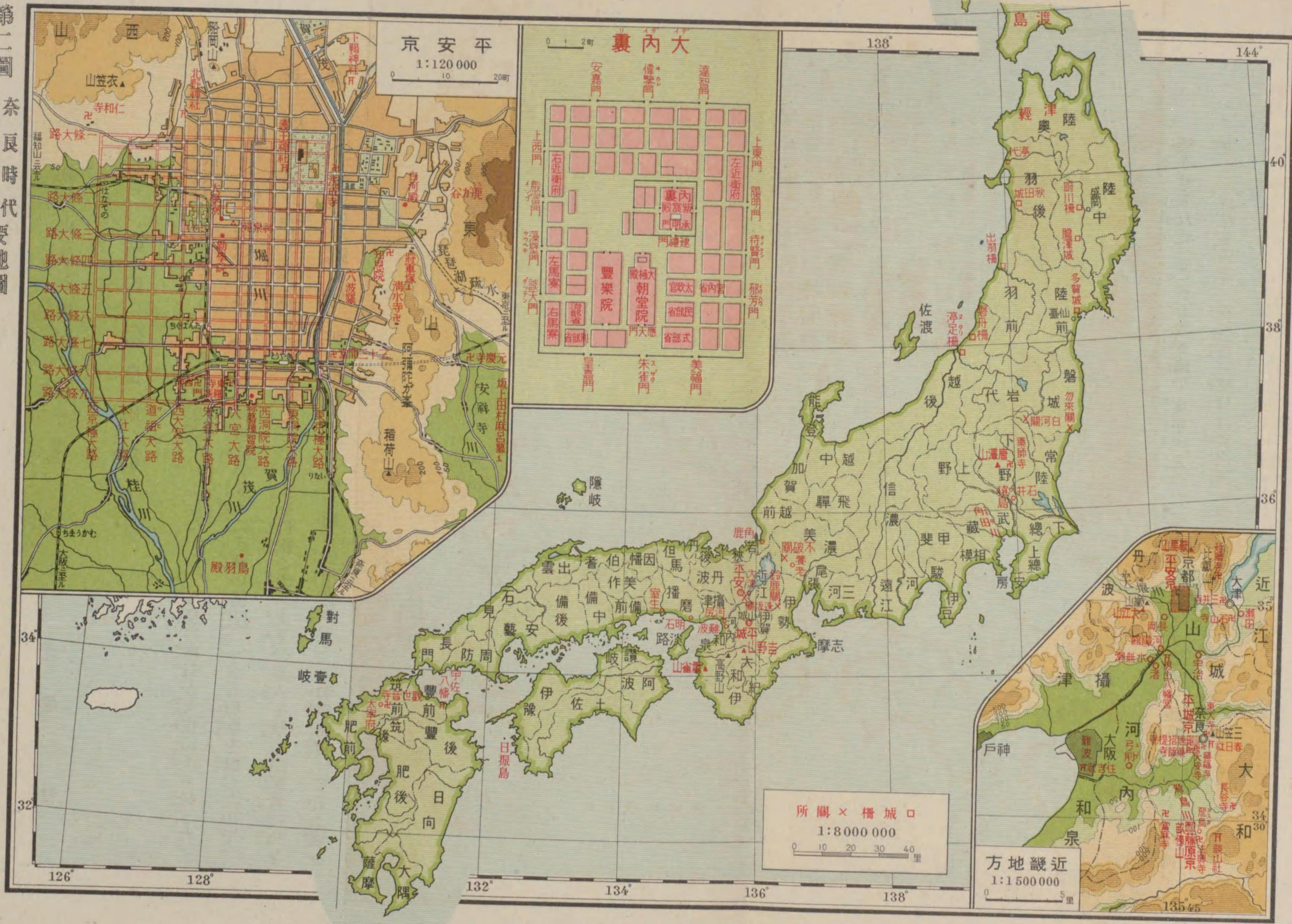
日も尙大寶律令の規定を殆んごそのまゝ、お用ひになつてゐるのである。
雨乞に曇る國司の涙かな。
燕村

第十四 奈良奠都

文武天皇が崩御せられて、皇子が尙幼くおはしたから、天皇の御母が天位に上り給うた。第四十三代元明天皇に申し上げる。御即位の翌年に武藏の國(埼玉)から和銅を獻じたので、大いに喜び給ひ、神の助けを思召して、年號を和銅に改め天下の罪人を赦し高齡者に物を賜うて御喜びを頒たれ、別に鑄錢司を置き、錢を鑄る役所を置いて、「和銅開寶」に云ふ錢を鑄させられた。これが我が國で文字の入つた錢を鑄た始である。一體昔はしばしば年號を改められたもので、殊に古い時代は目出度い事があるに改元(年號を改)せられたものであつた。早く文武天皇の御代には大和から赤い雉子を奉つた者があつたので朱鳥に建てられ、文武天皇の御代には對馬から銀を奉つたので大寶に建てられたのも、その一例である。

第二圖

奈良時代初期要地圖



た。早く天武天皇の御代には大和から赤い雉子を奉つた者があつたので朱鳥を建てられ、文武天皇の御代には對馬から銀を奉つたので大寶を建てられたのも、その一例である。

持統天皇の八年より、都を藤原の京（畝傍及びその東方の地）に置かれたが、土地が狭かつ不便なので、元明天皇は都を奈良に遷さうとみなされ、種々都遷しの準備をせられたが、遂に和銅三年になつて工事も大方竣工したから、その三月に新京へお遷りになつた。實に紀元一三七〇年の事であつた。これより元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳の五代を経て光仁天皇の御代まで御七代七十餘年の間は、大抵此の都にお在になつた。よつて此の間を奈良朝または奈良時代と呼んでゐる。奈良に都が奠められる以前は、概ね御代毎に宮居を改められ都も遷されたが、その頃は諸事が簡單であり都も小さいものであつた故、遷都も容易であつた。然るに三韓服屬以來文化の發達につれて、政務が複雑となり、都が廣大となり都下の人口が増し、建築術の發達に伴つて宮殿の結構も壯麗になつたから、遷都も容易でなくなつて來たのである。かくて大化の改新以後唐の都城に倣ひ都の制度も定められたから、遂に此の御代に至り奈良に壯大な都を奠められる事になつた。

奈良の都は平城京云ふ。今の奈良市の西にあつて東西約四十町、南北約四十五町の方形

の地を限り、中に縦横に碁盤の目の如く正しく道をつけてある。都の中央を南北に走る大通を朱雀大路云ふ。その東を左京云ひ、西を右京云ふ。此の大路の北部に大内裏即ち宮城があつて、皇居及び多くの役所がその中に建てられてゐる。かくて都の面目は全く改まり、外國に對しても恥かしからぬものになつた。

綿の花大和は多き都かな。

菜のはなや此の邊までは大内裏。

麥水
召波

次に文武天皇の御姉がお立ちになつた。第四十四代元正天皇であらせられる。或年天皇が美濃國(岐阜)不破山の行宮に行幸せられた時、多度山的美泉を見そなはしたが、その水で洗へば痛い所もすぐ癒り、白髪も黒にかへり、目の見えない者も明かになつたので、年號を養老と改められた。

第十五 聖武天皇 佛教と文化

元正天皇の次に文武天皇の皇子がお立ちになつた。聖武天皇(第四十)と申す。藤原不比等は鎌足の子で、大寶律令の修正なきに大功を立てたので天皇はその功を思ひ、その女光明子を納れて皇后とせられた。藤原氏の女が皇后に立てられ給ふ始である。不比等に四人の男子があつた。皆學問にはけみ、それ々々出世して四家に分れたが、長子武智麻呂は南家をたて、次子房前は北家をたて、三子宇合は式家を、四子麻呂は京家を起した。京家は早くたえ、南家式家は永く續いたが平安朝の中頃からあまり著れず、北家のみ獨り繁昌するやうになつた。

聖武天皇の御代は、唐は玄宗帝の時代で唐朝の最盛期であつて、當時我が國から留學する學生、僧侶はすこぶる多く、盛んにその文物を輸入したので、我が文化の發展が著しく、燦然たる奈良朝の文明を現出した。

青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如く今盛りなり。

小野朝臣老

當時留學生中で殊に名をあげたのは、吉備眞備と阿倍仲麻呂とであつた。才學は唐の大家に譲らぬ程で、彼の國人の稱讃を得た位であつた。眞備は歸朝後朝廷に仕へた。大學を盛んにし、城を築き、軍制を改革するなご、政治の才にも富んでゐたから段々出世して右大臣にまで上つた。仲麻呂は唐の政府に用ひられて彼の地に留まつてゐたが、後に我が遣唐使藤原清河が行つた時、その接待役を命ぜられた。清河が唐の天子玄宗帝に拜謁するご、天子はその禮儀正しいのを見て、「日本には賢君があらせられると聞いてゐる。今使者の禮儀正しいのを見て、いかにも尤もな事だと思つた。日本は君子の國だ。」と言はれたさうである。清河が歸朝する時、仲麻呂も歸りたいご玄宗帝に願つて許された。明州といふ港まで來て平素睦じくした唐人と別れを惜み、饌別の宴に詩なごを作つてゐたが、なほも名残が惜まれて二十日の月の出るまでも語り合つた。一天くまなく晴れ渡り、海原遠く月の照すのを見て、仲麻呂は思はず涙をおこし故郷の事を思ひ出して、

青海原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも。

(海上を遙かに眺めるご月が上つて來る、それは故郷の春日の三笠山のあたりから上つた月であると思ふご故郷が大へんなつかしい)

と詠じた。彼の國人にはその意味がわからないから、これを漢詩に譯して見せた。これを讀んだ人々は皆、仲麻呂の心の中を思ひやつて、共に涙を流したご云ふ。不幸にも歸途、海上が大いに荒れて、すでに魚の腹中に葬られかけたが、やうく安南國に漂着し、清河と共に唐に歸り、二人ごも唐の朝廷に仕へたが、遂に歸國する機會がなくなつて、唐で死んだのであつた。

支那ごの交通が漸次盛んになつた爲に、漢學は大いに進歩し、學者も多く出で、書籍も色々作られるやうになつた。先に聖德太子が撰ばれた國史は蘇我氏の亂に焼け失せてしまつたが、後に天武天皇は歴史の本を作る御志をもち給ひ、古來の傳説等を一々取り調べて誤をお訂しになり、稗田阿禮に勅して諳誦せしめられたが、未だ文章に書くまでには至らないで崩御せられた。それで元明天皇は太安麻呂に勅して、阿禮が諳誦した事ごらを本に書記し

上らしめられた。これを古事記云ふ。神代から推古天皇に至るまでの歴史であつて、現存せる我が國最古の勅撰史籍である。純粹の國文で記してあるが、當時はまだ假名の發明がなかつたから、漢字を使つて「坐三畝火之白禱原宮治天下也。」云ふ體裁に記してある。天皇はまた諸國に命じて、國名を二字に改め、かつ意味の善い字をえらばせられた。例へば木の國を紀伊(和歌)とし、遠淡海を遠江(静岡)に改められた如きである。更にまた諸國の産物傳説等を記して上らしめられた。これを風土記云ふ。今は出雲(島根)・播磨(兵庫)・なごの五國の風土記の外には、諸國の風土記の斷片が少々残つてゐるばかりである。大體乾燥無味な文であるが、中に浦島太郎や羽衣や「出雲國引等」のやうに尊い傳説も載つてゐて、當時の國土の有様や國民の思想を知るのに貴重なるものである。豊後(大分)の風土記にはこんな話が載つてゐる。此の國の田野云ふ所は廣い野で土地が肥えてゐた。それで百姓が富榮えた。弓が好きであつたが、遂に奢にふけて餅を的にした。此の餅は白鳥になつて飛去つたが、それから田は荒れて百姓は死絶えた云ふ。次いで元正天皇は舍人親王に勅して神代

から持統天皇までの歴史の本を修めさせられた。これが日本書紀で官撰の國史の始である。古事記よりも詳しくかつ整頓し、立派な漢文で記してある。

明治天皇御製

いそのかみ古事記は敷島のやまこ言葉の葉なりけり。

また此の頃は和歌が大いに發達した。當時の歌を集めた本を萬葉集云ふ。その頃は一般平民も感想が心の中に思ひ浮ぶる歌を詠じたものであつた。無理に作つた歌ではなく、自由な自然な氣持を歌つてある。多くの歌人の中にも、柿本人麻呂は持統・文武の兩朝に仕へた人で、敬神忠君の念が深く心の廣い氣分の朗かな天才であつたから、後に歌聖とたへられた。持統天皇がかつて大和の吉野の離宮に行幸せられた時に、人麻呂が詠み奉つた歌は次のやうであつた。天皇を神様として尊んだ古代の人の忠義な心が、よく詠まれてある。

やすみし、我大君 神ながら 神さびせすこ 吉野川 たぎつ河内に 高殿を 高しりま
して 登り立ち 國見をすれば たなはる 青垣山 山神の 奉る貢こ 春べは 花か

ざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり ゆき副ふ川の神も 大御食に 仕へまつるこ 上つ
瀬に 鵜川を立て 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 頼りて奉れる 神の御代かも。

反歌

山川もよりて奉れる神ながらたぎつ河内に船出するかも。

右の歌は和歌の一種であつて、長歌云ふ形式である。歌の大意は、我が大君は神様であらせられるから、神様らしくなされて、吉野川の河べりで急流が曲つて流れてゐる所の内側に御殿をお建てになり、そこに登つて國を御覽になるこ、山が幾重にもめぐつてゐる、その山の神は貢を献上するこで、春には花を頭に挿し、秋になるこ紅葉を頭に挿してゐる。また御殿の近くまでも流れ添うてゐる川の神も、天皇の御食物に奉るこで、上方の瀬には鵜を使つて魚をこり、下方の瀬では小網をさし渡して魚を取らせたりしてゐる。かくの如く人民だけでなく、山や河の神までも力をつくして天皇に仕へ奉るのは、まことに尊い御代である。反歌は前の長歌の言ひ残したこを歌つたものである。その意味は山川の神も參つて仕へ

奉る、此の曲つた急流の内側から、天皇は神様らしく御船に乗つて出て行かれるのが、まことに貴いこであるこ云ふ意味である。

山部赤人、山上憶良は奈良時代の中頃に出た人で、赤人は自然を愛して上品な歌を作り、憶良は漢學に精しく愛情に富み意氣の壯んな歌を作つた。萬葉集は漢字ばかりで記してある。これを萬葉假名云ふ。次に一例を示して見よう。

山部赤人

春の野に葦摘みにこ來し我れぞ野をなつかしき一夜寝にける。

春野爾 須美禮探爾等 來師吾會 野乎奈都可之美 一夜宿二來

山上憶良

銀も金も玉も何せんにまされる寶子にしかめやも。

(金銀も玉も何のれうちもない、子供よりよい寶はない)

銀母 金母玉母 奈爾世武爾 麻佐禮留多可良 古爾斯迦米夜母

大伴家持は奈良朝の末頃の人物である。名門の出であつたから、中々出世もした。かつ眞面目な軍人であるから雄壯な歌を多く残してゐる。

丈夫は名をし立つべし後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね。

(男子は手柄をして名をあげなければならぬ、後の世の人も聞きついで感心して話してくる爲に)

また聖武天皇は深く佛法を信ぜられ、國家安穩・五穀豐作を祈る爲に、諸國に令して國分寺・國分尼寺を建てしめられ、特に大和の國分寺にして奈良に東大寺を建立せられた。その金堂には大佛を安置してある。高さ五丈三尺、金銅製の坐像で、實に七十萬斤の銅一萬餘兩の金を費したと云ふ。その後二回の兵火にかつた。今の大佛は江戸時代の初に、金堂は江戸時代の中頃、即ち元祿年間に修復したものである。殿堂は元のものに比して大いに縮められてゐるが、今尙世界最大の木造建築で高さ十五丈六尺もあるのである。此の大佛鑄造の時に金が足りないで困つたが、丁度陸奥の國からこれをえて献上したので、無事にでき上

つた。天皇は大いに喜ばれ、親しく東大寺に行幸になつて盛んな佛會をお舉げになつた。

大伴家持

皇の御代さかえんこ東なる陸奥山に黄金花さく。

今日奈良に行けば、奈良時代の寺院・佛閣が尙少からず残つてゐる。長年月を経てゐるから多くは荒れはて、今は只その數分の一を傳へてゐるのみである。松林の中に仰ぐ五重塔、芝生に見える堂舎のあこは昔の盛大の名残を語る一部分にすぎない。かの藤原氏の氏寺として平安時代以來殊に榮えた興福寺を始め、大安寺・藥師寺・唐招提寺等は皆その頃の大寺院で、所謂南都七大寺と言はれた寺の中であつた。

奈良七重七堂伽藍八重櫻。

芭蕉

七大寺梅に柳に立腐り。

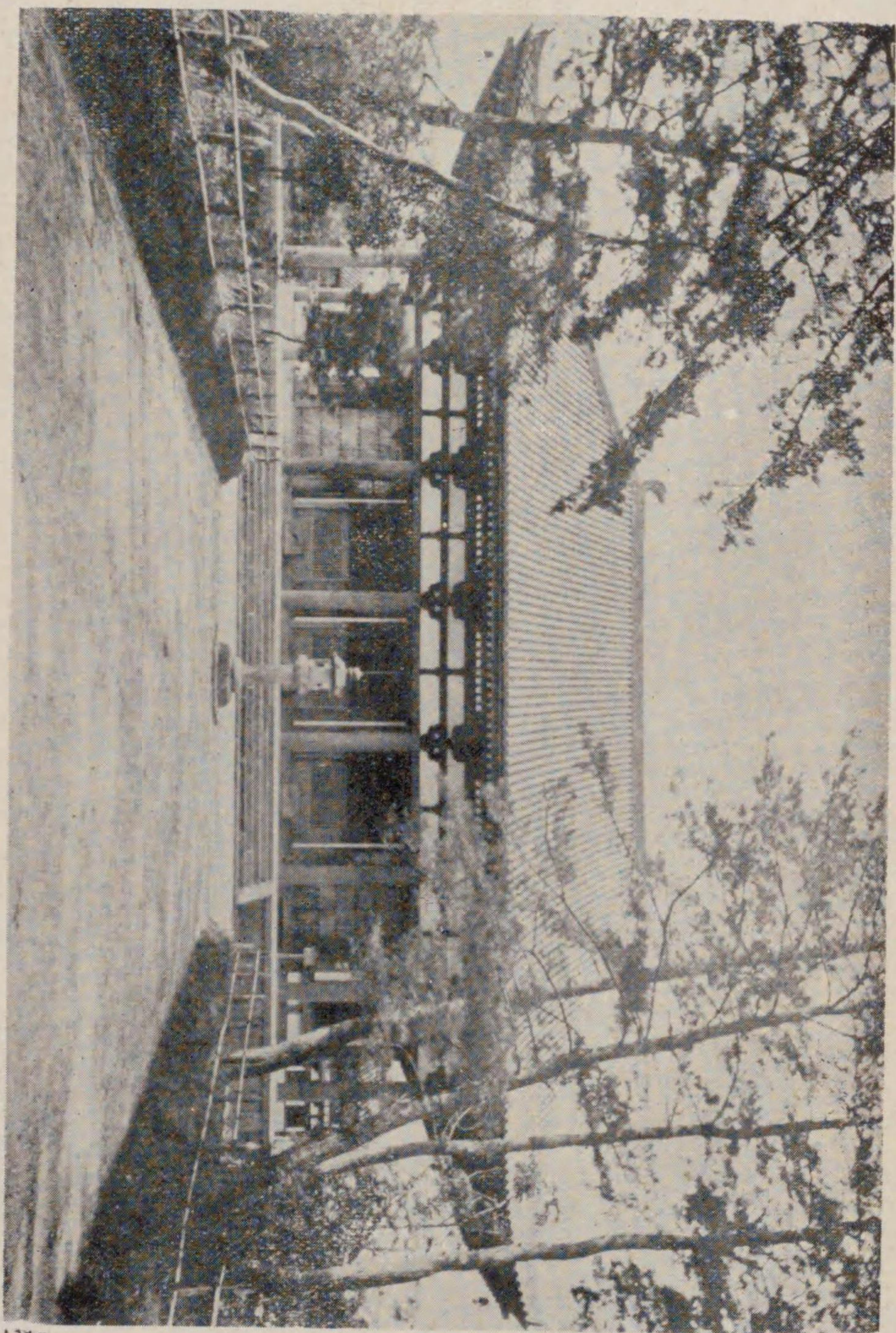
青々

蚊遣火や勤はじまる國分寺。

五晴

かやうに佛教の隆盛に伴ひ、建築・彫刻は恰も支那の盛唐時代の影響を受けて、むしろそ

れ以上の大發達をなし、美術國としての日本の國名を永く世界に誇り得る事となつたのである。建築で當時のまゝ残つてゐる物として立派なものは、藥師寺の東塔と唐招提寺の金堂である。藥師寺東塔は天武天皇時代の建築である。三重塔であるが、今は各層ごとに飾の屋根を一つづつ附けてあるから、ちよつと見ると六階に見える。六つの屋根と屋根との間を狭くして最も上の屋根の上に立つ九輪を、うんと長くしてあるから、非常に長い塔であるが危険な感を與へない。つまり落着がよいのである。軒の出が深く屋根の反が緩やかであるから、何も言へぬ心地よい感じを與へる。その上各層の屋根の大小の差を眼立つていちじろしくしてあることは、此の塔の美觀を大いに増してゐる。唐招提寺の建立されたのは奈良時代の文化の最も盛んな時であつて、建築も長足の進歩をした、所謂天平時代(聖武天皇の)であつた。金堂を見るに先づ第一に實に威嚴のある、神々しい引きしまつた氣持を受けるのである。堂の前面の一間だけに、壁をぬらす、戸をつけずに、只柱だけ並べて立て、あるのは、おごそかな、廣々とした感を與へる。内部の柱や欄間には美しい彩色模様を施してあるが、



七 唐招提寺金堂

金堂を南から寫したもので、雄大にしていかにもどつしりとした感があり、しかもどこどなく華麗な氣分のする建築である。

難 困 の 通 交 上 海 唐 日 八



てせ載か文經や像佛に共と人十數徒のそが眞鑑、てつあで部一の傳船征東上和眞鑑たいかの行連僧に代時倉兼は圖
。るあでのもたし示を景光の時たし船難、で中途たし帆出に爲の教布へ國が我

九 奈良時代貴婦人の遊戯



正倉院御物の八尺のこに圖が刻んである。

今は大抵剥けてしまった。此の二つの堂塔の外に、當麻寺(奈良)の東塔、西塔、東大寺の三月堂、新樂師寺(市)の本堂などは皆その頃の立派な建築である。

彫刻が我が國で空前絶後の發達をなしたのは、實に此の天平時代であると言はれてゐる。東大寺戒壇院の四天王、同三月堂の不空絹索觀音・梵天・帝釋天、樂師寺金堂の樂師如來の如きは、寫生理想を調和し、崇高にして圓滿、世界的に永遠の生命を有するものである。工藝美術品の今日に傳はつて最も珍重されるのは、正倉院の御物である。凡そ三千點、大抵は聖武天皇の御遺物である。佛器・武器・樂器・鐘・鏡等、種々の貴重品・日用品を含んでゐるが、しかも皆美術上で優秀な物である。世界何處の國にも此れ程多くの古代工藝美術品の良いものを完全に保存してゐる國はない。正倉院は實に世界の寶庫である。

當時の名僧中で立昉・行基・良辨・鑑眞は殊に有名な人である。立昉・行基は法相宗の人である。立昉は唐に學び、吉備眞備と共に歸朝して、聖武天皇の御信任を蒙り政治にも與つた。行基は諸國を巡行して所々に寺を建て、橋を架け道を通じて民利を計つた。されば世人の尊

信はすこぶる篤く、一度工を起すこ、人々が集り來つて功を助けた言ひ傳へてゐる。西國から航海して淀川口に來る航路に、一日の航海里程にあたる所々に港を定めて便を計つた。これを五泊云ふ。播磨の室生(室津)・同國韓泊(村福泊の邊)・同國魚住(魚住)・攝津の大和田(兵)・河尻(淀川の)の五つである。良辨は華嚴宗を開き、行基と共に東大寺建立に力をついた。鑑眞は唐の僧で多くの弟子を連れて來朝し、律宗の開祖となつた。我が國へ來る途中度々難船して、海水が眼に入つて盲人となつたが、なほ少しも志を改めず、六度目に遂に我が國に來て法を弘めたのであつた。奈良朝にはこれら三宗の外になほ三論宗、成實宗、俱舍宗があつた。後世これらを併せて古京の六宗と言つた。古京は奈良を指した語である。聖武天皇は深く佛法を信じ給ひ、遂に天位を皇女に譲つて出家なされた。天皇御出家の始である。皇女が位に即かれて孝謙天皇(第四十)に申し上げる。聖武天皇が出家なされてから光明皇后も同じく御髪をおろしなされた。皇后は仁慈の御心が深くおはし、施樂院を設けて貧民の病氣を救はせられ、また悲田院を設けて孤兒を養はさせられるなご、慈善事業に力を

おつくしになつたのである。

菊の香や奈良には古き佛たち。
頭をふらぬ柳は行基菩薩哉。
秋立つや素湯香はしき施樂院。
虫干や甥の僧訪ふ東大寺。

芭蕉 芭蕉
宗因 宗因
同村 同村

奈良の都は咲く花の如く榮えて、風俗も華やかなものになつた。家は碧瓦で屋根をふき、柱を赤く塗るやうになり、衣服は古は左衽即ち右前に着てゐたのが左前に着るやうになり、袖がひろく、裾が長い、模様の美しいものこかはつた。しかし田舎の方はまだ開けず、貧乏な民が多かつた。道も不完全であり、宿屋もないから、旅人は自分で食物を運び木の葉に盛つて食べるやうな有様であつた。

第十六 和氣清麻呂

藤原氏は聖武天皇の御代に、その勢力が一時衰へて、橘諸兄・吉備眞備・僧玄昉の三人が朝廷で勢力を得た。橘氏は敏達天皇(第十代)の皇子の難波王の御孫美努王の妃三千代から始まる。三千代は葛城王をお生みなされたが、元明天皇の時、宮中の御宴に侍して、橘の姓を賜はつた。葛城王は橘の氏の絶えんことを憂ひ、聖武天皇の御代に奏請して、橘の姓をつぎ、名を改めて諸兄と言つた。これから橘氏は名族として朝廷に仕へるこゝになつたのである。その橘の氏を賜はつた時の御製は次のやうな有難いものであつた。

橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれざいや常磐の樹。

橘は蜜柑のやうな木である。その枝に霜が降つてもその實も花も葉も枯れないやうに、

橘氏は永く繁昌するであらう云ふ御歌である。

時に藤原氏の四家の中の、式家の藤原宇合の子廣嗣は太宰少貳に任ぜられて筑前(福岡)にゐるが、玄昉眞備を除かんことを上表した。朝廷ではお許しにならなかつたから、廣嗣は太宰府で兵を擧げたが、大野東人が命を受けて討ち、すぐ誅してしまつた。しかし玄昉

は我がまゝな振舞が多かつたので、後に太宰府へ逐ひやられ、その地で歿した。世人はこれを以て廣嗣の靈が取附いたのだと言つてゐた。

孝謙天皇の御代に南家の藤原仲麻呂は中々才學があつたから、御信任を蒙つて、惠美押勝云ふ姓名をさへ賜はり、一時はその權勢が飛ぶ鳥を落す位であつた。従つて勝手氣まゝな行もおのづから多くなり、内外の怨を受けるに及んで、御信任も薄らいでしまつた。遂に第四十七代淳仁天皇の御代に近江(滋賀)に走つて兵は擧げたが、すぐ誅せられた。

淳仁天皇の次に孝謙上皇が重祚せられた。稱徳天皇(第四十)に申し上げる。此の頃河内の(大坂)の弓削に僧道鏡云ふ者があつた。天皇は御父聖武天皇の御志をついで佛教を

信仰し給ふこゝが篤く、僧侶に親しみ、これをちかづけなされたから、道鏡も御信任を得て、次第に政治に與るやうになつた。太政大臣禪師となり、法王の位をさへ授けられたから、道鏡は次第におごり高ぶつて、諸大臣の上に立ち、勝手なこゝをするやうになつた。たまたま太宰主神中臣習宜阿曾麻呂云ふ者が道鏡に追従して、宇佐八幡(豊後)の神教である

「道鏡を帝位にお即かしめになりましたら、天下は太平でございませう。」と奏した。道鏡は此の由を聞いて喜んだが、天皇は御迷ひ遊ばした。ももより我が國は古來君臣の別が定まり、臣下であつて皇位に登るが如きことは斷じて許すべからざる事ではあるが、宇佐八幡大神の神教に云ふことであつたから、天皇は夢のお告により、御信任遊ばした和氣清麻呂をお召しになつて、宇佐に遣はして改めて神託を請はしめられた。

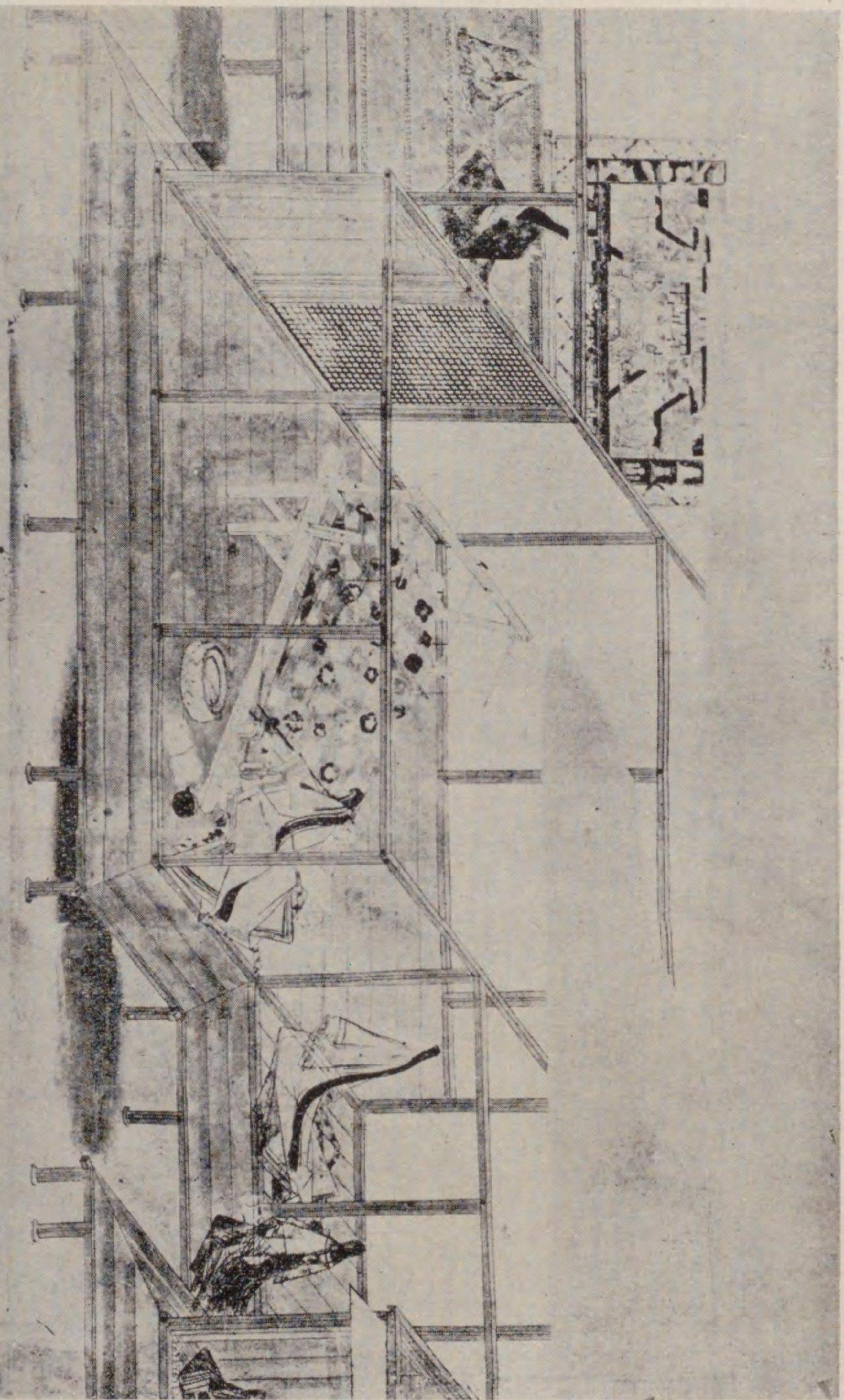
此の時道鏡はひそかに清麻呂に告げて、「我が爲にうまく取計らつてくれたら重く汝を用ひるから、しつかり考へて行つて来るがよい。」と利益を以て誘つたが、清麻呂は利益の爲に忠義の心をかへるやうな人ではなかつた。清麻呂は道で路豊永に云ふ友人に往逢うた。豊永は「道鏡が若し天位を侵したら、我等は何の面目があつてその臣となれよう。君と共に此の世を遁れてここかの山へ隠れる外はないではないか。」と告げた。清麻呂は此の一言に益々決心を固めて行つた。さて歸京してから「我が國は天地が開けてから此の方、君と臣との區別が明かに定つてあるのに、今道鏡は無道にして、帝位を窺つてゐる。天津日嗣は正しい皇

族の人を以て立てよとの神託を承はりました。「誰は々からず申し上げた。道鏡は此の語を聞いて大いに怒り、清麻呂の官を奪ひ、名を穢麻呂と改め、大隅の國(鹿兒)へ流した。更に人をやつて途中で殺させようとしたが、たま／＼雷雨があつたので、清麻呂は幸にその難を免れた。かく清麻呂の忠義によつて道鏡の非望は遂にくだかれ、天壤無窮の皇統に疵がつかなかつた。此の時清麻呂の姉廣蟲も朝廷の爲につくしたので、備後(廣島)に流された。廣蟲は孝謙天皇が御出家せられた時、共に出家して法均尼と言つた。孝謙天皇の御信任を得て宮中に仕へたが、慈善の心が深く、仲麻呂の亂後、子を捨てる者が多かつた時、廣蟲は八十餘人の孤兒を拾つて育てあげた。廣蟲は弟と仲よく暮して後々までも財産を別々に分けたりしなかつた。また廣蟲はつゝしみ深く決して人の悪口を言つたことがないので、まねの出来ないことであるが、光仁天皇がおほめになつた。

稱徳天皇が崩せられた後、式家の藤原百川等は光仁天皇を迎へ奉つた。天智天皇の御孫にあらせられる。即位の年道鏡を斥けて下野(栃木)の國に流され、清麻呂を召還されたので

清麻呂は此の後もますます忠功をはげみ、重い役に用ひられた。明治の御代に正一位を贈られ、京都にある別格官幣社護王神社に祀られた。廣蟲も同じく此の神社に祀られてゐる。また光仁天皇の御代に始めて天長節を祝日として天下萬民が祝賀し奉るこゝこになつた。

中將姫は南家藤原豊成の女である。三歳で母を失つた。九歳で禁中にもるり箏を奏し、まゐらせたが、誠に上手であつたから御褒美を賜はつたので、繼母照日の嫉を受けた。十五歳の時、再び召されて箏を弾じたが、始に倍して上手であつたから正三位に叙し、中將の名を賜はつた。繼母はますます憎んで、何度も姫を殺さうとした。終に中將姫をだまして山中に誘ひこみ人に命じて殺させようとしたが、その者も殺すに忍びず、共に雲雀山(和歌)に潜んでゐた。後に父豊成がその山に狩して、死んだと思ふ娘に絶えて久しき對面をするこゝこが出来たが、繼母は恥ぢて死んでしまつた。姫は「我が命を保てたのは、偏に佛の御助である。」と信じ、光仁天皇の御代に髪を落して當麻寺に入り、行ひすまして世を終へた云ふこゝこである。



10 中將姫

中將姫が迷の糸を五色に染めて極樂浄土の尊い有様な織物の上
に現はすやうに自ら織つてゐるところである。今日大和の當麻
寺に残つてゐる當麻曼荼羅はその時織つたものだとはいはれてゐ
る。圖は鎌倉時代の名畫當麻曼荼羅縁起の一部である。屋根天
井なか、ないのは當時の畫の一つの習慣である。

第十七 桓武天皇 佛教と漢文學

光仁天皇の次に皇子がお立ちになつた。桓武天皇(第五)も申し上げる。初め奈良の都にお在になつたが、奈良の地は交通が不便でもはや當時の國運の發展にそふ事が出来ないし、その上奈良の都が永く續くうちに、種々の弊害が起り、政治が振はなくなつたので、これを一新する爲に、交通の便利な山河の景色もよい土地を選んで、新都を建設しようとして、一旦山城國乙訓郡長岡(今の京都の地)の地を選んで都を經營させられたが、十年も費したけれど事情があつて出来上らなかつたので、更に和氣清麻呂の申し上げた議によつて今の京都の地に壯麗な都を營み、紀元一四五四年、延暦十三年に都をここに奠められ、その年の十月に新京に遷り給うた。四方から集つた民が皆喜んで異口同音に平安京と言つたので、新京の名に使はれた。此の後平安の地は永く帝都となり、明治天皇が東京へお遷りになるまで、大凡一千七十餘年間、代々の天皇は概ね此の都にゐらせられた。その中でも桓武天皇の御時から源

頼朝が鎌倉に幕府を開くまで凡そ四百年間は、政令が常に平安京から出たから、特にその間を平安時代または平安朝と呼んでゐる。

平安京の規模は平城京よりも大きく、東西約四十四町、南北約四十九町程あつた。朱雀大路を中央として東西に左右兩京を分かち、南北に九條を分かち、なほ大小の道路が碁盤の目のやうに通じてゐた。朱雀大路の南端に羅城門がある。大内裏(宮城)は朱雀大路の北端に南面して設けられ、一條より二條に跨つてゐた。四方に上東門・上西門等の十二の門があり、その中に皇居を始め諸官省が棟を列べてゐる。皇居即ち内裏はその中央からや、東北に位し、建禮・承明等の門を以て塀を二重に廻らし、中に紫宸・清涼等の十七殿、飛香・淑景等の五舎が相列つてゐる。紫宸殿は天皇の政を視そなはす所、清涼殿は常の御殿であり、五舎は皇后や妃の御居所であつた。

時鳥平安城を筋違に。

燕村

平安の地は一千年間も帝都であつたから、その間に盛衰のあつた事はもこより言ふまでも

ない。都を奠められてから、以後三百年ほどの間、平安京は最も榮えたが、その後邸宅社寺は多く賀茂川の東岸に營まれて左京は繁昌したのに反し、右京は大いに淋れた。源平以後しばらく、戦亂の巷となり、殊に室町時代應仁の亂には、兵火の爲に荒野のやうになつた。江戸時代になつてから漸次回復したが、なほ右京は田畑で、もこ中央であつた朱雀大路は最近まで京都市の西端になつてゐた。大内裏も變遷があり、また度々火災にかゝつた。圓融天皇(六十四)の貞元年間の火災の折には、天皇は藤原兼通の堀河の邸にお移りになつた。その後内裏の火災や事故には、大臣たちの邸宅に移られた。これを里内裏と言つた。しかも皇居の再建はもこのやうに壯大なこゝが出来ず、後には里内裏にいます事が多くなつた。殊に堀河天皇以後は大内の造營もたえて常に里内裏のみにおはす事になつた。今の舊御所は織田信長の時に始めて造營せられたものであるが、その建物は江戸時代の末に再建せられたものである。

ほのかなる鶯聞きつ羅生門。
耕すやむかし右京の土の艶。

來山
太祇

立ち出でて初蝶見たり朱雀門。
大内のかざり拜まん星祭。

大江丸
千子

日本海方面の蝦夷は阿倍比羅夫の爲にほゞ征服せられたが、太平洋方面の蝦夷は、まだ十分に皇化に浴してゐなかつた。奈良朝の初頃から、此の方面の蝦夷がしばしば騒亂をひき起し、朝廷はその度毎に征討の軍を發せられたが、兵士の輸送や兵糧の運搬などが中々困難であつて、未だ著しい功績をあけることが出来なかつた。聖武天皇の御代に藤原宇合を大將として討たせられた。此の時大野東人は多賀城(宮城)を築いて蝦夷に備へた。陸奥鎮守府の起である。その後も度々將軍を派遣して討たせられたが、なほ功を奏する事が少かつた。然るに延暦十六年坂上田村麻呂が征夷大將軍に拜せられて、大いに蝦夷を破り鎮所を北へ進めて膽澤城(縣)に築き、その地方の固こしたので、これより蝦夷の勢は殆んど無くなつてしまつた。田村麻呂は阿知使主の子孫である。身の長は五尺八寸、胸の厚さは一尺二寸、目は隼の眼の如く、髯は黄金の絲をかけたやうで、怒つて眼を見張るに猛獸も皆恐れ、

笑ふ時は幼い子も恐れずに抱かれたと言はれてゐる。田村麻呂はその後官位が段々進み、嵯峨天皇の御代に薨じた。その時その屍に甲冑を着せ弓矢を帶びたまゝ宮城へ向けて直立させ、山城國山科(京都)に葬つた。その後、將軍になつて出征する者は、必ず此の墓に詣でて戦勝を祈る例であつた。次いで嵯峨天皇(第五十)の御代に膽澤城を鎮守府とし、將軍をおき、更に文屋綿麻呂をして蝦夷の餘類を平けしめられてから、皇威に叛く者は殆んど無くなつた。陽成天皇(第五十)の御代に薩原保則が行つて將軍になつた。類稀な良い官吏であつて、その以前すでに備中・備前(共二國)の國司として治績をあけたが、奥羽に來るや單身賊長を説き從へ、勉めて仁政を施したから、夷族の訴訟ある者は皆判決を乞ひに來た云ふ。これより強暴な蝦夷の名は史上に殆ど見えぬやうになつたのである。

桓武天皇から平城・嵯峨・淳和・仁明の御四代を経て文德天皇(第五十)の御代までの六十餘年間、皇威がすこぶる盛んな時代であつた。文物制度も大いに面目を改めた。奈良時代の如き唐の文化そのまゝの移植でなく、少しづつ我が民族の特長を發揮し、和漢兩文明を融合同

化したものが出来るやうになつた。佛教も次第に日本化し、制度に於ても唐の制度の模倣によつて出来た大寶令が修正され、令以外の新制度も追々行はれ始めた。

桓武天皇の次に御子平城天皇(第五十)がお立ちになつたが、久しからずして御位を皇弟嵯峨天皇に譲り上皇とられた。然るに上皇の尙侍藤原薬子は藤原の式家の人である。榮華

にあこがれて兄仲成と計り、上皇を御位に復しまるらせて權勢を得ようとしたが、事が敗れて仲成は誅せられ、薬子は毒を仰いで死んだ。藤原氏の式家はこれから衰へたのである。此の變に先立ち嵯峨天皇は新たに宮中に藏人所を設けて藏人を置かれ、藤原冬嗣を藏人頭として秘密重要な文書を取扱はしめられた。また大寶令の警察制度は無力になつたので、此の頃より新しく檢非違使を置いて、京都の警察裁判を司らせられた。これから大寶令も漸次に變遷し始めた。此の藏人、檢非違使はすこぶる權力のある官であつたから、立身望む文官武官は、これに任せられるのを此の上もなく悦んだ。

佛教では、此の頃最澄が出て天台宗を起し、空海が出て真言宗を起した。最澄は近江の人

で、延暦七年に比叡山に登り根本中堂を建て、延暦寺の基をつくつた。その後勅を奉じて

延暦二十三年、唐に留學し、天台の奥義を極めて歸朝した。寂後傳敎大師と諡せられた。

空海は讚岐(香川)の人で最澄と同じ頃に唐に渡り、真言宗(密敎)を修めた。紀伊(和歌)の高野山に金剛峯寺を開いたが、嵯峨天皇に信任せられ、京都に東寺を賜はり、しばしば宮中に

出入した。空海は博學多藝の人で、書畫詩文に秀で、いろは歌もその作と傳へられてゐる。

唐にゐる時天子の仰せを受けて宮殿の壁に文字を書くのに、五本の筆を口と左右の手足に取り、飛びついて一度に五行に書いたと言はれてゐる。歸朝して宮城の應天門の額を書いた時、

上の點一つを忘れてゐるが、門に打つて後に見附けて、驚いて筆をぬらして投げあける、丁度點を打つべき所に筆が着いたと云ふ。空海のゑがいた畫には真言宗の昔の高僧をゑがいたのが東寺に残つてゐる。すこぶる雄偉なものである。諡を弘法大師と賜はつた。最澄も

空海も宗旨を廣める外に、諸國を廻つて最澄は信濃(長野)・美濃(岐阜)の山中に旅行者の爲に

宿を建てたり、空海は讚岐の萬農池の堤を築いたりして、種々人民の利益を興した。殊に空

海の感化が普かつたから、世に大師様言へば弘法大師をさすことになつた。奈良朝に端を發した神佛同體の説は、最澄・空海等が寺院の境内に神社を建てたり、神社の境内に寺を建て、るやうになつてから次第に勢力を得て、神の本地は佛で、佛が日本に跡を垂れて神にお現れになつたのである云ふ信仰を形成するやうになつた。これを本地垂迹説云ふ。最澄は弟子の養成に力をつくした。中にも有名な弟子は圓仁即ち慈覺大師であつた。その後、孫弟子の圓珍即ち智證大師が三井寺に遷るに及んで、圓仁派は比叡山を代表し、天台宗は二派に分れるやうになつた。

生業や弘法様の草の餅。

魔杖

平安朝の初に出られた代々の天皇は皆學問をお好みになつたから、奈良の都に榮えた漢文學はこゝに美しき實を結び、空海・小野篁・菅原是善・都良香などの名家を出した。嵯峨天皇が或時、山城國山崎(京都)の河陽館に行幸して、篁に「閑閣唯聞朝暮鼓、登樓遙望往來船。」云ふ一聯の句を示して、詩の良し惡しを申して見よと勅せられた

時、篁は「聖作は誠に立派に遊ばしましたが、唯遙の字を空にお改めなさいましたら、更に宜しうございませう。」と申しながら、天皇はいたく御驚き遊ばし、「汝は前から此の兩句を知つてゐたのか。」と宣ふので、篁は謹んで「聖作の一聯を臣がさうして、豫め存じて居りませう。」と答へ奉つた。天皇は重ねて宣ふやう、「此の二句は白樂天の句で、原作は空望とあつたのを、汝の才を試みるが爲に假に遙望とかへて示したのだ。實に汝は白樂天の詩情が相同じい者だ。」と言つて大いに賞讃あらせられた。白樂天は桓武天皇の頃の唐の大詩人であつた。その詩文を集めた白氏文集は平安朝の我が文人の愛讀したものであつたが、まだ此の頃は宮中にのみ傳はり民間には傳はつてゐなかつたのである。また都良香には次の有名な句がある。

氣霽風梳新柳髮、冰消波洗舊苔鬚。

傳説によるこ、或年の春に羅城門を通つた時、春風が暖かに吹いて家々の垣根の柳の糸を亂してゐるのを見て、上の句を詠じたが、下の句を考へかねてゐた時、門の上から鬼がしは

がれた聲で下の句を附けた云ふ。

嵯峨天皇は詩文では筆才を競はれ、書道では空海及び橘逸勢と並んで、三筆と稱せられ給うた。此の頃に日本書紀に續いて、續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄などの國史が相次いで官撰せられ、文武天皇の御代から光孝天皇(第五十)の御代までの記事が詳細に傳へられたのである。これらを總稱して六國史と言つてゐる。また此の頃格式が撰ばれた。格式は大寶令以後の法令を言ふのであるが、その中で重要な法令を格式と言ひ、式は細則の類を言ふのである。嵯峨天皇の御代に弘仁格式、清和天皇の御代は貞觀格式、醍醐天皇の御代に延喜格式と三回撰定せられた。つまり大寶律令を時世の進運に適合させんが爲に補はれたものである。

かく學問の進歩が著しかつたから、官立の大學の外に貴族は各々學院を設けて一族子弟の教育に便を與へた。和氣氏の弘文院、藤原氏の勸學院、在原氏の獎學院、橘氏の學館院などが有名である。その外に純粹な私立學校として空海が東寺の東に建てたものがあつた。

綜藝種智院と言ひ、僧侶も俗人も等しく入學させた。以上の中では勸學院が最も盛んで、その盛時は大學を凌ぐ程であつた。「勸學院の雀蒙求を轉る。」と云ふ諺さへ生じた。蒙求は支那の善言や善行の逸話を集めた初學用の本である。

第十八 藤原氏と攝政關白 菅原道眞

かゝる間に藤原氏は、南家は仲麻呂の亂に衰へ、式家は仲成の時に衰へ、京家は初から著はれなかつたから、ひこり北家のみ残つたが、その家より出た冬嗣は嵯峨天皇に仕へて功を立てたから、天皇は皇女を冬嗣の子良房に降嫁せしめてその功を賞せられた。冬嗣は南都(即奈)興福寺に南圓堂を建て、一門の繁榮を祈つたが、此の頃より此の一門に人才が多く出で皆高官に上つたから、漸次に他の諸氏を壓倒するやうになつた。

初め嵯峨天皇は位を皇弟淳和天皇(第五十)にお譲りになつたから、淳和天皇は位を嵯峨天皇の御子仁明天皇(第五十)にお譲りになり、仁明天皇もまた淳和天皇の御子恆貞親王を皇太

子ごせられた。然るに淳和上皇と嵯峨上皇とが相ついで崩じ給うた後、承和九年（一五〇二年）伴健岑・橘逸勢等が東宮を奉じて亂を東國に起さうとしてゐるに讒言する者があつた。これによつて太子は廢せられ給ひ、健岑は隱岐（島根）に、逸勢は伊豆（静岡）に流された。世に承和の變と呼ばれてゐる。逸勢は遠江に到つて死んだ。その女妙仲尼は孝行の心が深く、泣く／＼父の後について行つた。父を警護してゐる使者が叱るので、晝は宿り夜は歩んで從うて行つたが父が死するに及んで、墓の側に庵を結び、尼に姿をかへて父の菩提を弔つた。云ふ。此の亂は實は藤原氏の計略で皇太子恆貞親王を退け奉り、橘氏等の他氏を朝廷から排斥せんとして企てた事であつた。さればこそ、先に冬嗣の女順子が仁明天皇の女御となつて、生みまゐらせた道康親王が代つて東宮に立ち給うたのである。

道康親王は即位せられて文徳天皇（第五十）に申し上げる。冬嗣の子良房は實に天皇の御叔父にあたる。良房はその女明子を女御に進め奉つた。世に染殿の后と申す。或時染殿の后が御前の花瓶に櫻の花をさゝせ給ふのを良房が見て詠んだ歌に、

年ふれば齡は老いぬ然はあれど花を見れば物思ひもなし。

自分は老衰したけれども、后を見まゐらせて藤原氏の榮が益々めでたいのを悦ぶ云ふ意味を述べたものである。かくて良房は晩年には一躍して太政大臣に上つた。古來太政大臣は皇族を以て任じ、適當の人がなければ缺員のまゝにしてあつたのである。特別の場合を除いては、人臣にして生前に此の官に任ぜられた者は從來は無かつたものである。良房が一たび太政大臣になつてから、藤原氏の人々は常に此の官に任ぜられる例となつた。

天皇には皇長子惟喬親王がおはしましたが、その御母が紀氏であらせられたから、藤原氏の盛んな勢で、染殿の後の生みまゐらせた惟仁親王が僅かに九箇月の御幼年で東宮なられ、九歳にして即位せられた。第五十六代清和天皇と申す。そこで良房は人臣を以て始めて攝政となり、藤原氏の威權を益々固くした。惟喬親王は後御髪をおろして僧になられ、山城の小野に隠れ住んで御心を詩歌に委ねられた。在原業平は早くから親王に仕へまつり、しばしば小野に詣でてお慰め申した。年々の花盛りに親王は攝津の水無瀬宮（大阪）にお出でにな

り、業平等を伴なつて櫻狩をせられたが、或時その附近にある河内の交野の渚の院の櫻を御覽になつた。皆々歌を詠んで興じあつたが、業平は

世のなかに絶えて櫻のなかりせば春の心はのさけからまし。

(世の中に櫻があるから人の心は浮かれる、櫻がもし無かつたら人の心は静かであらう)

詠んだ。日暮になつて、天河云ふ所に行かれた。親王が「交野を狩りて天の河の邊に到る。」云ふ題で詠め仰せられるこ、謹んで業平が詠み奉つた歌に、

狩り暮らし柵機津女に宿借らん天の河原にわれは來にけり。

(河内の天の川を天上の天の川と見立てた歌である)

歸つて宮に入らせられた。夜が更けるまで、酒を飲み物語をなされたが、親王は早や酔うて側にお退きかけなされた時、丁度十一日の月も隠れかけたから、お止め申すこて業平が、飽かなくにまだきも月の隠るゝか山の端逃けて入れずもあらなん。

(親王を月にたとへ奉つた歌、親王をこめる爲に、月ならば山を無くして月の入る所を無くし

ようこの意)

ミ歌ひ奉つた事があつた。これ程に馴れ仕へ奉つた親王が心の外に世を遠かられて、小野の奥に墨染の衣に身をおやつし遊ばされたお姿を拜しては、

忘れては夢かこそ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んこは。

ミ嘆息する外はなかつた。

清和天皇は御成長の後御兄を越えて即位せられたのを耻ぢ給ひ、早く御位を御子にお譲りになつた。第五十七代陽成天皇に申す。御母は良房の養子たる基經の妹高子で、二條の後

ミ申し上げたお方であつた。天皇も御年僅かに九歳であらせられたから、基經が攝政に任せ

られた。その後天皇が御疾にかゝらせられたので、基經は天皇を廢して陽成院に遷しまるら

せ、仁明天皇の女御藤原澤子(冬嗣の再従弟總嗣の女)の生み奉つた光孝天皇(第五十)をお迎へ奉つた。

されば天皇は深く基經に御信賴遊ばし、次代宇多天皇(第五十)もまた萬の政を皆基經に

關り白させられた。關白の名はこゝに始まつたのである。此の後藤原氏は天皇が御幼少の

時は攝政となり、長じ給へば關白なるのを常とし、皇族も名家も藤原氏に親しまなければ、朝廷に立つことができぬやうになつた。

基經の時に藤原氏の權勢があまりに盛んであつたから、宇多天皇はこれを抑へようと思し召し、基經の薨じた後は關白をおかれず、政をみづから御覽になり、菅原道眞を擧げ用ひて藤原氏に對抗させようとなされた。しかし久しからずして御位を御子醍醐天皇に譲り、御髪をおろして仁和寺にお入りになつた。これを法皇の始とする。

菅原道眞は野見宿禰の子孫で、是善の子である。菅原氏は世々學者の家であつたが、殊に道眞は學徳が一世に秀でてゐた。十一歳の春父が道眞に向つて「今宵は春であるのに、からつこ月も晴れて、梅もおもしろく咲いてゐるから、詩でも作つてはごうか。」と言つたので、即座に作つた詩は、

月輝如三晴雪

梅花似三照星

可憐金鏡轉

庭上玉房馨

(月の光は雪の如く、梅の花は星に似てゐる、あゝ月は大空を運つて庭上に花の香が芳しい)

こ云ふのであつた。十五歳で元服した夜、その母が次の歌を詠んだ。

久方の月のかつらも折るばかり家の風をも吹かせてしがな。

月の桂を折るこは、學者が試験に及第して官吏となることである。それに及第することが出来るほご、學問に精を出し、菅原の家風をいよゝ世に廣くしたまへ、教訓したのである。だん／＼官位も進み、基經の長子時平と並んで出世した。

醍醐天皇が即位せられた時は、なほ御幼少であらせられたから、前例によれば藤原氏の中から攝政を任せられるのであるが、御父帝の思し召によつて、誰にも任命せられず、時平を左大臣とし、道眞を右大臣として、相並んで政に與らしめられた。道眞は學徳共にすぐれ、年も長じ、御信任もあつたので、その榮達は類例がなく、多くの他の先輩を凌ぎ、時平を除いては藤原氏並びに皇族の人々も皆その下位に立つやうになつた。そこで道眞は誠に憚りある事に思ひ、再三表を上つて、右大臣を辭しまるせたが聽されなかつた。しかし世の妬はやまなかつた。時平も不平であつたから、二三の人々を語らひ、「道眞の女が妃になつ

てるる皇弟齊世親王を御位につけまつり、自ら權を専らにしようこしてゐます。三詞を巧みに讒奏した。天皇は聰明におはしましたが、御齡は僅かに十七歳であらせられた上に、讒奏がしばしば行はれたから、遂に信じ給ひ、俄に道眞の官職を停め、太宰權帥に下し、筑前(福岡)に流し給うた。太宰權帥と言へば太宰府の長官の意味であるが、流人の時は名だけのことで、實は罪人であるから、少しも太宰府で政治に携はらないのである。時に延喜元年(一五六一年)正月であつた。男女の子供が二十三人、皆散々に流されることになつた。道眞は悲しさに堪へず、西下に臨み日頃愛してゐた梅の木を見ては、

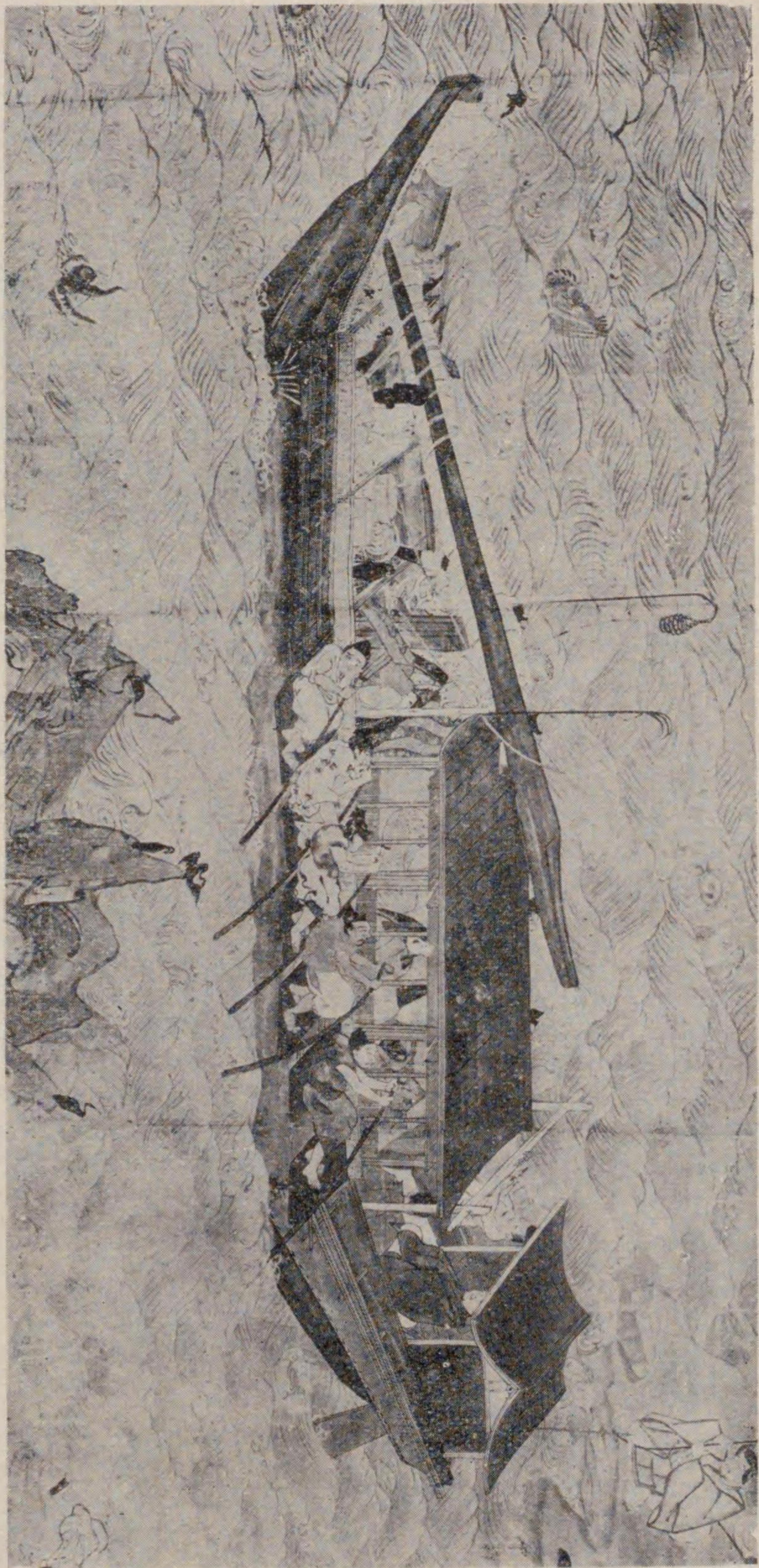
東風吹かばにほひおこせよ梅の花
主なしきて春を忘るな。

三詠じ、また御信任のあつい宇多法皇に、

流れゆくわれは水屑となりぬ
も君しがらみとなりて留めよ。

この歌を奉つて御救助を仰いだ。法皇は御覽になつて、大いに驚かせ給ひ、天皇を諫めまゐらせたかと思し召して直に参内あらせられ、藤原菅根にかくも申せし仰せられたが、菅根は

遷 左 の 眞 道 一



の形屋のものと船。あで節一の巻繪起線神天野北るへ傳と筆の(人の初代時會鎌)實信原藤で品藏社神野北市都京
ののたし示をとこな難困の海航は魚怪。あわが役の立迫はに逸濱。あで眞道がのる居に中

時平の一味の者であつたから、その旨を奏上しなかつたので、法皇は天皇にお會ひなさるこ
こが出来ず、世の中をあぢきなく思ひ召して空しく遠御遊ばした。道眞は二月朔日に都を出
て筑紫へ下つた。次第に道が遠くなるにつれ、心細さの餘り都に残つてゐる妻へ贈つた歌に
は、

君が住むやぎの梢を行くも隠るゝまでにかへり見しはや。

こあつた。播磨の明石(兵庫)の驛に泊つて、宿の主人が痛はしく思ひまゐらせる様子を見
て與へた詩は、

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋。

こ云ふのであつた。道眞は太宰府にあつて、少しも怨むことなく怒ることなく、常に行を
謹んで、門外へは一步も出でず、一室にのみ日を送つてゐた。太宰府には多くても語り
ふ友はなく、唯都府樓(太宰府にある)の瓦を見て暮してゐるばかりである。鬱々たる物思を破
るのは時に聞える観音寺の鐘の音のみであつた。ものあはれな或夕方に、遠方に所々に立つ

烟を見て、

夕されば野にも山にも立つ烟なけきよりこそ燃えまさりけれ。

(夕方になるさ野山に火を焼く、それは木を火に投げるので一層盛んに燃える、我が胸の愁も火

のやうに歎により一層愁が増す)

こ詠じて我が憂き心を現し、また月のあかるき夜に、

海ならずたへる水の底までに清き心は月ぞ照さん。

こ我が赤き心を歌つた。遂に九月十日になつた。まだ京に居つた時、去年の今宵内裏の宴に侍り、自ら作つた詩を帝が非常におほめになつて賜はつた御衣のあるのを筑紫まで携へ下つたが、今見るにつけても、そらにその折をしのばれて、一入天恩の涯なきを喜び詩を作つて、その心を述べた。

去年今夜侍三清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在レ此

捧持毎日拜ニ餘香

三年を経て薨じた。年五十九歳であつた。その後京都にしばらく火災があり落雷があり、時平が薨じ、その女の女御も御腹の東宮も薨じ給ひ、時平の一男、二男も次ぎ々に薨じたから、時の人はこれを菅公の御祟と言ひさわいだ。天皇もいたく後悔あらせられ、道眞を本官に復し正二位を贈られたが、一條天皇(第六十)の御代には更に正一位に進められ、ついで太政大臣を贈られた。太宰府では早くから祠を建て、靈を祀つたが、その後京都にも北野神社に祀られた。上下の崇敬が甚だあつく、天満天神様ごあがめられ、文道の神として、遂に全國到る所にその祠を見るやうになつたのである。

醍醐天皇は學問をお好みになり、大いに政道を正され、殊に仁慈にましめて民を憐み給ふ事が深くあらせられた。或冬の夜、雪が降り風がはけしかつた時、さこそ下民は苦しからうと、畏くも御衣を脱がせ給うた事があつた。

脱ぎ給ふ御衣は天下の衾かな。

嵐雪

久しく太平が續いて、次第に奢侈の風に流れた。度々禁止の令を發せられたが治まらな

い。そこで、時平と相談せられ、時平が或日わざと殊更に美々しく装うて参内した時、天皇は御覽じて、御氣色あしくならせ給ひ、藏人をめして「左大臣は言ひながら、美麗殊の外に装ひにて参内したのは不届である。早く退出よと申せ。」と仰せられたから、藏人は「さうなる事か。」と震へ、申し傳へるに、時平は非常に驚きかしく、急ぎ退出して一月ばかり閉居し、人が來ても天皇の御勘當が重いからと言つて中々會はなかつた。左大臣さへこんなであるに人々は皆儉約を守り、さてこそ世の中の華奢の風は止んだと云ふ。時平は學問に深く、政治の才にも富んでゐたが、早く薨じて大なる功を立てなかつた。誠に都は花の如く榮え、文學藝術は大いに勃興したから、後世此の御代を稱して、延喜の聖代と言ひはやしてゐるのである。

第十九 地方の情况 承平天慶の亂 朝鮮半島と渤海

延喜の頃は皇威が盛んに、都は太平無事であり、在朝の高官は榮華にふけてゐたが、その

裏面に立入つて見るに、朝臣はおほむね公務を怠り、私利をのみ計り、争つて地方に莊園を名づける私有地を領有した。しかし自分は都に居つて、これ等の領有地を支配させる爲に、部下を地方に派出したのである。これを莊司と云ひ、そのゐる所を庄屋と言つた。その上大寶令に規定された地方制度は早くから亂れて、班田收授の法は行はれないやうになり、國司は任期が満ちても京に歸らず、相變らずその土地に住んで權力に任せて、自分の領地を開拓する者が多かつたので、莊園はますます増加した。莊園は國司の支配を受けず、かつ普通は租税を納めないから、その増加するにつれて、大寶令の租庸調の法も行はれがなくなり、國庫の収入は減少し、朝威は随つて衰へて來た。

此の頃の國司は公平な仁政を施す者が極めて稀で、多くは私利を計つて、人民を苦しめたから、その苦しみに堪へかねて逃れて浮浪の民となる者が多く、秩序は大いに亂れて盜賊が横行するやうになつた。京都附近でも鬼童丸、袴垂の如き大賊があり、丹波の大江山には山賊の酒頭童子が居を占めて掠奪をほし、源頼光が酒頭童子を退治した話は

すこぶる名高い。また頼光が或時、弟の頼信の宅へ行くに一人の賊をつないであつた。「あれは何だ。」と問ふに、「鬼童丸であります。」と云ふ。「あいつは強力なやつだから、もつこ丈夫なので縛らなくちや駄目だ。」と云ふので、鐵の鎖でつないだ。鬼童丸はこれを聞いて、頼光を怨み、その夜鎖を切つて出て、頼光の寢室の長押の上にあがつて機を見て刺さうとしたが、頼光はよく知つて從士に衛らせたから、手を下せない。頼光が明日鞍馬(京都の)へ往く相談をしたのを聞いて、「よし、路で待つてやらう。」と、先じて鞍馬の市原に行き、野牛を殺し、皮を剥ぎ、それを被つて隠れてゐた。頼光は渡邊綱・坂田金時・碓井貞光・卜部季武の四天王等を伴つて市原野まで来たが、牛が群遊してゐるのを見て從士に射させた。綱は一頭だけ動かない牛を見つけ、怪しんで、これを的にして射た所が、卒然としてその牛が起き上り、鬼童丸が飛び出し、刃を揮つて頼光に迫つて来た。しかしその場で鬼童丸は斬られてしまつた。

その頃、また羅城門に鬼が住んで人を苦しめるに云ふはさがあつた。綱は見届けて来る

と言つて、或雨の夜甲冑をつけ、太刀をはき、馬に跨つて、從者もつれず、たゞ一人羅城門まで来た。暫く様子を見たが、別に變つたこともないので、石壇の上に、確に來たしるしの札を置いて、いざ歸らうとするに、後から兜をつかんで引止めるものがある。すはや鬼よ、胃の紐を引ちぎつて壇より飛びおり、太刀ひき抜いて切つてかゝつた。鬼は月日のやうに眼を見ひらいて綱をにらみつけ、鐵棒をふりかざして打つて来るのを飛びちがへ様に、丁鬼の腕を切り落したので、鬼は驚いて空に飛び上つて逃げた。綱は腕を持つて歸り、鬼のたゞりを見て下さいと頼むので、綱は辭わりかねて見せるに、乳母は「これは私の腕だ。」と言つて、鬼の姿をあらはし、それを持つたまゝ飛び上り、天井を打破つて逃げた云ふ。

春雨や綱が袂に小提灯。

蕪村

かく都にも大盜賊が起るやうになつたが、大寶令の兵制は既にすたれてゐたから、國家の武力は極めて微弱で警察力などは殆どなく、到底これを防ぐことが出来なかつた。殊に地方

は甚だしかつたから、地方の領主は多くの勇猛な従者を養つて武技を練らせ、以て自衛の策をこつた。これが武士の起原である。武士の勢力が漸く盛んになり、防衛に大いに効果のある事が知れて来るにつれて、朝臣はこれを援いて己が部下に使ひ、朝廷もこれに依頼して、諸所の騒亂を鎮めさせられた。これが爲、後に政權が武士に歸する事となつたのである。これらの武士の中でも後世に最も勢力を得たのは、赤旗の桓武平氏と白旗の清和源氏である。桓武平氏は桓武天皇の御孫高見王の御子高望王からおこる。王は平姓を下賜せられて平高望と名のり、清和天皇の御孫經基王は源の姓を賜はつて源經基と名のり、いづれも子孫が繁榮した。さうして兩氏がその名をあげた始は實に承平天慶の變であつた。

平高望は上總介に任ぜられて東國に赴任してから、その一族は多く此の地方に土着して次第に勢力をひろけた。第六十一代朱雀天皇の御代に、その孫に將門と云ふ者があつた。將門は勇武な質で、大望をいだいて都に上り、攝政藤原忠平に仕へて檢非違使を望んだが、許されなかつたので大いに怒り、袂を拂つて東國へ歸り朝命を奉じない。承平五年(一五九五年)

伯父の常陸大掾平國香を攻殺し、次第に増長して遂に天慶二年(一五九九年)に恐れ多くも妄りに新皇と稱し、下總の猿島(茨城)に偽宮を營んで、叛旗を翻した。弟の將平は兄の悪行を心配して、諫めたけれども聽入れなかつた。同じ頃にまた藤原純友と云ふ者があつた。さきに伊豫(愛媛)掾に任ぜられてその國に下つたが、任期が満ちても歸らず、數多の海賊を率ゐて瀬戸内海の沿岸をあらし、また部下を京都へやつて火を放たせたりして、都をさわがせた。かく東西一時に叛亂がおこつたので、久しく太平無事に馴れてゐた朝臣は、今にも賊が都近く押寄せて来るかの如くあわてたのである。

參内をしろと國香をせめるなり。

(川柳)

天慶三年藤原忠文が征東大將軍として將門征討の命を受けたが、未だ到らぬさきに、國香の子平貞盛が下野(栃木)押領使藤原秀郷と力を合せ、大いに戦つて遂に將門を誅した。東國の亂は収まり、翌四年には源經基が小野好古と力を合せ純友を誅した。かくて東西の叛亂が共に鎮定して京都も始めて安らかになつた。世にこれを承平天慶の亂と云ふ。

これから武士の勢力は一層進み、貞盛・秀郷・經基等の名がいづれも世にあらはれた。秀郷は今日下野國、別格官幣社唐澤山神社に祀られてゐる。一に田原藤太も呼ばれ、龍宮へ行つた傳へられてゐる。或時唯一人近江の瀬多橋を渡るに、長二十丈許りの大蛇が橋の上に横たはつてゐた。兩眼は光り輝いて二面の鏡の如く、紅の舌は炎を吐くやうであつたが、秀郷はちつとも恐れず静かに大蛇の上を越えて行くに、大蛇も動かない。それから遙かに行き過ぎるに、忽然として怪しげな小男が來た。それは今の太藤原であつた。叮嚀に禮をして、「私

は此の橋の下に既に二千年も住んでゐますが、あなたほゞ勇ましい人はまだ見ません。私

は此の年來戦ひ續けてゐる敵がございまして、やゝもするに負けさうになります。さうか

は此の爲に敵を討つて下さい。」云ふ。秀郷はすぐ承知して、此の男を前に立て、湖水の波を分けて行くに、一つの樓門がある。開いて内に入れば、金銀珠玉で飾つた立派な御殿がある。その中には、春風がおもむろに吹いて落花がひらひらと舞つてゐる。此の怪しい男は内に入つたが、やがて衣冠を正しく着て秀郷を請待した。饗宴に善を盡し美を盡して歓迎し

た。すでに夜もふけるに、雨風が一通りすぎて電光がしきりにきらめいたと思ふに、比良の高根の方から焼松二三千程が二行に燃えて龍宮城をさして近附いた。よくよく見れば、蜈蚣の化けたもので、二行にこもした焼松は皆左右の足にこもしたのであつた。矢比近くになつた時、身を離さず携へてゐた五人張の弓に十五束三伏の矢をつがへ、満月の如く引しほつて眉間の眞ん中を射た。しかしその手答はたゞ鐵を射るやうで跳ね返つてしまつた。更に二の矢で同じ矢壺を射たが、同じく躍り返つて蜈蚣の身には立たぬ。敵はだんく近づいて來る。さうしようかと思案したが、きつと思ひ出す事があり、三の矢にはその先に、唾をよく吐きかけてまた同じ矢壺を射た。蜈蚣のきらふ唾を塗つた爲であらう。此の矢は眉間のたゞ中を通つたから、二三千の焼松は忽ち消えて、天地晦冥、雨風がはげしく吹き荒れたが、やがて、それも收まつたので、有りし所に立寄つてみるに果して大蜈蚣であつた云ふ。

秋寒し藤太が錆ひやく時。

燕村

我が國、地方の狀況は右のやうであつたが、當時、朝鮮半島はどんな有様であつたか。

新羅はさきに天武天皇の御代に朝鮮半島に於ける唐の威力の衰へたのに乗じて、唐にそむき、百濟・高麗の舊領を略し、半島をほぼ統一した。唐はこれを怒つて責めたけれども効果がなかつたから、新羅は確實に半島を統一したが、なほ唐に服従して唐の怒をさけてゐた。その後、英明の君主が代々相ついで立ち、盛んに唐の文物を輸入して、國運は非常に發展した。また代々佛教をあつく信じたから寺院の建立や佛像の製作が多かつたので、藝術もすこぶる進歩し、その國都の慶州(北道)の佛國寺やその他に今も残つてゐる傑作が少くない。百濟を滅した後も、初の間は度々使を遣はして我が國に貢を奉つたが、聖武天皇の頃から漸く態度を改め、その勢の盛んなのを恃みこして、禮儀を失ふ事が多かつたから、淳仁天皇(第四十)の御代に、これを征伐しようとお企てになつた事さへあるが、その頃は内治にいそがしくて、實現は出来なかつた。その後、新羅は政治が亂れ、内亂が続いて起り、國勢は次第に衰へて來た。かくて我が國に對しいよいよ禮を缺き、終に朝貢も全く絶えるやうになつた。かつその邊海の民が度々九州の北岸を騷がして、人民を苦しめたり、物を奪つたりした

ので、我が國はその防備に苦しんだ。

新羅が半島を統一した後、滿洲の東部に渤海が起つた。渤海は昔の肅慎の後である。もこの高麗に屬してゐたが、その民を併せて、一時は東は日本海より西は蒙古に至る東アジヤの大國となり、唐と交通して大いに文物・制度も整つた。高麗のあこを承けついでるので、聖武天皇の御代からしばらく我が國に貢を奉つたので、朝廷でも厚くもてなされ、使を遣はして返禮をさせられたこともあつた。桓武天皇の御代に入貢の期を定められ、その滅亡の時まで、百餘年の間朝貢を絶たなかつた。

朝鮮半島では新羅がその後、いよいよ衰へて來たが、宇多天皇の御代に半島は大いに亂れ英雄が並び起つた、中にも半島北部に起つた王建が最も勢力を得、醍醐天皇の御代に王位に登り、新たに國を建て、高麗と號し、都を開城(京畿)に定め、遂に朱雀天皇の御代に新羅を滅して半島を統一した。これを高麗の太祖と言ふ。昔の高麗の地に起つて、同じ名を使つて高麗と稱したのであるが、此の二つの國は全く別々の國である。高麗は太祖以後度々使を遣は

して、我が國に入貢を願つて來たけれども、朝廷では許されなかつたから、國々國々の公の交通は開けなかつた。しかし民間の貿易はその後永く絶えなかつた。また佛教を太祖以來あつく信じ寺院を多く建て、佛教の經文を殘らず集めた大藏經の大出版をさへ行つた。儒學も次第に盛んになり、支那に劣らない程の學者も出るやうになつた。

その頃滿洲に新たに契丹が起つた。後に遼と稱し、しきりに四方を攻めて渤海を滅ぼし、高麗をも朝貢させた。唐も次第に衰へて文化が振はなくなつたから、せつかく海上の危難を冒して唐へ渡つても無益であつたので、宇多天皇の御代寛平六年(一五五四年)に菅原道真が遣唐使を命ぜられたけれども、道真が奏請して遣唐使の派遣を停止せられんことを願つた。これより長く室町時代まで支那との交通は行はれなかつた。唐はいよいよ衰へて遂に醍醐天皇の御代に亡びた。その後、支那は約五十年間國內の統一がなかつたが、その間に五代の興亡を経て、宋が天下を一統した。我が國は宋と國交を開かなかつたが、僧侶や商人の往來は絶えなかつたから、宋の文化の輸入されることが少くなかつた。

第二十 朝臣の榮華 藤原氏家門の爭

將門純友の亂は安逸に慣れてゐた朝臣を一時は大いに驚かしたが、それも鎮定した後は、朝臣が心を政治にこめぬことは、依然として元の通りで、益々遊樂に馴れ榮華を極め、花の朝に月の夕に、或は輕車を馳せ、或は遊船を浮べ、詩歌・管絃・歌舞・音曲に耽り、繪合・歌合・蹴鞠を樂しみ、宏壯なる邸宅を構へ、華麗なる衣服調度をしつらへて、ひたすら風流優雅な生活を事としてゐた。嵯峨天皇の皇子源融の如きは、京都の東六條に河原院といふ別莊を作り、その中に非常に美しい庭をこしらへ、毎月難波の浦から海水二十石を汲取らせ、毎日これを焼いて、藻鹽焼く陸前(縣)の塩釜の景色を寫したる傳へられてゐる。

醍醐天皇は藤原基經の女穉子の御腹である朱雀天皇(第六十)に御位をお譲りになつた。時に御年八歳であらせられたから、政治は全く時の關白忠平の手にあつた。これから藤原氏の勢は頓に盛んになり、皇位が俄に衰へたやうであつて、かの大鏡の著者も「この御門生

れおはしまさずば、藤氏の榮いミ斯うしもおはしまさざらまし。」と記してゐる。ついで御弟の村上天皇(第六十)がお立ちになつた。天皇は文筆諸藝を好み給ひ、勵精治をはけませられ、忠平の薨後は關白をもおかれず、その子實賴・師輔は唯左右の大臣としてお輔け申した。此の御代の年號を天曆と言つたから、世に天曆の治と言つて、延喜の治と並べて聖代と稱し奉つた。天皇はかつて賤しい官吏の年老いたのを召され、密かに政治の得失をお問ひになつた。再三の勅問に老吏もいなみ奉りかねて「賤愚の下吏が何事を存じませう。唯古の御代に比べて主殿寮から奉る松明が多くなり、率分堂の前に草の生えたのが變つて居ります。」「と申し上げた。松明を多く使ふに云ふのは、成績もあがらないのに、徒に政務が繁忙で夜に入るころが多いに云ふこと、率分堂は諸國の歳貢を納める所であるが少しも貢が上らず、草が生えるほご庫の内は空であるに云ふ事、即ち收入が少く支出が多くなつたに云ふ意で申し上げたのである。天皇は大いに耻ぢ給ひ益々御心を政に盡されたと言ひ傳へてゐる。此の御代の末に、始めて延暦の時に造營された内裏が焼けて多くの文書寶器が焼失せてしまつた。

師輔の女安子は入内して皇后になられ、冷泉天皇(第六十)・圓融天皇(第六十)・爲平親王の御母になられた。冷泉天皇の御代に忠平の長子實賴が關白になつた。始め村上天皇は冷泉天皇の御代には爲平親王に御位を嗣がせられる思召しであらせられたが、親王の妃は村上天皇の皇弟源高明の女であらせられたから、藤原氏はすこぶる不快に思ひ、實賴は遺勅に従ひ奉らなかつたから、圓融天皇が嗣がれることになつたのである。遂に安和二年(一六二九年)藤原氏に快くない者が爲平親王を奉じ藤原氏を抑へよう謀つた。此の爲に高明も罪に坐して太宰權帥に左遷せられた。これを安和の變に云ふ。此の變も藤原氏が朝廷に於て勢力を獨占せんとする希望から、勢力ある源高明を排斥せんとする策略であつて、本當は無實の罪であつたらしいのである。

これから後、百餘年の間藤原氏は常に外戚の權を揮つて、攝政關白等の高官を悉くその一門から出したが、遂に權勢を争ふべき他氏がなくなるに、轉じて同族の間に烈しい政權争

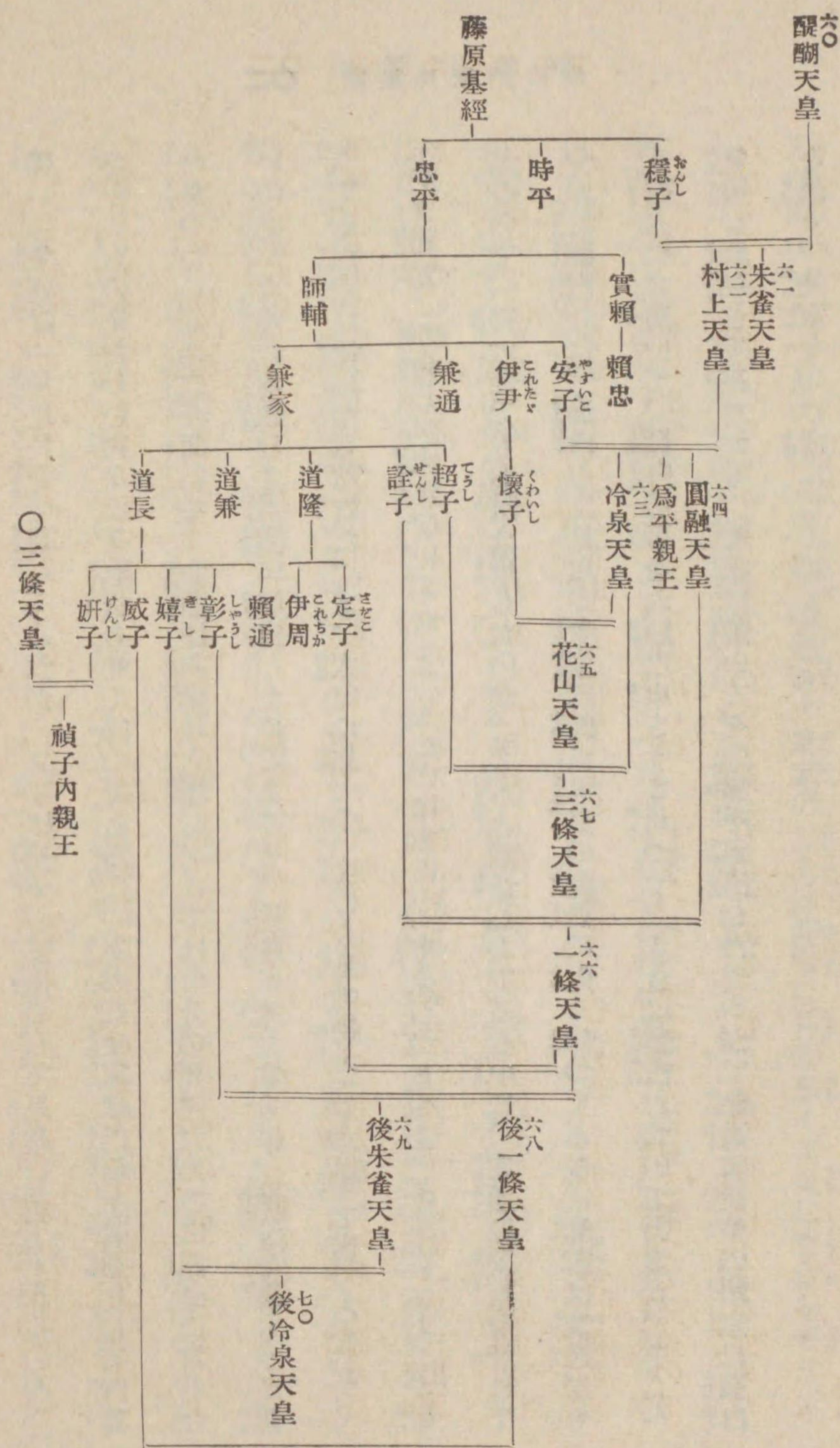
奪を起すやうになつた。圓融天皇の御踐祚の時實賴が攝政になつたが、やがて薨じて甥の伊尹が攝政になつた。伊尹の弟の兼通も兼家の二人は非常に仲が悪くて互に官位を争うてゐるが、末弟の兼家の地位が常に兼通に越えて攝政の任も兼家へ先に行きさうであつたから、兼通は心に悦ばず、参内するここも稀であつた。天皇の御母は兼通の妹に當らせられたので、計略家の兼通は豫て御在世中に「攝政は兄弟の順にせさせ給へ。」「云ふ手書を貰つて、お守りのやうに常に身を離さず持つてゐた。關白伊尹が薨じて新たに關白が任命されることになつた時、兼通は早速参内して此の文を奉つた。天皇は取つて御覽になるに、故母君の御手で「關白は兄弟の順にせさせ給へ、ゆめ、違へさせ給ふな。」「この御遺言であつたので、暫しは物も仰せられず、御母君を慕うて御涙に暮れておいでになつたが、御孝心深くましましたから、此の御遺言に従つて兼通に關白の職を授けられた。兼家はこれを見て悦ばないから、二人の間は益々悪くなり、大に猿のやうに始終争つてゐた。その内に兼通が病にかゝり、次第に重くなつて最期に近づいた時、門前へ兼家が行列をそろへてやつて来た。これを

聞いて兼通は「年比仲悪く暮してゐるが、さては兄弟の愛情を以て見舞に來てくれるのか。」「そこらの見苦しい物なごを取去らせて待つてゐるに、案外に兼家は門前を素通りして内裏へ参つた云ふのを聞いて、兼通は非常に立腹し、「さては自分の死んだあごに關白になりたいで、天皇にお願ひする爲に参内したのであるぞ。見舞に來たならば、關白を譲らうと思つてゐるのに怪しからん奴だ。」「大に怒つて、今にも息の絶えさうな様で寝てゐながら、「かき起せ。」「命じ、人々のいふかるのもかまはずに、「車をしつらへよ。供を整へよ。」「命じるので、「物の怪でもお附き申したのか。」「人々が怪しんでゐる中に、兼通は装束を着けてやがて参内した。参内して見るに兼家は既に天皇の御前に近く待つてゐる。兼家は兼通がもう薨じたを聞いて、關白の事をお願ひ申さうと思つて、さきに参内したのであるが、そこへ兼通が参朝して來たから、兼家は驚いてその場を退出した。やがて兼通は從弟の頼忠に關白を譲り、兼家をのけ者にしてしまつた。

次に冷泉天皇の皇子がお立ちになつた。即ち花山天皇(第六十)に申し上げる。先帝圓融天

皇の皇子懐仁親王が皇太子に立たれた。太子は兼家の女詮子の御腹である。兼家は關白なる事が出来ず、始終遺憾に思つてゐたが、かうなるに太子さへ即位なされたら、自分が關白となり外戚の權を振へると思ひ、天皇が早く讓位をなさるやうに常に祈つてゐた。たまに妃の弘徽殿の女御がかくれられて、天皇は非常に御悲歎遊ばし、浮世もお厭ひ遊ばされた御様子であつたので、兼家は第二子道兼と相談してよく言ひふくめ、我が後に攝政を譲るに約して天皇に御退位をお勧め申させた。それで道兼は天皇の御歎に乗じて、「御一緒に出家致しませう。」と折々につけて勧め奉つたので、天皇は遂に御心を動かせられ、一夜道兼を伴なはれ、御位を讓つて密かに花山寺へ御出でになつて御髪を落された。しかし道兼は御約束にそむき、一緒に出家をしないで父の許に歸つてしまつた。兼家は先に兄と争つて兄弟の道を破り、また關白にならうとして君臣の義を亂したのである。實にその行は不徳を極めたものであつた。

花山天皇が御出家なされたので皇太子が即位あらせられた。一條天皇(第六十)と申し上げ



藤原氏の外戚關係系圖 (作圖の便宜上兄弟の順を變へた所がある。)

る。兼家は望の如くに攝政になつたが、やがて薨じて長子道隆が關白になつた。弟の道兼は先の約束違つたので大いに不平であつたから、父の喪中にも少しも悲しい姿を見せず、客を集めて遊宴にふけてゐた云ふ。その中に道隆が薨じたので、道兼は望の如く關白になるこゝが出来た。しかし道隆の子の伊周はこれを怨んで人をして道兼を呪はせた。道兼が關白になつた時は病床に臥してゐて、やがて十日を出ずして薨じた。世に七日關白と言はれた。道兼の薨去により伊周は關白に任ぜられるこゝを考へてゐたのに、ついで道兼の弟の道長が政を執るやうになつたので、伊周は益々不快で、亂行が數度に及んだ爲、遂に太宰權帥に遷された。かくの如く數十年の間に藤原氏一門の勢力の争は年一年激烈になつたが、道長はその最後の勝利を占めたのである。

一條天皇には先に道隆の女の定子が宮に入つて皇后になられたが、道長は女の彰子を更に入内させ、皇后と共に並んで中宮と稱せられ給うた。上東門院と申す。一條天皇の次に花山天皇の御弟がお立ちになつた。三條天皇(第六十)と申し上げる。天皇は常に道長の專横を

悪まれたが、當時盛んな藤原氏の勢は天皇の御力を以てお抑へ遊ばすこゝが出来ず、大いに御不満に思召された。在位が僅かに六年にして御眼を悩まれ御失明になられたので、その爲遂に道長の御勸により、御心ならずも御位をお譲りになるこゝになつた。或月の明かつた夜に、殊に御感慨が深く、

心にもあらで憂き世に永らへば戀しかるべき夜半の月かな。

(惜しくもない命を永らへて辛い世に住んでゐたら今夜の宮中の月を戀しく思ふ時もあるうと云ふ行末かけての思召である)

御製あらせられた。御次に上東門院の御腹である後一條天皇(第六十)が即位せられ、その御次に御弟後朱雀天皇(第六十)がお嗣ぎになつた。道長は氏の長者となり、一條・三條・後一條の三天皇に仕へて政權を執るこゝ三十餘年にわたり、その四女は宮中に入り、後一條・後朱雀・後冷泉三天皇はその外孫に當らせ給うたのである。その莊園は天下に遍く、富は皇室に越えて、すこぶる榮華をつくした。

されば常々專横の振舞がなかく、多く、朝臣は皆その威勢に畏服して敢てその旨にそむく者もなかつた。道長はその別荘として京都に法成寺を建立したが、その結構は善美を極めたものであつて、殿堂内部の組物、梁等には紫檀等の名木を用ひ、裝飾に蒔繪螺鈿を施し寶玉を鏤め、ひそかに聖武天皇勅願建立の東大寺に比し奉つたのである。國家の財用を傾けて奇材巨石を集めさせた上に、宮中諸官省及び神泉苑（京都にあり、桓武天皇の設けられた皇室の御林園であつた）等の石をも採らせて憚らなかつた。たま／＼道長が病つたので嗣子頼通は此の功を速かにしようとして諸國に令し「寧ろ公の政事を緩うしても、此の役を怠るな。」と言つた位であつた。寺が出来上つて道長はこゝに住んだので、世に法成寺攝政と言ひまた御堂關白と呼んだ。かつて三女威子が入内して後一條天皇の中宮なられた時、

この世をばわが世ぞ思ふ望月のかけたるこもなしとおもへば。

（この世は自分の爲の世であるやうに思ふ、例へば足りない満月のやうである）

こそその全盛を誇つた。此の得意に對し、前の三條天皇の御製を比し奉れば如何、實に畏き

極みではないか。

かく久しく道長が朝廷の重職に立つたから、此の後は、同じ藤原氏の中でも、道長の血統が獨り榮えて、攝政・關白は特に道長の子孫に限つて任ぜられることになつた。しかし藤原氏は道長の一代を絶頂として、これより後は次第に衰運に傾いたのである。

第二十一 平安時代盛時の文化

平安時代の中でも、殊にその中頃の二百年間即ち藤原氏の權勢を専らにした時代は最も太平な華やかな時代であつて、平安時代の前期即ち謂はゆる弘仁時代に始つた支那文明の同化力は益々發達し、宇多天皇の御代に遣唐使が廢絶されてからは、一層その特色を増して來て、あらゆる方面に我が國固有の優美な艶麗な風雅な特色を現すやうになつたのである。

漢文學は弘仁時代にはさぶる盛んであつた。藤原時代になつても、その始には菅原道實・紀長谷雄・三善清行等の大家が輩出したが、遣唐使を停められてからは漸次衰へ、加ふ

るに朝政が藤原氏の私事のやうになつて紊亂するにつれて、令の規定した大學・國學は次第に荒廢し、漢文學の研究は一層衰へるやうになつたのである。

平安時代の始め頃、漢字の草體から平假名、偏旁より片假名が案出されて、國語を記すことが大へん便利になつて來た。しかしなほ男子は主として漢文を學び、假名を用ひる國文は主として女子に使用されたから、これを特に女文字と稱した程であつた。されば、紀貫之が朱雀天皇の御代に、土佐守の任がすんで、歸京する道中を書いた土佐日記を國文で書くに女子らしく装ひ、わざ／＼卷頭に「女子が書くのだ。」と斷つてゐる。和歌は奈良時代の末に一旦衰へたが、やがて再び次第に復活し、清和天皇の頃から再び隆盛になつた。世に六歌仙と稱せられる小野小町・在原業平・大伴黑主・文屋康秀・僧正遍昭・喜撰法師等も此の御代に出た人である。中にも小町業平が最も勝れてゐて、立派な作が多い。

小野小町

いろ見えでうつろふものは世の中の人々の心の花にぞありける。

(花のやうに色はないが花のやうに變りやすいものは人の心である)

業平が或年に東の方へ下つて行つたことがあつた。三河國(愛知)八橋に云ふ處に着き、澤の木蔭に一休するに、そこに燕子花がい面白く咲いてゐたので、或人が「かきつばた」云ふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め。「勧めたから業平は、

から衣きつ、馴れにしつ、ましあればはるる來ぬるたびをしぞ思ふ。

と詠んだので、人々は皆その巧妙な作に感じた云ふことである。大體の意味は、唐衣を着馴れてゐるやうに、年來馴添つてゐる妻が故里にゐるから、はる／＼やつて來た旅の愁が一層深い云ふ意味である。歌が上手に出來てゐる上に、うまく、「かきつばた」の五文字がいつてゐるのは、中々立派な作と言はなければならぬ。更に旅を續けて武藏國角田河(東京)に着いた。「遠くも來たものかな。」と思つて故郷の事を偲んでゐるに、渡守が「早く乗つて下さい。日が暮れます。」と云ふので乗つた。白い鳥の嘴と脚とが赤く、鳴位の大きさが、水の上で遊びながら魚を食つてゐる。京には見えぬ鳥なので、渡守に問ふに「都鳥」に答へた

のを聞いて、「都鳥云ふ名を負うてるのなら、都鳥よ、汝に一つ問ひたいことがある。都には我が思ふ人は健康であるか否うか、答へてほしいものである。」と次のやうに、
名にしおはゞいざこ問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと。
と詠んだので、舟中こそつて泣いたと云ふ。

春の野や子の日にしたり六歌仙。

子規

延喜の頃には和歌の名手に紀貫之、凡河内躬恆、紀友則等があつた。これ等の人は延喜五年（一五六五年）に勅命によつて古今和歌集を撰んだ。これが勅撰和歌集の始であつて、その後二十回、室町時代の中頃まで歌集の勅撰がつづいた。總稱して二十一代集と呼んでゐる。古今集は此の最初の勅撰集として、後代の模範となり典型となつた。撰者である紀貫之は當時の歌人の代表者として歌仙の名を得てゐた。しかし當時から和歌はもはや自由な感想を歌ふものではなく、或形式にはまつた思想を歌ふものとなり、教養あるものの弄び物となつてしまつた。その頃の有名な歌の二三をあけるこ、

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉こあざむく。

（蓮は泥の中に咲いても誠に清らかで少しもよこれておないが、葉の上の露を玉こみせるのは人を欺くもので不正直である）

素性法師

底ひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波はたて。

（底もないやうな深淵には波はたゞぬ、山川の浅い瀬にこそすぐ波が立つものである）

大江千里

秋の日は山の端近し暮れぬ間に母に見えなん歩めわが馳。

紀友則

君ならでたれにか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞしる。

凡河内躬恆

春の夜の闇はあやなし梅の花いろこそ見えね香やはかくる。

(春の夜の闇を人に見立てた歌である、闇は道理のわからない者である、梅花の色を隠しても香は隠せない、それくらゐなら一層のこそ、色たも隠さないのがよい)

紀貫之

櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける。

(櫻の花の散るのを雪に見立てた歌である)

人はいさ心もしらずふるさは花ぞむかしの香にほひける。

(花は昔の通りに咲いてゐるが、人の心はさうであらうか、あてにはならぬ)

更に國文學は他の小説や日記の方面にも發達して 早く竹取物語 伊勢物語等の物語が出

來、ついで貫之の土佐日記のやうな紀行も出來た。竹取物語は竹の中から生れたかぐや姫の

話で、伊勢物語は主として業平の歌その由來を記したものである。ついで村上天皇の御代

に源順、大中臣能宣等梨壺の五人に仰せて、後撰和歌集を撰せしめられ、一條天皇の御

代に藤原公任に拾遺和歌集を勅撰せしめられた。古今集と共に三代集と呼ばれる。一條天皇の御代には才女が花の如く宮中に集り、その間に大文學が起り、文學史上に最高價値の傑作を遺した。清少納言は皇后定子に仕へた男まさりの才氣縦横な婦人で、その隨筆枕草紙は鋭い觀察と、珍らしい着想を以て聞えてゐる。或年の冬、雪のふり積つた日、皇后は御前の女房たちに向はせて「香爐峰の雪は如何に。」と仰せられた時、少納言は直に座を起つて御前の御簾を捲き上げた。その譯は唐の白樂天が老後に廬山の麓に庵を結んで住んだ折に、詠んだ詩の中に、

遺愛寺鐘 欝枕聽 香爐峰雪撥簾看

ごあるのを、皇后には御會得あつて仰せられたのを、當時は皆かゝる詩は諳じて、口ずさみもしてゐるが、不意に考へ及ばなかつたのを、早くも清少納言は御心を推し參らせたのである。清少納言に對してその才學をうたはれたのは中宮彰子(上東)に仕へた紫式部である。才はじけた清少納言は反對に、誠に溫雅貞淑で、學問は深かつたけれども少しも誇らしい様子

を見せなかつた。幼時から人の書を読むのを聞いて皆誦じた。兄が史記を読んで時々忘れる所があるに、側から教へた程であつた。されば父は常に戯れて「お前が男でないのが残念だ。」と言つた云ふことである。その著源氏物語五十四帖は、學問も深く姿も勝れた當時の理想的人物たる源氏の君を中心として、その頃の宮廷の生活をえがき出した小説であつて、文章は流麗、組立は巧妙、古今一言ははれてゐる永遠の傑作である。一條天皇が或時人に此の源氏物語を讀ませて聞し召し、「此の人は日本紀をよく讀んでゐるだらう。」と仰せられたから日本紀局と言ひはやされた。世俗に紫式部は近江の石山寺(大津市)に籠つて此の物語を書いたと傳へられ、源氏間が今もその寺内に残つてゐる。

石山の霧に汗ばむ塗机。

(川柳)

比叡おろし式部一枚書きなほし。

(同)

雪のなぞ解けて御簾を捲きあける。

(同)

餘の官女たゞ口あいて舌をまき。

(同)

赤染衛門は歴史物語「榮華物語」の著者と言はれ、紫式部の女大貳三位は小説「狭衣物語」を作つたと傳へられてゐる。その他、伊勢大輔・和泉式部・馬内侍及び和泉式部の女小式部内侍も紫式部の頃の人で、皆共に才媛の譽が高かつた。

和泉式部

暗きより暗きみちにぞ入りぬべき遙かに照らせ山のはの月。

伊勢大輔

古の奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな。

此の歌は一條天皇の時に奈良の八重櫻を献上した人があつた。その花を題で伊勢大輔が詠んだ歌である。九重は宮中のことであるが、八重が九重に匂ふと言つた所が巧である。

小式部内侍

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立。

右の大江山の歌についてはかう云ふ話がある。小式部内侍は若いのに、歌が上手なので、